テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン3
フリオとキャロの大冒険 上
工藤 治
Osamu Kudo
テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン3
SPECIAL STORY
ファミ通文庫

工藤　治

Osamu Kudo

7月25日生まれ、奈良県出身。少年ジャンプノベル・ノンフィクション大賞で受賞後に作家デビュー。演劇的な熱血台詞まわしが『工藤節』と呼ばれ、お芝居好きの人たちから根強く支持されている。『アトリエ』シリーズ（ファミ通文庫・全4冊）、『モエかん～緊急指令！　妹島を攻略せよ！～』（ファミ通文庫）、『テイルズ オブ ザ ワールド・なりきりダンジョン2』（集英社刊）など著作多数。

中嶋敦子

Atsuko Nakajima

横浜市生まれ。フリーのアニメーター。『らんま1／2』、『逮捕しちゃうぞ』、『ゲットバッカーズ』等、多数の人気アニメシリーズでキャラクターデザイン・作画監督を担当。『ガンナー』（ファミ通文庫）、『テイルズ オブ シンフォニア 久遠の輝き』（全4巻・ファミ通文庫）、『テイルズ オブ シンフォニア 青翠の器』（ファミ通文庫）、『逮捕しちゃうぞ』（講談社）など小説イラストも手掛ける。

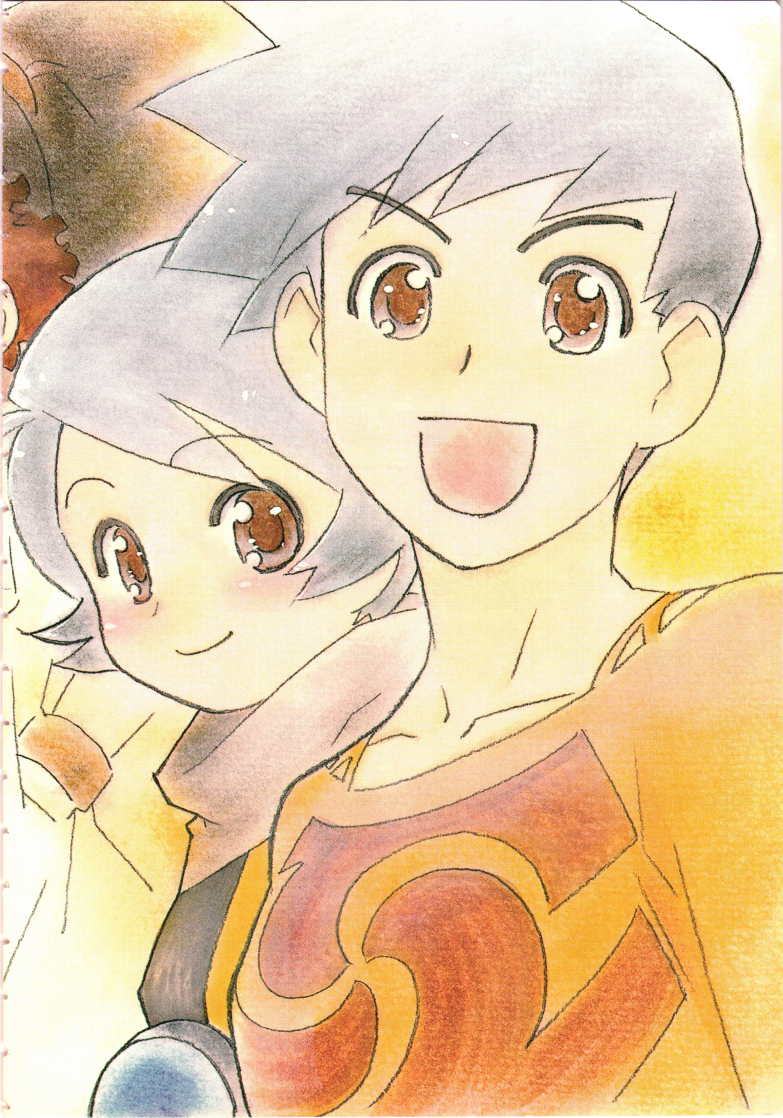
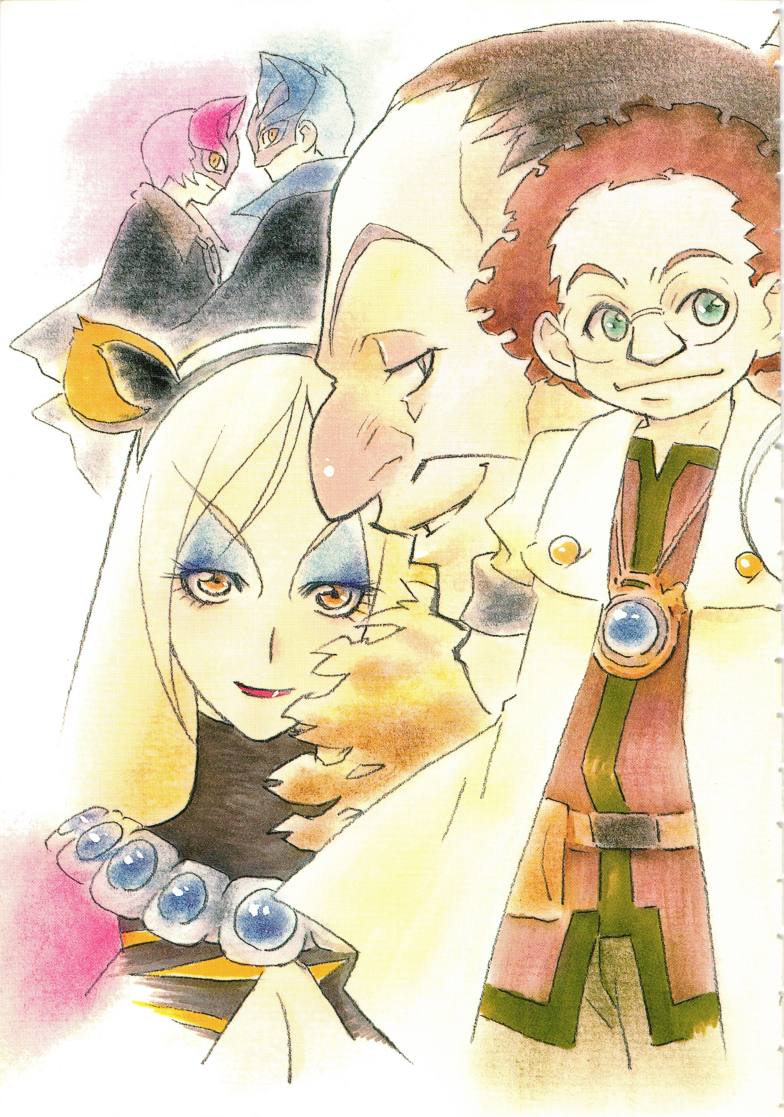
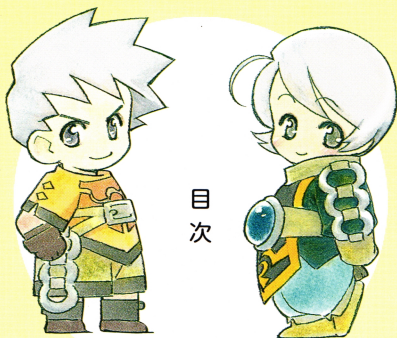
カバーイラスト　中嶋敦子

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 上

工藤 治

Tales of the World
NARIKIRI DUNGEON 3

目次

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 上

工藤　治

ファミ通文庫

イラスト　中嶋敦子

序章　世界を変えるやつら

＊＊＊

「ご安心くださいエルレインさま！　作戦はすべて予定どおりにございます！」
クライトは跪いて報告した。
「それにエルレインさま。もっと喜ばしいご報告がございます。あたしの部下たちがこの遺跡にやってくる予定のガキどもを罠に嵌め、到着を遅らせております！」
クライトの隣で、同じく跪いたポニーも畏まる。
ポニーはクライトにとって自慢のパートナーであった。金髪を長く垂らし、すらりと背の高い綺麗な女性だ。
卑屈な笑いをすぐに浮かべてしまうクライトとは対照的であったが、二人はなぜか深く結ばれていた。
二人の前には宝石をちりばめた豪華な冠を載せ、高貴な衣をまとった美しい女性が立っている。

「リアラとカイルという少年の出会いが、さほど重要とは思えませんが……」

そのエルレインが言った。

新デスティニー伝説の歴史において、世界を変えてしまうほどの力を誇る重要人物である。

エルレインの背後には巨大な樹木がそびえ立ち、根の部分には巨大なレンズが眠っている。それこそは、とある少年との出会いを待ち続ける歴史的意味のあるレンズだった。

エルレインは幹の根に収まったレンズに一瞥(いちべつ)をくれたあと、目の前で畏まった二人に訊ねる。

「私には、もっとほかにすることがあります。人々の救済……そのために、ここで私は何を待つというのです？」

「い、いえ！　もう少々でございます、もう少々ここでお待ちください！」

「クライトの言うとおりにございます！　すぐにです、すぐにカイルとロニがここにまいりますので、お力をぜひお示しください。そのときこそ、エルレインさまが歴史を正しい道に戻されるとき！」

二人は慌(あわ)ててエルレインを引き止めようとした。

「よくお聞きください、エルレインさま。そのガキどもは歴史を動かす不思議な力を持っているのです。決して侮(あなど)ってはなりません。たとえ腐った杭一本でも、熱いうちに叩

かねば火事の元と言いますぞ」
「そ、そうですとも。あいつらさえここで倒せば、あとはエルレインさまのお望みのままです」
一瞬の間があった。
苔の生えた石段の上に、まるで純白の女神のように立つエルレインはしばし考えたのちに決断した。
「まあいいでしょう。その言葉が真実か否か拝見いたしましょう……」
それを聞いて、二人がほっとした瞬間だった。
ラグナ遺跡の最上段に異変が感じられた。二人にとってなじみのある特殊な電子音が響き渡ったのだ。
「と、父ちゃん！」
「これは、もしかして！　エルレインさま、ちょっと見てまいります！」
慌ててクライトは、妻のポニーを連れて石段を駆け下りていった。
駆け下りた先は遺跡の大きな陥没が開いており、段違いに低くなった向こう岸と切り離されていた。
「あ、あれは――ドリーム号！」
妻のポニーが叫ぶ。

向こう岸には、たった今、時空を超えてきたと思われる物体が存在した。青いラインと幾何学的模様の入った黒い球体の上に、大小二つの輪っかを載せた大きな時空転移装置である。

「あいつら、二台目のドリーム号を古代遺跡で見つけたっていうんだね？」

「そのようだな……」

ポニーのつぶやきに、夫のクライトが答える。

「ご丁寧に、あたしらのことを追っかけてきたってわけかい？」

「そのようだな……」

「父ちゃん、同じことばっか言ってないで、どうすンだい？」

「ううっ……」

クライトは、妻のポニーに叱られてしまった。

「ほらほら相槌ばっか打ってないで、どうするか考えなよ。あたしは奴らを見張ってるからさ」

妻のポニーが物陰に隠れて、こっそりと顔を出す。出現したドリーム2号からは、少年と少女が降り立っていた。

あどけない顔だちをして、二人ともまだ十五歳ぐらいに見える。男の子は人なつっこい顔をし、《なりきり服》と呼ばれる服をまとっている。女の子も同様のなりきり服を

まとい、短い髪に活発そうな顔をしていた。
　フリオとキャロである。
「やっぱり、あの子らかい……」
　彼らのことはポニーとクライトもよく知っていた。ミナクルの町で古代史研究所に忍び込んだとき、そこの所長を務めるブラウン博士と彼らが話しているところを盗み聞きしていたのだ。そしてその夜に、ポニーとクライトはブラウン博士が古代遺跡で発見したドリーム1号を盗み出し、その時空転移能力を使ってこの新デスティニー伝説の世界に降り立ったのだった。
「フン！　それにあの子ら、助っ人まで連れてきてるじゃないの――」
　ポニーは物陰からフリオとキャロたちを恨めしく睨んだ。彼らのあとに続いて、ドリーム2号からは精悍な顔つきの英雄たちがぞろぞろと降り立ってくるのが見える。おそらくこの新デスティニー伝説以外の世界から招いた英雄たちなのだろう。
「どうする、父ちゃん？　あいつら今にもこっちへたどり着きそうだよ」
「こうなったら作戦変更だ。あいつらにエルレインを倒してもらおう」
「フリオとキャロにかい？　まあ、あの子たちは頼りないけど後ろについている英雄たちなら、いい勝負するかもしれないね」
　妻のポニーは、にやりとして頷く。

8

「よし、そうと決まったらこのままどこかに隠れちまおう」
「あいよ、父ちゃん」
クライトたちはエルレインの許(もと)には戻らず、物陰を伝って脇に隠したドリーム１号へと移動していった。

第一章　そして冒険は始まった！

＊＊＊

『テイルズ　オブ』シリーズと呼ばれる数々の英雄伝説が語り継がれている世界……。
その世界の片隅(かたすみ)にあるミナクルの町。
数年前に起きた地震のあと、町外れで超古代文明の遺跡が偶然発見された。
発掘調査の中心人物はブラウン博士。
博士の助手は、伝説の英雄(ヒーロー)たちに憧れる明るく元気な少年と少女。
フリオとキャロだった。
「博士――これに乗れば、本当に伝説の英雄たちに会いに行けるのね？」
「そうじゃ、この装置は超古代文明の遺産。時間や空間を自在に飛ぶことができる夢のマシンじゃ」
「うぉーし！　リッドとロイドのサインをゲットするぞ！」

フリオが古代史研究所の中で叫ぶ。
「リオン様に会うとなると……何を着て行こうかしら」
　キャロはうっとりとする。
「服か……服なら、いいのがあるぞ」
　恰幅(かっぷく)のいい、年齢は五十代ぐらいのブラウン博士が言った。
「え、かわいいドレスとか？」
「まあ楽しみにしておれ。とりあえず乗員の登録を済ませよう」
　そう言って、ブラウン博士は黒い球体に赤と黄色で幾何学的模様(きかがくてきもよう)が描かれたドリーム号に近づく。超古代遺跡の中で同時に発見された石版によると、ドリーム号は――〝時空転移装置〟と呼ばれている。
　現在から別の時空に行き、戻ってくることができるという、奇跡の装置だった。
「しかし、石版には――こうも書かれてあった」
　ハッチを開けたドリーム号の中に潜り込み、フリオとキャロの名前を仮登録するブラウン博士が言った。
『使用の際は、別の世界の出来事にむやみに干渉(かんしょう)するな！』
『小さな変化が時間とともに拡大し、後世に大きな影響を与える――』

と、刻まれてあったのだ。
「わざわざ石版で警告してるってことは……過去にヤバイことがあったのかもな？」
フリオが神妙な顔で言った。

＊＊＊

「まだ寝ないの？」
その夜、キャロはドアが開けっぱなしのフリオの部屋を覗き込んで言った。平和なミナクルの町の一角にある孤児院『あすなろ園』――そこが、二人の住まいだった。
「なんだか興奮しちゃってさ。それに最初の行き先も決めないと、いけないないだろ」
ベッドの上に英雄伝説の本を広げて寝ころんだフリオは、足をパタパタさせながら答える。
フリオの行儀（ぎょうぎ）の悪さに、キャロはため息をついた。
「……で、暗記するほど読んだ英雄の伝説を、まーた読み直してるわけね？」
「そうなんだけどさ……なんだか変なんだよ。前に読んだときと話が違うような……」
「まさか、そんなことあるわけないでしょ？」

「……だよなあ」
フリオは英雄伝説のページをめくりながらつぶやく。
「起きてるうちから寝ぼけるなんて、さすがフリオ！　明日は今日より大変に決まってるの。だから私は、明日のためにもう寝るわ、おやすみ～」
と、フリオの部屋のドアを閉めて、キャロは自分の部屋に向かった。パタパタと、足音が遠ざかる。
「明日は今日より大変、か……そうだな、オレも寝るとするか」
フリオは、キャロの言ったことをつぶやき返すと本を閉じた。
そしてその夜、重要な事件が起こる。
古代史研究所の施設内に安置されたドリーム号が、何者かによって盗まれてしまったのだ。
「たたた、たいへん大変、大変じゃ!!」
翌朝、ブラウン博士は大騒ぎした。消えたドリーム号を探して施設内を駆け回り、お鍋のフタも開けて中を探したりした。だが、どこにもドリーム号はなかった。
「あれは、やっぱり夢じゃなかったんじゃ……」
ヘナヘナと力が抜けて、その場に座り込んでしまった。
「どうしたんですか、ブラウン博士？」

あすなろ園から駆けつけたフリオとキャロが、心配そうに覗き込む。
ブラウン博士は深く息をついた。
「いやな、ゆうべ……ここで最終チェックをしておったら、おたずね者の泥棒夫婦が現れてな……わしをいきなり殴って気絶させたあと、どうやらドリーム号を盗んでいったようなんじゃ――」
「お、おたずね者の泥棒夫婦？　まさか、ポニーとクライトですか⁉」
フリオはハッと思い出した。ミナクルの町の保安官事務所に張り出された指名手配中の絵を見たことがあるのだ。
それによるとクライトは頬がコケるほど痩せてて、左右に一本の長い髭を伸ばしていた。目つきが怖そうな印象だった。一方の妻のポニーは金髪の美人で、化粧が濃い。顔だちもキツそうだった。色っぽいんだけど、デレッとして油断したとたんに大事な物を盗まれてしまうといった、そんな抜け目のなさが彼女にはあるように感じられた。
指名手配の絵を見ただけだから実際の人物に会ったら、すぐ本人だとわからないかもしれない――でも、フリオは他人を騙すことを生き甲斐にしているようなあの二人の顔だけは、決して忘れられないと思っていた。
「でも……その二人が、なんでドリーム号を？」
「英雄に会いに行った……とか？」

「まさか――」
フリオは、キャロの推測を打ち消した。でも――だったら、ドリーム号を盗んで何をするつもりなのだろう。
「ちょっと待って、フリオ！」
思い出したようにキャロが叫んだ。
「ねえ、ゆうべ――確か、英雄伝説が書き換えられてたのよね！」
「あっ！」
フリオも思い出して声を上げた。
「どう変わっていたの!?」
「ちょっと待って！　オレ、いつも持ってるんだ！」
と、懐（ふところ）にしまってある英雄伝説を大事そうに取り出した。
「な、何よ、服の中じゃなくて、鞄とかに入れて持ち歩きなさいよ」
「このほうが、英雄たちの魂が伝わってくるんだよ！　肌から直接、オレの胸にな！」
「ええ～、気持ち悪い～」
「何ィ!?　何か言ったかぁ!?」
「いいえ、なんでもないわよ……それで、なんて書いてあったの？」
「ああ、そうだ――ヘンなのは新デスティニー伝説の〝出会いの遺跡〟の場面なんだ

よ」
「確か……ヒーローとヒロインが出会う有名なシーンよね？　どれどれ……」
　横からキャロが覗き込んで読み上げる。
「えーっと……『もうすぐ聖女リアラが誕生します。しかし……運命の人、カイルは遺跡に到着していません。さらに恐ろしいことに……もうひとりの聖女エルレインが、カイルを倒そうとして待ち受けていたのです』って……何コレ！　最後の敵が、いきなり初めに出てくるなんて反則じゃない⁉　それにカイルもこんな大事なときに、なんで遅刻なんかしてるのよォ‼　これじゃリアラが、かわいそうじゃないの！」
　信じられないと、ひとり大騒ぎするキャロ。
　ロマンチックな伝説の名場面が書き換えられたとあっては、『テイルズ オブ』世界のファンとしては黙っていられない。――なんとかしなきゃ！
と、考え込んだキャロたちの横で、それまで黙って聞いていたブラウン博士が二人以上に大きな声で、
「たたた、たいへん大変、大変じゃあ‼　もしそれが本当なら、あの泥棒夫婦は――ドリーム号を使い、世界や歴史を変えようとしていることになるぞ！」
「世界や、歴史が、変わる？？？？」
　フリオが目を丸くさせる。

「そうじゃ！　倒されるはずの悪が正義の味方を倒し、生まれるべき者が闇の中に消える……そう、あってはならない歴史の改変が次々に起こりうるんじゃ！」
「うそッ!?　たいへん！　止めなきゃ！」
「そうだ！　ドリーム号をもう一台造って、追いかけようぜ！」
キャロもフリオも、身を乗り出す。
迫られたブラウン博士は我に返ったように小さく答える。
「それは無理じゃ、修理ならともかく……あれをイチから造ることなど、今の技術ではとうてい不可能じゃ……」
「じゃあ、どうすればいいの……」
「ちきしょう！　世界や歴史がメチャクチャにされるのを、指をくわえて見ているだけなのかよ！」
「そんな……」
三人の気持ちが沈んだときだった。
突然、古代史研究所の中庭に異変が起こった。
時空が歪（ゆが）み、別世界からの扉が開いたかのようにプラズマが走り、あたりに放電した。
「な、なんじゃと!?」
振り返ったブラウン博士は、茶褐色（ちゃかっしょく）の髪をかきむしりながら驚く。

「あ……あれは、ドリーム号？」
キャロは、光の渦（うず）の中から現れた物体に注目した。
「でも、なんだか色が違うぞ⁉」
隣のフリオは目をぱちくりさせた。
しかしそれは表面のカラーリングこそ違うものの、形状は明らかにドリーム号だった。
黒い球体に青と白の幾何学的模様が描かれ、大小二つの輪っかが回転していた。
あえて言うならば、それはドリーム2号と言えた。別世界から移動してきたと思われるドリーム2号は、プシューと水蒸気を噴き出し、やがてハッチが開いた。
中から降り立った人物が、こちらに向かってくる。
「お、おい、ドリーム号から誰か降りてきたぞ！　――あ、あれは博士？」
「でも　なんだか髪の色が違うわ」
二人は寄り添ってドキドキした。知っている人が、もうひとり現れたのだ。
だが白衣をまとうその人は、ふっくらとしてまん丸い顔だちは同じなのだが、髪の毛の色が茶褐色ではなく白髪に染まっていた。
「わしは、百日後の未来からやってきたブラウン博士じゃ」
もうひとりのブラウン博士はフリオとキャロに歩み寄ってくると、にっこりと微笑み、本人とまったく同じ声質で喋（しゃべ）った。

「ややこしいから、とりあえずわしのことは、この白髪頭に合わせてホワイト博士と呼んでくれい」

照れくささそうに言った。

「そしてあれは、ドリーム2号！」

白髪のホワイト博士は、続けて自分が乗ってきたドリーム号を指し示す。

「今から一ヶ月後に遺跡の奥で見つかる、もう一台の時空転移装置じゃ！　ふうっ……やっと修理が終わった……」

不眠不休の作業を思い出したかのように、ホワイト博士はため息をつく。

フリオとキャロの隣にいるブラウン博士と見比べると、本当に瓜二つの双子が向かい合ってるように見えた。

「――で、オレたちのピンチに駆けつけてくれた、そういうわけですね？」

呑み込みの早いフリオは、ホワイト博士の説明に納得した。

「え？　あー、ああ……も、もちろんだとも」

「だったら、とにかく！」

頷き返したホワイト博士に、キャロは訴える。

「そうだよ！　あのドリーム2号で、犯人を追いかけようぜ！」

フリオは、ドリーム2号に急いで向かおうとする。事情がわかれば、あとは行動する

だけだ。
「ちょっと待った!!」
ブラウン博士とホワイト博士が同時に呼び止めた。さすが本人同士だ。その声を張り上げたときの息もぴったりと合っている。
「わしから、二人にプレゼントがあるのじゃ」
茶褐色の髪をしたブラウン博士が、キャロに歩み寄った。
「あッ、昨日言ってた、お出かけ用のステキな服ね？」
「これは《なりきり服》じゃ――」
と、いつの間にか研究室の中から持ってきた服を掲(かか)げて見せた。
「なりきり服……」
「遺跡で見つけた、超古代文明のもうひとつの遺産じゃよ」
ブラウン博士は自慢げに言った。
「そうそう！　それは状況に応じて、どんな職業にも変身できる優(すぐ)れものじゃ！」
ブラウン博士の話を聞いていた、ホワイト博士も説明を付け足す。
なりきり服――。
それは遺跡に残されていた石版によると――時空転移装置の技術を応用した万能(ばんのう)スーツ、と書いてあった。

着用者の遠い未来の可能性のひとつを、現在に具現化するため——宿命をもって生まれた者や、先の見えてしまった大人にはまるで効果がない。

しかし、〝心清き者〟がこれを使えば——その秘められた力を発揮できるだろうということだった。

「要するに〝心清き者〟って、将来が定まってない浮ついたヤツのことをいうの？」

キャロが恐ろしいことを口にする。

「せめて〝夢見る若者〟とか、〝多感な少年少女〟とか言おうぜ……」

「でも私たちって、そんなに純粋かしら？　本当に着られるの？」

「いや！　おまえたちなら大丈夫！　それを着て、なりきり師になるのじゃ！」

「まあ、いいや。このなりきり服を着て、ポニーとクライトを捕まえに行こうぜ！」

ブラウン博士に太鼓判を押され、フリオが熱血したときだった。

「ちょっと待て！」

ホワイト博士が、また止めた。

「旅立つ前にひとつ、おまえたちに話しておきたいことがある」

真剣な声だった。

「未来のフリオとキャロのことじゃ……」

それを聞いて、キャロは訊ねた。

「あッ⁉　そういえば百日後の私たちは、どうしてるの？　元気？」
「あ、ああ……さ、さっきの、おまえたちと同じようにいきなりドリーム2号に飛び乗った。そ、そして帰ってきたのは……このドリーム2号だけじゃった……」
「それって、まさか⁉」
フリオの顔色が変わる。ホワイト博士の真剣な表情に、何かよからぬ想像がよぎった。
「……わしは、二度とおまえたちを失いたくない」
ホワイト博士がつぶやく。その声は重く悲しげだった。もしかすると、ブラウン博士の髪の毛が真っ白になるくらい、大変なことが百日後の未来に起こったのかもしれない。
「だから、強力な助っ人を探してきた！」
ホワイト博士は顔を上げて宣言した。それは、フリオとキャロが驚く助っ人——『テイルズ オブ』世界の英雄たちだったのだ。
ドリーム2号からは、次々に英雄たちが降りてくる。
まずはデスティニー伝説のスタン、マリー、コングマン。
「きゃあぁ！　本物のスタン様よ！　きゃあぁ！　私のほうを見たわ！」
キャロは飛び上がって、はしゃいだ。
続いて、エターニア伝説のリッド、ファラ、キール。
「し、しまった……色紙を忘れちまった！」

フリオはいきなりのことに、あたふたした。
最後はシンフォニア伝説のロイド、コレット、ジーニアス、リフィル。
「きゃああ！　ロイド様！　動いてる！　しゃべってる！」
キャロは卒倒しそうなくらいに喜ぶ。
今まで英雄伝説の書物などでしか知らなかった憧れのヒーローたちが、目の前にずらりと並んだのである。これは興奮しないほうがおかしい。
「……で、おまえたちの先生役をお願いしたのは――こちらのリフィルさんじゃ」
ホワイト博士はそう言って、隣に立っていた女性をフリオとキャロに紹介した。もちろん二人とも紹介されなくてもすでに知っている、シンフォニア伝説の英雄だ。
「ホワイト博士から〝くれぐれも〟と頼まれているから、ちょっと――厳しい先生かもしれないけど、ついてきてもらうわよ、よろしい？」
優しさの中にも威厳のある口調で、リフィルは二人に挨拶した。

＊＊＊

「なあキャロ、すげえと思わないか？　オレたち、伝説の場所に立ってるんだぜ。超感動だよな～」

フリオは観光気分のように、あたりを見回して言った。
「ほんとよね……ここで、カイルとリアアが運命の出会いを果たすのよね～」
隣に立つキャロも、うっとりした表情で遺跡を眺めている。
二人はドリーム2号に乗って、新デスティニー伝説のラグナ遺跡に降り立った。聖女リアラが誕生し、カイルと出会う場所である。そして時刻は新デスティニー伝説の歴史上で起きるカイルとリアラの出会いの、ほんの少し前だった。
「でも……想像していたのより、だいぶ狭くない？」
壮大な場所を想像していたのか、キャロは意外そうに付け加えた。
「ちょっとお二人さん――」
後ろで彼らの様子を見ていたリフィルが声をかける。
「いいこと？　伝説というものは、時がたつほど大げさになっていくものなのよ。それからね、この遺跡については……」
まるで先生みたいに雄弁になりかけたとたん、リフィルは自分にブレーキをかけた。
危うく自分の趣味に、突っ走るところだった。
リフィルは大の遺跡マニアなのだ。
だけど今は、フリオとキャロのためにも自重しなければならない。
「え、えっと……遺跡の話はまた今度にしましょう」

残念だが、そう言うしかなかった。
「私が言いたかったのは遺跡のことではなくて――二人は、今からみんなの指揮官になるのよ」
「指揮官?」
フリオがきょとんとする。
「そうよ、ごらんなさい。あなたたちを手助けするために、いろんな世界から集まった英雄たち――」
リフィルは、自分の後ろに並んだ九人の英雄たちに胸を張る。
もちろんその中には、リフィルの生徒だった子もいる。
まずは、勉強はからっきしできなかったけど心の優しいロイド。それから女神マーテルの信託を受け、世界を再生させる旅を続けてきた神子のコレット。リフィルの弟で勉強はできるけど、まだまだ子供っぽさが抜けないジーニアス。
彼ら三人はリフィルの生徒だったが、今は世界救済の旅を共にし、日々たくましく成長しつつあった。
「わぁ……シンフォニア伝説の英雄だ～。やっぱ、あらためて見るとスゲェ～」
フリオは、ロイドたちを眺めて感心する。
さらにリフィルたちの世界とは異なる、デスティニー伝説からも頼もしい助っ人が来

てくれていた。
　熱血漢で正直者で剣の腕も立つスタン。普段はのほほんとしているが闘いになると人が変わったように血気盛んになるという女戦士のマリー。デスティニー伝説の世界では格闘場のチャンピオンで、子供たちからも人気の的という全身筋肉の塊のコングマン。
「信じられないわ〜♪　世界を救った英雄たちと同じ場所に立って、しかも同じ空気を吸ってるなんて〜♪」
　キャロも、スタンたちを眺めてうっとりとする。
　そして最後にエターニア伝説からも三人の英雄たちが参加していた。
　剣術においては天賦の才を持っているが、自然体で生きていくことを望んでいるというリッド。いつも小難しい理論の書かれた本を読み、闘いには不向きそうな長身で痩せた体型のキール。そのキールとリッドの幼なじみで、格闘技も学んでいるという積極的で正義感の強い女の子のファラ。
　以上、九人の英雄たちがフリオとキャロの前に勢ぞろいしていた。
「すげえ……こうして並んでるの見ると、やっぱ超感激だよな！」
「そうよねフリオ、夢みたい。やっぱり私たちラッキーよね。伝説の英雄たちにこうして会えて！」
　ぴくっ、ぴくっ……。

二人の呑気でミーハーな会話を聞いているうちに、リフィル先生の眉がどんどんつり上がっていく。
「違う、違うのよ……感激したい気持ちはわかるけど、そうじゃないのよ！」
左右に跳ねた銀髪が乱れるぐらい、首をぶんぶん振って訴えた。
「先生、落ち着いて」
心配したロイドが声をかけてくる。
「あ、ごめんなさい……」
リフィルは我に返って謝る。
先生が生徒に窘められてしまった……それって、普通は逆でしょ？
と、リフィルは心の中で反省する。
つい焦ってしまったのだ。おそらく遺跡を前にして、我慢していることが反動となって焦りに変わったのだろう。
リフィルは深呼吸して、自分を落ち着かせた。
「いいこと、お二人さん？　あなたたちは、この英雄たちを引っ張っていくリーダー、つまり指揮官なのよ」
フリオとキャロの自覚を促すように、ゆっくりと言った。
「お、オレたちが指揮官？　リーダー？　こんな有名な英雄たちを前にして？」

フリオの顔が、みるみる驚きに変わっていく。
「よかったわ。やっと理解してくれたのね」
「で、でも！　オレたちがそんなことしちゃって、いいんですか？？」
「いいに決まってるでしょ」
「ええっ！　まさか！　信じられない！」
たじろぐフリオに、横からキャロが口を挟んだ。
「面白いじゃないのフリオ。それでリフィルさん、指揮官は何をすればいいんですか？」
どうやら彼女は、やる気になったらしい。
目を輝かせて聞いてくるキャロに、リフィルは満足そうに頷いた。
「よろしい……指揮官の仕事は大きく分けて二つ！」
さっそくリフィルは、二人の先生になったつもりでアドバイスを始めた。
「ひとつ、全チームの移動するルートを指定して、目的地点まで素早く行動させること。ふたつ、もしも敵に遭遇したら、闘うか逃げるかを指示。そして誰を闘わせて、誰を待機させて、ほかの敵の襲撃を警戒させるか、チームが全滅しないようその配分と役割を状況から的確に判断して全員に指示するのよ」
「えーっと……みんなの行き先を決めて、と……戦闘になったらオレたちが……」

リフィルの話を一気に聞かされたフリオは、復唱しながら覚えようとする。
だが、次第にやることの多さから、また驚きの顔へと戻ってしまう。
「そ、そんなに？　オレたち素人なのに、そんなに大変なことを？　嬉しいけど……だ、大丈夫かなぁ……」
「何を言ってるのよフリオ、明日は今日より大変なのよ♪」
「だけどよ、キャロ……」
「あらフリオ、まさか怖じ気づいちゃったの？」
「ち、違うぞ！」
「だったらいいじゃない。指揮官っていうの、私も前からやってみたかったのよ♪」
「前向きなのはいいことよキャロ。それにフリオ、心配しなくてもここにいる彼らは伝説の英雄たちよ。そう簡単に負けたりなんかしないわ」
「も、もちろんですよ！　負けるはずなんかないっ！」
英雄に憧れるフリオは力強く返事した。
「フフッ、その意気よフリオ。でも闘いはみんなに任せて――」
「えっ？　闘いは任せて？」
フリオが目を丸くする。
そこでロイドが話に割り込んできた。

「ま、はっきり言うとキミたちは、まだ戦力として期待されてないわけだ」
フリオは一瞬、気の抜けたような顔をした。
そして、次第に引きつった笑みを浮かべる。
「で、ですよね……ははは……」
普段ならそんなこと言われて怒りだすはずのフリオも、相手が伝説の英雄にして憧れの人となれば話も違う。素直に頭をかいて照れているだけだった。
「元気だしなさい。ロイドたちも最初は見ていられなかったのよ」
「リ、リフィル先生……何も今ここで、それを言わなくったって！」
ロイドが急に口を尖らせる。
「あ～、ロイドったら照れて赤くなってる～」
「コ、コレット！　オレは照れてるわけじゃないぞ！」
「心配しなくても大丈夫だよ、ロイド♪」
何が大丈夫なのかと、言い返したくなるようなコレットの余裕たっぷりな口ぶり。ロイドはそれを見て「負けた」と言わんばかりにがっくり肩を落とす。
「あははは、ロイドもコレットと姉さんの前じゃ、カッコつけられそうにないね！」
「ジ、ジーニアスまで……」
ますますロイドは立場がなくなって肩を落とす。

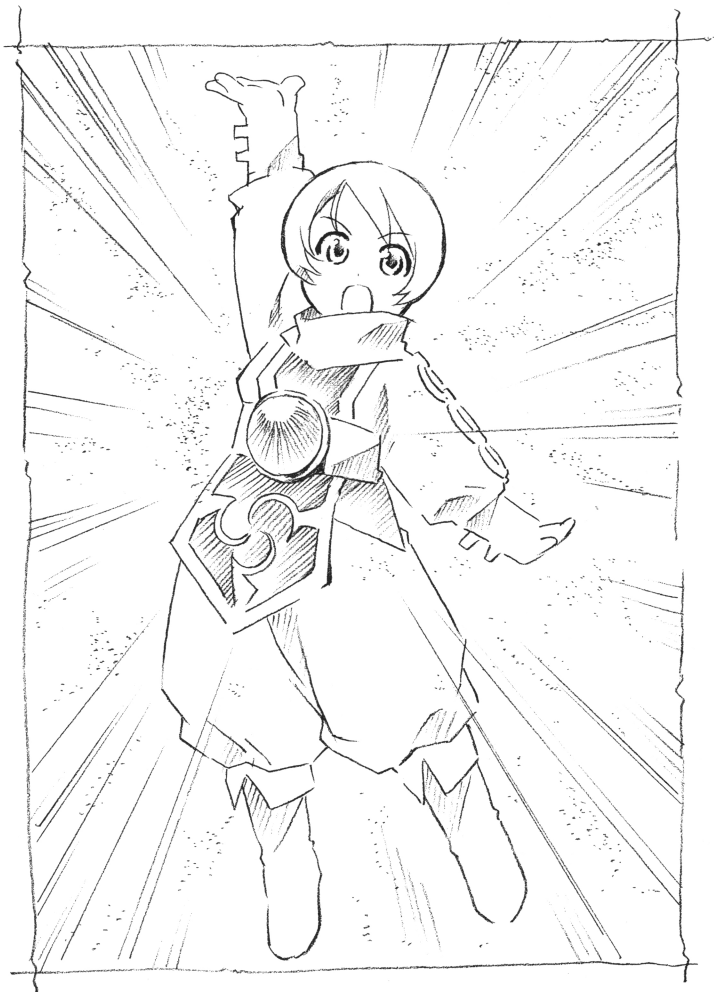
ちょっと言いすぎたかしらと思いながらも、リフィルは気持ちを引き締めて全員に振り返った。
「さ、行くわよ！　エルレインを倒して、伝説を元に戻しましょう！」
「――――」
その言葉に、九人の英雄たちが黙って頷き返す。
なんて壮観な、なんてカッコよすぎる光景だ……。
さすがのリフィルも、ちょっと心が揺さぶられてしまった。
あ、いけないわ……。
我に返って冷静になろうとした。ついでに気になったので、フリオたちのほうにちらりと視線も向けた。そして次の瞬間、リフィルは頭を抱えた。
「スゲェ～♪」
「ステキ～♪」
すでにフリオとキャロの二人は、目がハートマークに変化しているかのようにホレボレした表情になって、英雄たちを見つめていたのだった……。

＊＊＊

「どうしよう……ここから先、進めそうにないな」
フリオは立ち止まった。
リフィルを含めた十人の英雄を連れて、いきなり難題にぶつかってしまった。ラグナ遺跡の最上段に渡るための橋が見当たらないのだ。
目の前には大きな陥没があり、さらに高くなった向こう側の最上段には、とても人が飛び移れそうにない。
「困ったわね……最上段への階段って、崩れ落ちてしまったのかしら？」
キャロはおそるおそる、縁から陥没した穴の底を覗き込んでいる。
そんな二人の様子を後ろから眺めていたリフィルは、仕方なく声をかけた。
「何か、仕掛けがあるのかもしれないわね」
「仕掛け？」
フリオが振り返る。その目は答えをすぐに知りたそうな目だ。
「ダメよ。あなたたちはリーダーなんだから、ちゃんと私たちを導くために考えて」
「は、はあ……そう言われても」

フリオは困ったように頭をかく。
隣のキャロも、腕を組んで考え込んだ。
リフィルは、二人が自分たちの力で答えを見つけ出してくれることを辛抱強く待つことにした。
冷たいようだけど、ここは彼らに考えさせるしかない……。
ほかの九人の英雄たちを見ると、彼らも同じように考えているのか、二人に任せたまま黙って待ち続けている。
「あ……もしかしたら、別の場所に階段があるのかもよ！」
「そうだなキャロ！　それ、いい考えだよ！」
「でしょっ！」
二人の意見がひとつにまとまろうとしたときである。
「ちょ、ちょっと待ってよ。ほら、よく見てよ！　最上段の入り口のあそこ！」
たまらずジーニアスが前に出てくる。
「えっ？　どこどこ？」
フリオは、ジーニアスが指さした方向に視線を向ける。
「ほら、あそこだよ。あの最上段の壁に開いた、入り口の床の部分――あそこに出っ張りがあるじゃないか」

「ああ、ホント……あるわね」
キャロも、ジーニアスの指さす方向を見て頷いた。
「あの床の出っ張り、あれは何か仕掛けがありそうに見えるよ」
「うんうん、そうね……それから？」
「それからって……んもう！　せっかくヒント出してあげてるのに！」
ジーニアスはふくれっ面になり、ロイドたちの許に戻っていった。それをフリオとキャロは首をかしげながら見送っている。
「どうやらこれは、侵入者から祭壇を守る装置のようだな」
今度はロイドが助け船を出した。
「侵入者から守る装置？」
「そう。だが仕組みが複雑で、専門家以外はこれを起動させることはできないだろうね。さて、ここで僕の理論を説明させてもらえば、これは――」
キールが一歩前に出て、いきなり喋りだした。
これは長くなりそうだと、リフィルは慌てて口を挟む。
「あら、偶然ね！　そういえば私の生徒は、どんな職業にも変身できる〝なりきり師〟だったじゃないの！」
リフィルは、キールの解説を遮るようにわざと大声で言った。

二人は、今度はこっちのほうをきょとんと見ている。
「ほらほら、思い出してキャロ。あなたに似合う《学者の服》があったはずよね？」
リフィルは、とうとう最大のヒントを出した。
二人は、自分たちがなりきり師であることをすっかり忘れていたのだ。
「あ、ああ、なりきり服ですね！」
やっとキャロが思い出したように言う。
「そうよそうよ！　あなたたちの出番なのよ！」
リフィルは、今にもはしゃぎだしそうに煽る。自分が誘導したとおりに答えに行き着いてくれるのは、やっぱり教師として嬉しいものだ。
「わかりました、学者の服ですね！」
「そうそう、そのとおりよ！」
もはやヒントではなくて、答えそのものを言ってしまったような気がするが、とりあえずキールの長い解説を聞くよりはマシだろうとリフィルは思った。そのキールは、自分の解説を誰も聞いてくれない状況に哀しそうな表情をして立っていた。
「じゃ、着替えます！」
キャロが真剣な表情になって背筋を伸ばす。その隣ではフリオが、いまだぽかんとした顔で眺めている。

「なりきりチェンジ！」
片手を天にかざし、キャロは叫んだ。
「お、おおっ、すっげえ!!」
思わずフリオが興奮して飛び上がる。
「おお……っ！」
九人の英雄たちからも、驚きの声が上がった。
なりきり師の変身する瞬間を、みんな初めて見るのだ。
——なりきり師とは、その者の将来の姿を時空転移の力によって、未来から現在に転送してもらえる力を持っている。それは未来の自分を連れてくるわけにはいかないので、服という代用品で送られてくるのだ。その服には経験を積んだ未来の自分の力がこもっている。それゆえに、なりきり師はたとえ子供であっても大人と同等の力を瞬時に得ることができるのだ。
やがて、未来から送られてきた情報が光となって、なりきり師の服全体を光らせる。
とたんにキャロは光の服をまとったような姿になり、続いて光る服の形状が変化していった。
「まあ、なんて可愛い学者さんだこと！」
リフィルはまぶしそうに、キャロを見つめて微笑む。

みるみるうちに服の形状が変化するキャロは、瞬く間に学者の服をまとった女の子に変身したのだ。
「いいわキャロ、とっても似合うわよ」
「エヘヘッ、ありがとうございますリフィル先生！」
学者帽を被ったキャロは、ちょっと照れながらはにかむ。
学位の高い、教授クラスの服を子供がまとっているようにしか見えないのだが、でも実際は最高学府を首席で卒業したのと同じくらいの知識量を秘めているはずなのだ。
「さあ、頑張ってねキャロ！」
「はい——」
可愛く頷くと、キャロは遺跡の陥没した縁へと歩み出した。そして何やら考え込むような仕草をしたあと、腰を下ろして床の形状を手のひらでなぞるように調べだした。
そして数刻もしないうちに、
「わぁ！　な、なんで？　ウソー！」
興奮した声をいきなり上げた。
リフィルの想像したとおり、キャロの知識量は常人の数倍にも達しているのだ。
これはいけるかもしれない——。
期待のまなざしでリフィルは見守った。

キャロは、床に刻まれた小さくて風化しかけた古代文字を発見していた。学者帽から伝達されてくる未来の知識がそれが何であるかを教えてくる。それは、もしキャロが学者の道をめざしたのであれば獲得するであろう未来の知識なのだ。よし、照合してみよう。

キャロは小脇に抱えていた分厚い辞書を広げた。わからなかったことが突然わかるようになる。それがなりきり服の力だ。ダァーッと、凄い勢いでページをめくる。まるでどこに何の記述があるのか、すべて把握しているかのようだ。

「あった！」

分厚い辞書をめくるのを止め、掠れて刻まれた不完全な古代文字との照合を急ぐ。

「ふむふむ、これによると……ここをこうして、ふむふむ……それからこうね。えい！」

ヒビ割れた床のブロックのひとつを、指で押し込んだ。それはスイッチだったのか、メリ込んで沈んだとたん、ほかのヒビ割れた床のブロックを一斉に開かせ、新たなスイッチを露わにさせた。

「これだわ！　えいっ、ポチッ！」

キャロは自信を持って、それを押した。

すると、突如として地響きが起こる。

「うわっ、なんだ！」

隣にいたフリオが、よろめいて床に倒れる。
「大丈夫よ、フリオ。仕掛けが動きだしただけだから」
「えっ？」
倒れ込んだフリオが目を丸くさせている。自分も同じなりきり師なのに、まだ状況が呑み込めてないらしい。
「ああっ⁉」
フリオは驚いた顔で、目の前で起こった異変を見上げる。
それは隠し階段の出現だった。
自分たちの立っていた床の下に、折り畳まれるようにして収納されていた石の段がひとつずつ現れ、階段のように重なって伸びていく。
「これは、新デスティニー伝説に書いてあったそのままだ！」
興奮してフリオが叫ぶ。
「何よ、フリオ——今さら思い出したの？」
「あ、いや……」
フリオはバツが悪そうな顔になる。
キャロが謎を解いたおかげで、目の前にはラグナ遺跡の最上段へ登れる階段が完成していた。

「すごいね～、これがなりきり服の力なんだ～」
「うん、すごいや！　見直しちゃったよ」
キャロの許に、コレットとジーニアスが駆け寄ってくる。
「なああなあ、今度オレにもその服、ちょっとだけ貸してくれよ。いいだろ？」
さっきまで大人ぶっていたロイドも、いきなり子供のように目を輝かせて寄ってくる。
「エヘッ、いいですけど……でも、ほかの人が着ても同じ効果が出るのかしら」
「えっ？　ダメなのか？」
ロイドは哀しそうな顔する。それを見て、キャロはポッと赤くなる。――いやだ、伝説の英雄にそんな顔をされたら、私まで悲しくなっちゃう。
キャロは、何か勘違いしそうになっていた。
「………」
フリオだけは、つまらなそうな顔をした。
そんなところに、
「ふむ、なりきり服は意外と便利なものね……」
冷静な口調(くちょう)で、リフィルが寄ってくる。
予想していたとはいえ、その効果の速さには驚いていた。
なりきり服は、リフィルたちの世界には存在しない。ゆえに知識として、そのような

物が別世界に存在するという話程度しか知らなかった。だが、もしこれが自分たちの世界にもあったらどうなるだろう。
　例えば、いろんな職業の力を瞬時にして使い分けられる勇者がいたとしたら、どうなるだろう。リフィルたちの世界では、いろんな分野でその能力に長けた者たちが集まって、チームを組み、そして困難に挑んでいく。
　だけど、なりきり師はそのいろんな分野の能力をひとりで使い分けられてしまうのだ。つまり、ひとりで十人分、いや二十人分の力を持っているのと同じことになるのだ。
　考えてみれば、これは凄いことである。フリオとキャロは、まだその凄さには気がついていないが――いずれ、その力の可能性と怖さについても学んでいくことになるのだろう。なりきり服の力が、何者かに悪用されないよう彼らをしっかりとした人間に育ててあげなければならない。この世界の英雄として――。
「とりあえず、遺跡調査のときにはあなたたちに声をかけるわ」
　リフィルは場の盛り上がりを打ち切るように話しかけた。キャロを中心にして盛り上がっていた輪が解かれ、真面目な顔でリフィルのほうに向き直る。
　全員の気が抜けないよう、再び目標へ意識を集中させる。
　リーダーとは、こうした掛け声が大切なのだ。
「さあ、エルレインは目の前よ！　全力で行きましょうね！」

「はい！」

キャロに続いて、コレットとジーニアスも元気よく返事する。

本当なら、こうしてみんなの気持ちをひとつにまとめるのはフリオとキャロ役目なのだ。しかし本人たちは、そのことに気づいていない。だからリフィルは、自分がしばらくの間手本を見せるつもりでいた。

「じゃあ、最上段へ突入する編成を今から決めましょう――」

リフィルが、最上段へ続く階段の先を見つめて言ったときである。

「オレがやる！」

フリオの声がした。それも怒りを爆発させたような声だ。

驚いたリフィルが、フリオに注目すると――彼のなりきり服は《剣士の服》へと変化している真っ最中であった。

「ちょ、ちょっとフリオ！」

「リフィル先生、オレに任せてください！」

剣士になりきったフリオが、力強く訴えると――そのまま最上段へ続く階段を駆け上がってしまう。

「ちょっと待ちなさい！」

リフィルは慌てて追いかけようとしたが、ふいの出来事に、階段でつまずいてよろめ

いてしまう。
「先生、大丈夫ですか！」
そばにいたロイドが、心配して駆け寄る。
「止めて、フリオを――あの子ひとりでは、危ないわ！」
「わかりました、オレたちに任せてください――行くぞ、みんな！」
「おう！」
「よし、わかった！」
「オレにも任せろ！」
九人の英雄から、次々と声が湧き上がる。黙って見ていた彼らも、とうとう我慢の限界に達したのだろう。我先にと、階段を駆け上がって最上段をめざしていく。
「先生……」
そんな中で、コレットとジーニアスが心配してリフィルのそばに残ってくれている。
「大丈夫よ……私が、迂闊だったわ……フリオは、なりきり師といえど、まだ子供……キャロばっかりが誉められたら、悔しいに決まってるわよね。だって男の子だから」
立ち上がりながらリフィルは、目をぱちくりさせて立っているキャロを見つめた。
「安心なさい、フリオは大丈夫だから――」
まだまだ、なりきり師の育成はこれからだ。

そう言いたげにリフィルは微笑み、歩き出した。

＊＊＊

静かだったラグナ遺跡の最上段が、突如にして騒がしくなった。
エルレインは待ちかねたように、隠し階段を駆け上がってきた連中を眺めた。見れば、年端(としは)もいかぬ若者ばかりだ。
「あなた方のいずれかが、カイルとロニ？」
あの墓泥棒の夫婦から聞いていた話との食い違いを、エルレインは感じていた。様々な術を得意とするエルレインは、ポニーとクライトが泥棒稼業をしていることなど、とっくに見抜いていた。あの夫婦は嘘ばかりをつく。しかし、カイルとロニという若者が現れ、そしてここでリアラと出会うことを阻止しなければ――いずれ危険な存在なるという話だけは、嘘を言っていないと確信していた。
だから、ここまで来たのだ。
奇跡の力で、世界中の人々を救う〝輝きの聖女〟と呼ばれているエルレインは、目の前に勢ぞろいした十二人もの若者を眺めて、異質な力を感じ取っていた。
「この波長は、別の時空のもの……歴史に介入できるのは、どうやら私だけではなかっ

たようですね」
美しくきらめく冠を頭に載せたエルレインは、目を細める。
この者たちは、別の時空からやってきた。しかも私に対して敵意を向けている。世界の人々を救うための力を持った、この私に対して――。エルレインの無表情だった瞳に、わずかながら怒りが灯りだす。
「行くぞ、エルレイン！　オレと勝負しろ！」
一番年の若そうな少年が、剣を振り上げてこちらに迫ってきた。
「ダメよ、フリオ！　あなたはリーダーなのよ、指揮する側に回りなさい！」
少年の後ろから、銀髪の学者らしい装いの女が必死に止めようとしている。
誰でもいい――私の邪魔をする者は、ここに向かっているであろうカイルとともに蹴散らすのみ。
「人々の願いは、神の願い！　それを邪魔する者は、誰であれ容赦はしない！」
エルレインは、高らかに語った。
「フリオ！　早くみんなに命令しなさい！」
リフィルが、叫ぶ。
「で、でも、オレだって――」
フリオは、剣を構えた手をガタガタと震わせながら、それでもエルレインに向かって

いこうとする。
「よせ！　ここはオレたちに任せろ！」
黄金の髪をなびかせ、スタンがフリオの前に躍り出てくる。
「気をつけろ、スタン！」
女戦士のマリーも、あとを追ってくる。
「おう、オレさまの出番だぜ！」
上半身裸のコングマンも、筋肉をみなぎらせてスタンの横に並ぶ。
「あ、ああっ……スタンさん」
彼ら三人の背後で、フリオは立ち尽くしていた。
「いいから下がってろ！」
頼りがいのある兄貴らしく、スタンがエルレインに向かいながら言う。
「行くぞ！」
間髪を入れずに、スタンが剣を振り上げて突進する。マリーとコングマンもあとを追う。
「では、そなたたちからお相手しましょう――」
エルレインが、カッと双眸を見開いた。
突進してきたスタンめがけて、ダブルセイバーを奮う。

「ぐあっ！」
三人が、エルレインに斬られて次々に吹き飛ばされる。
「――スタンさん！」
後ろで見守っていたフリオが顔を歪める。思わず飛び出しそうになった彼の肩を、走ってきたリフィルが後ろから抱きつくように止める。
「やめなさい、フリオ！　指揮官が自分から陣形を崩してどうするの！」
「リ、リフィル先生……」
「言ったでしょ、リーダーの務めを！　あなたはそれがまるでわかってないのね――」
「………」
鬼教官のような一喝に、フリオは震えた。
「さあこっちよ、来なさい！」
エルレインから遠ざけるように、リフィルはフリオの腕を引っぱった。
「愚かな――神の前に屈しなさい！」
だが、その隙を見切ったスタンが地を蹴って跳躍した。
「魔王炎撃破！」
その叫びとともに、技がエルレインに炸裂する。
次の瞬間、エルレインはスタンがくり出してきた剣の一撃を食らって、そのまま突き

倒される。

「お、愚かな……」

唇を噛みしめ、エルレインが慌てて体を起こす。無表情だったその顔に、感情が露わになってきている。

「おい、フリオ！　そろそろ交代の命令を出せ！」

戦況を見ていたロイドが、戻ってきたフリオにたまらず声をかける。

「フリオ、それがリーダーの役目よ」

「リ、リーダーの……」

闘いの緊迫感で、フリオは我を見失っているかのようだ。

「しっかりなさい！」

そんなフリオの背中を、リフィルが叩く。

「は、はい！　お願いします、ロイドさん！」

やっと、初めての命令を発した。

「待ってました！　行くぞ、コレット！　ジーニアス！」

「うん！」

「任せてよ、フリオ！」

ロイドを先頭に、コレットとジーニアスが駆け出していく。

「フリオ、大丈夫だったの？」
キャロがそばに駆け寄ってきた。
「ああ、オレなんかのことより英雄のみんなが――」
「そうね。どうすればいいのかしら？」
フリオとキャロは、目の前でくり広げられるエルレインとの闘いに、もうどうすればいいかわからず、ただ心細そうに突っ立っている。
リフィルはそれを後ろから眺めて、何かアドバイスしたい気分になったが、やめた。
本気で彼らを育てる気なら、二人に考えさせなければならないのだ。
こういった瞬間だからこそ、それをしなければばならない。指揮官が判断を誤れば、仲間が傷つき、大変な事態を招きかねないのだ。だからこそ責任も伴うし、また逆に、その責任の重みに負けて判断が遅れてもならない。
その空気を、彼ら自身が知ったほうがいい。リフィルは二人の後ろで、この辛い戦況を見守った。
「ちきしょう、やられた！」
悔しそうな声で、スタンが床に身を横たわらせる。ロイドのチームが飛び出したのと入れ代わって、スタンたちがこちらに戻ってきたのだ。
「いま、助けます！」

リフィルは、驚いた顔で眺めるフリオとキャロの前に出て、治癒(ちゆ)の術を唱えだす。エルレインからの攻撃を浴びて、ダメージを受けていたファラも気力を振り絞って、治癒の術を唱える。フリオは、ただ成(な)す術(すべ)もなくその光景を見守るしかなかった。

――こ、これが闘いなのか。

生まれて初めて見る激闘の模様に、フリオは決して、これがカッコイイものだとはいえなくなっていた。

命がけの闘いがそこにはあったのだ。

「世界は、私の手で救われなければなりません！　それこそが、世界と人々のため！　何ものにも変えられぬ必定(ひつじょう)なのです！」

エルレインの声に、少し焦りが滲(にじ)みだしていた。力が消耗(しょうもう)してきたらしい。

しかし、技を次々にくり出しているロイドたちも苦戦を強(し)いられていた。

「フリオ！　面倒なことはさっさと終わらせようぜ！」

戦況を見ていたリッドが大声を飛ばしてくる。

「は、はい！」

言われて頷いただけだった。でもそれだけで、待機していたリッドたちは飛び出していく。ファラとキールもそのあとを追った。

入れ代わりに、

「くそ、まだまだオレはやれるぜ！」
「いいからロイド、いったん下がろうよ～」
「そうだよ、コレットの言うとおりだよ！」
　コレットとジーニアスに引っ張られるようにして、ロイドが戻ってきた。スタンと同じように、ロイドも肩や足などに傷を負っている。しかしその表情は、まだ戦意に満ちていた。
「いいからロイド、こっちに来なさい！」
　リフィルはヒールを唱える。その隣では、治癒の術によって回復したスタンがすくっと起き上がる。
「こっちは、また行けるぞ！」
　傷ついてもボロボロになっても、彼らは闘志をみなぎらせる。決してあきらめない。
　スゲェ、やっぱり伝説の英雄だ――。
　フリオは、格の違いを見せつけられた気がした。
　そして闘いは、ついに終盤を迎えつつあった。
「お、愚かな……こんなはずでは……。世界は、私の手で救われなければならないはず……そ、そうでなければ世界は……」
　エルレインの声が掠れていくのがわかった。

最後の一撃を食らったエルレインが消滅していく。フリオは、伝説の英雄たちが連携攻撃によって勝利を摑んだ瞬間を眺めていた。

「……わ、私は……世界に救いを……」

その言葉を最後に、エルレインの姿が完全に消え去った。その前に立っていたのは十人の英雄たちだった。

「――やったわね、フリオ！」

隣で見ていたキャロが声をかけてきた。

十人の英雄たちの後ろ姿を眺めていたフリオは、何も答えなかった。いや、そんな気分になれなかった。自分とキャロは一番後ろで、ただ見ていただけだったのだ。

何もできなかった。自分たちは役立たずだった。フリオの中に苛立ち(いらだ)が込み上げてくる。一番大変なところを先輩たちに任せてしまった。申し訳なくて情けなかったと思う。

「ねえ、フリオ――聞いてるの？」

「ああ、聞いてるよ。うるさいなあ、キャロは――」

「わぁー、こんな可愛い女の子が心配してあげたのに、そんな言い方するの？」

キャロがふくれっ面を見せる。

それに対して、フリオがどう答えようかと思ったときだった。

「ふははは、ふははは!!」

いきなり女性の甲高い声が響き渡った。
「な、なに？　今度は何が起こったの⁉」
キャロがびっくりして振り返る。
闘いを終えた十人の英雄たちの中で、いきなりリフィルだけが大声を上げて笑いだしたのである。周りに立っていた英雄たちも、何事かと驚いている。
「リ、リフィル先生？　どうしちゃったの？　もしかして闘ってたときに、頭をどこかにぶつけて……」
キャロは本気で心配し始めた。
ジーニアスが恥ずかしいことを説明しなきゃいけないという顔で近づいてきた。
「じ、実は……僕の姉さん、筋金入りの――遺跡マニアで――こういう場所に来ると、少しおかしくなる病気なんだ……」
「へ？」
「遺跡マニア？」
フリオとキャロが首をかしげる。
「ああ……隠してたのに……」
ジーニアスは頭を抱えた。
「ふははは！　なんと美しい遺跡群！　この色、このツヤ、素晴らしい！」

なんだか急に人が変わったように、リフィルはラグナ遺跡の壁に抱きついてみたり、床を撫でてみたり、あちこちに移動して、やたらひとりで感激していた。その様子は、とても先生とは言いづらい――危ない人そのものだった。
「見よ！　このすべらかな手ざわり、遺跡としても見事だ！　ふははははは！」
リフィルは嬉しさのあまり、天を仰いで叫ぶ。
周りにいる英雄たちも、フリオとキャロも、みんなしばし呆然とするばかりだった。
いや、そうするしか……なかった……。

＊＊＊

「ほら、父ちゃん！　ぼやぼやしてないで、あのバカ女がバカ笑いしてる隙だよ！」
「何？　好き？」
「そのスキじゃないよ！　それは、あ・と・で♥」
物陰から、リフィルの様子を見守っていた墓泥棒のポニーが言った。
「父ちゃん！　今こそ、エルレインが落としていった《時のペンダント》を頂くチャンスなんだよ！」
「何っ！　そそ、そいつは大変だあ！　急がねば！」

「よし、じゃあ父ちゃん——一気にエルレインがいたところまで走って、時のペンダントを奪って逃げるよ！」
「あいよ、母ちゃん！　お宝さえいただけば、あとは野となれ馬となれ！」
隣にいたクライトが頷く。
「馬でも鹿でもいいからさ……行くよ！　それっ！」
ポニーはこのチャンスを逃してはならないとばかりに、物陰から飛び出す。夫のクライトもそれに続く。
エルレインは闘いの最中に、貴重な装飾品を落としたらしい。
それをポニーとクライトは狙っていたのだった。
二人はエルレインが立っていた場所まで駆け出すと、あたりをくまなく探しだした。
そばには闘いを終えたばかりの英雄たちが立っているが、みんな大騒ぎするリフィルのほうに気を取られてしまっている。
「えーっと、確かエルレインはここら辺に落としたはずなんだがな……ん？　あった、あったぞ、母ちゃん！　見つけたぞ！　時のペンダントは、これだよな！」
クライトは大声を上げて、それを拾いあげる。
「あ、やったじゃないかい、父ちゃん！　それだよ、それ！　……って、なに大声出してんだい父ちゃん！」

クライトを叱るポニーも、つられて大声を出していた。二人してハッと気づくと、近くに立っていた十人もの英雄が一斉に振り返りこちらを注目しているではないか！

しかし、みんな「誰だろう、この人たち？」と、あっけに取られた表情をしている。

二人はいきなり愛想笑いを浮かべた。

「デヘヘヘッ！　エルレインが落とした、時のペンダントは頂いていくぜ！」

「うふふ、あたしたち――最初から、これが狙いだったのよね。じゃあね～♥」

と言って、まだ英雄たちがポカ～ンとしているのをいいことに、二人は最上段の隅に向かって一気に駆けだした。英雄たちはその慌てて逃げるポニーとクライトを見送る。

フリオとキャロも、何が起こったのかわからないような顔で見送っていたが――しかし、彼らの逃げる先に見覚えのある装置が置かれていたのを発見すると、

「あ、見て！　あれはドリーム1号！　あいつらよ――お願い、捕まえて！」

いきなりキャロが顔色を変えて英雄たちに叫んだ。その瞬間、英雄たちは血相を変えて追いかけだす。

「おっと、逃がすかよ！」

「まかせとけ！」

「待て！　待ちやがれって！」

リッドを先頭に、スタン、ロイドが続く。ほかのメンバーも追いかけていく。結局フ

リオとキャロのそばに残ったのは、遺跡に夢中で我を忘れた状態のリフィルだけだった。
「ヤバイぜ、母ちゃん！」
「わかってるよ、早く乗り込んでワープしちまいな！」
「あいよ、母ちゃん♥」
ポニーとクライトは、追ってくる英雄たちに慌てながらドリーム１号に素早く乗り込む。
「待て！　逃がすか！」
英雄たちがドリーム号のすぐそばまで来た。
——そのときである。
ドリーム号の周囲に、時空の歪み（ゆが）が発生した。
「うわっ、何だこれ！」
駆け寄ってきた英雄たちは、次々にその時空の歪みに呑み込まれていく。
「あ〜ん、待ってよ〜、ロイド！」
コレットも、ロイドのあとを追って、自ら時空の歪みの輪の中に飛び込んでいってしまう。
「くそっ、止めろ！　コイツを止めさせるんだ！」
「そこの扉だ！　それを開けろ！」

「うぐぐ、開かねえぜ！」
　彼らはドリーム号の発進を阻止しようと、ハッチを叩いたり蹴ったりしている。だがもう遅かった。ドリーム1号は別世界に移動するための時空の穴を開き、九人の英雄たちを巻き込むような格好で、突然消え去ったのである。
「わあぁっ！　伝説の英雄たちがぁ！」
　フリオがそれを見て、悲鳴のような声を出す。
「うそ……みんな消えちゃった……」
　隣でキャロも意気消沈した。それは一瞬のことであった。あたりは今までの賑やかさが嘘のように、いきなり静かになった。ラグナ遺跡の最上段には、虚しく一陣の風が吹く。
「先生、みんなが……」
　フリオは沈痛な面持ちで、リフィルに訊いた。しかし先生は答えない。
「早く助けに行きましょう！」
　キャロは逆に、血気盛んな表情で訴えた。
「待ちなさい」
　遺跡に浮かれていたリフィルが、やっと普通に戻ってくれた。いや、何か様子が変だと気配を感じたらしい。

「誰か来たわ――」
リフィルが、隠し階段のほうを凝視して警戒する。
「誰かしら？」
キャロが様子を見に向かおうとした。
「よしなさい、別の敵かもしれないわ」
「敵!?」
フリオが緊張した声を上げる。
もしそれが本当なら、どうなるのか。
エルレインと闘ってくれた頼もしい英雄たちは、もうここにいない。
だとすると、自分が闘うしかない――。
「とにかく隠れて様子を見ましょう」
リフィルが、フリオとキャロを促した。

＊＊＊

「ねえ、ロニ……あの子たち、どこへ行っちゃったんだろ？　自分たちから道案内を頼んできたのに、途中でどこかにいなくなるなんてなぁ。行くなら行くで、挨拶くらいし

てくれたっていいのに……」
　階段を登りながらカイルはつぶやいた。
　隣を歩く背の高いロニが、なだめるように言う。
「なあ、カイル。あの子たちにだって、都合(つごう)ってもんがあったのかもしれないんだぞ。それに遺跡の中は、二人でくまなく調べたんだ。あの男の子と女の子が、罠に嵌まった痕跡(こんせき)はどこにもなかった……もうそれでいいじゃねえか。今頃はあの子たちも、この遺跡の外に出て、二人で仲良く目的の西の町に向かってるって。安心しろよ」
「もう、ロニは……いつも楽観的なんだからなあ」
「ハハハ、そういうカイルは心配性すぎるぜ。そんなんじゃ頼りがいのある男として、オレみたいに女の子からモテないぜ？」
「な、何言ってるんだよロニ！　今は、そういう話をしてたんじゃないだろ？」
　近くの街に住むカイルとロニは、ラグナ遺跡の最上段をめざして、隠し階段のある場所へとたどり着いた。
「……ロ、ロニ？　何だあれ！」
　カイルはびっくりした声を上げる。目の前にはフリオたちの乗ってきたドリーム2号が置きっぱなしだったのである。
「……見たこともねえ物体だな」

ロニも不思議そうにドリーム2号を眺めた。
「ねえロニ、これも古代の遺跡の何かなのかな？」
「おっと、待てカイル。下手に近づくんじゃない」
「えっ？」
「こいつはごく最近造られた――いや、誰か人の手によって手入れされたもんだ。遺跡の一部にしちゃ、妙に綺麗すぎるとは思わないか？」
「そういえば……そうだね」
「しかもついさっきまで、誰かがこれを使ってた気配がする――」
「えっ？　ホントに、ロニ？」
「ああ、雰囲気でわかる。カイル、用心しろ。オレたち以外の誰かが、この遺跡のどこかに隠れてるかもしれないぞ」
「じゃあ、そいつらも最上段にあるって噂の大っきいレンズを狙ってるのかな？」
「そいつはわからん。だからこれから確かめに行く――」
「うん、そうだねロニ、行こう！」
カイルとロニは、すでに仕掛けを解き終わった隠し階段を登り始めた。警戒しながら一歩一歩登っていくと、やがてラグナ遺跡の最上段の様子が見えてくる。
「うわ、なんか焦げ臭い匂いがするよ？」

カイルは階段を登りながら鼻をくんくんと鳴らした。
「……そうだな、服が焼け焦げた匂いに、遺跡の壁や床が傷ついた様子……これは、ついさっき術を使った闘いがあったようだな」
「術を使った闘い？」
カイルは驚いた顔でロニを見る。
「でも、それも終わってしまったのか、誰もいないな……」
最上段までたどりついた二人は、確かに激戦のあとの匂いが残る空気に緊張した。
しかし、
「あ、ロニ！　あれを見てよ！」
カイルは最上段の奥を指さした。そこには大きな樹木がそびえ立ち、根の部分のくぼみに直径が人の背丈以上もある大きなレンズが埋まっていたのだ。
「——あれがレンズ!?　で、でっけェ！」
カイルは緊張を忘れたかのように樹木に向かって駆け出す。
「あ、おい！　カイル！　待てよ！」
用心しろと言っていたロニだが、彼もまた目的のレンズを無事に発見できた喜びで、その緊張がかき消されてしまった。
「うひゃ〜、何だよコレ！」

「ロニ、見てよ！　すごいよ！」

レンズに駆け寄ったカイルが、追いかけてきたロニに興奮気味に話しかける。

「ああ……こいつは、冗談ヌキで300万ガルドの価値はあるぜ……」

立ち止まってレンズ全体を眺めるロニは、その圧倒的な大きさに声が震える。

とてつもない宝を目にしてしまった。二人の興奮は、呆気に取られるほうに傾いた。

この新デスティニー伝説の世界では《レンズ》という代物は、大金になる。母のルーティが営むデュナミス孤児院の経営を少しでも楽にさせてあげたいと思ったカイルとその親友ロニは、二人して大きなレンズが眠ると噂の――ラグナ遺跡の最上段にやってきたわけだが――発見したレンズの大きさは、彼らの予想をはるかに凌ぐものだった。

「こりゃ……運び出すのも、ひと苦労のデカさだな……」

ロニが考え込むようにつぶやいたときだった。

突然、その巨大なレンズが光を放ち始めた。

「うわっ――ロ、ロニ！　レンズが!!」

「な、なんだ!?」

二人は身を守るように後ずさりした。しかし逃げる間もなく、巨大レンズの発光は勢いを増し、やがて爆音とともに砕け散った。

「うわあああああっ！」

カイルとロニがよろめいて、身を庇おうと床に倒れ込む。
爆発は瞬時にして収まった。
見ると、砕け散ったレンズの残骸の上に――ひとりの少女が立っていた。
「……えっ？」
カイルはその子の姿を見て、どきりとする。
あまりに意外すぎる光景。つまり、レンズの中に女の子が眠っていたというのか――。
その謎めいた少女は頬に掛かる程度の短い黒髪に、玉の形をした宝石の飾りをつけ、ほっそりした華奢な体に薄い桜色のワンピースをまとっている。栗色の大きな瞳が印象的な、とても可愛い女の子だった。
カイルは、その彼女に心を奪われたかのように立ち上がる。女の子はカイルのほうをじっと見つめたまま、レンズの残骸の上から歩み出してきた。
「あッ、あの！　キミはいったい……」
声をかけると、謎の少女は歩みながらつぶやきをもらす。
「英雄……」
「えっ？」
「そう、私は英雄を探しているの、歴史に残るような……いいえ、歴史を変えられるほどの英雄を……」

「英雄を……」
カイルは彼女の言葉を復唱した。そして直感的に何かを感じたのか、ぱっと明るく笑顔を輝かせた。
「——英雄だったら、もうキミの目の前にいるよ！」
「あなたが？」
女の子は立ち止まった。
「オレ、カイル！　今はまだなりたてだけど、いつかきっと……いや、絶対に大英雄になってみせる！　その証拠にオレは、英雄と呼ばれた父さんと同じところにアザがあるんだ」
「…………」
女の子は、不思議そうにカイルを見つめた。
そして、その瞳が動揺を表すかのように震えた。
「あなたは……あなたは……英雄なんかじゃない」
彼女はそう言って、また歩き出した。めざすは隠し階段——遺跡の外に向かうらしい。
「あッ、ちょっと待ってよ、キミ！　ねえってば！」
カイルは追いかけようとしたが無駄だった。
薄い桜色のワンピースを着た少女は、二度と振り返らず走り去った。

二人は、

「お取り込み中のところ、すみません。カイルさんとロニさん、ですよね？」

キャロは、そんな二人に話しかけた。巨大レンズから出てきた女の子を見送っていた

「ああ、そうだけど？」

ぶっきらぼうに、まずロニが答えた。

「うおおお、スゲー！　伝説のシーンをナマで見ちゃったぜ、オレ！」

フリオがキャロの横に駆け寄り、拳を握りしめながら感激する。

「キ、キミたちは？」

カイルが目を丸くさせて聞く。

「あ、私たちは――」

「オレは、フリオ！」

「私は、キャロ！」

「そして私は、彼らのお守り役――あ、オホン。違ったわ、ごめんなさい。二人の教師を務めるリフィルよ」

三人が名乗った。

カイルとロニは目を合わせ、少し困惑した表情を浮かべる。それもそうだろう。いきなり現れて、友好的な態度を示されても、うさん臭く思われるだけだ。だが、かといっ

て、この三人は悪人には見えない。カイルとロニにはそんな迷いが表情に表れている。
リフィルは、さっきキャロに「あなたが彼らと話をつけなさい」と言っていたので、ここは彼女に任せるつもりでいた。
「あの～、未来の大英雄さんにお願いが……私たちと一緒に来てもらえませんか？」
キャロはそのとおりに交渉を始めた。
「でもオレ、あの子を……」
カイルの表情が曇る。
明らかに心は、彼女を追いかけるほうに傾いていた。
「それなら大丈夫！　オレたちと来れば、必ず彼女にまた会えるから！」
フリオは、あっさり言った。
「ちょ、ちょっと待ってよ、フリオ！　そんな言い方じゃ、二人に信用してもらえないでしょ！」
自分が話をまとめるつもりでいたキャロはムッとしたが、
「ホントに!?　じゃあ行くよ！　もちろん、ロニも一緒だよね!?」
あっさりカイルは信じてしまった。
それを聞いて、キャロはコケそうになる。
「あ～ったく、もう！　しょうがねえな……」

ロニは、カイルの性格をよく知っているせいか、頭を抱えつつも反対はしなかった。
カイルの好きなようにさせてやりたい――。
兄貴分のつもりでもあるロニは、そう考えていたのだった。

第二章　挫折を知る冒険

＊＊＊

「そうか、英雄(ヒーロー)たちは時空の狭間(はざま)に消えてしまったのか……」
古代史研究所に戻ってきたフリオたちを前にして、ブラウン博士とホワイト博士は同時に腕を組んで同時に唸(うな)った。その動作は見ていて吹き出しそうになるくらいおかしい光景なのだが、事態が深刻なのであまり気にはならなかった。
「あの泥棒夫婦は、放っておいたら危ないぜ！」
「そうよ、いろんな世界に飛んで歴史を変えようとしているのよ！」
フリオとキャロが考え込んでいる二人の博士に訴えた。
「ねえフリオ！　これ、何だ？」
後ろのほうで、カイルの声がした。
新デスティニー伝説で、冒険が始まったばかりの二人を連れてきてしまったせいか、まだ彼らには緊張感というものがなかった。カイルとロニは観光気分で、古代史研究所

内にある備品を珍しそうに物色していたのである。
「なんだよ、誰も答えてくれないのか……冷たいなぁ～」
返事のない状態に、カイルはムッと頬をふくらませた。
「まあ、怒るなってカイル。この世界の人たちには、この世界の厄介事があるんだろうから。思う存分、話し合えばいいさ。話し合うのは悪いことじゃない。なあカイル、そうだろ？」
「う、うん、そうだけど……」
まだ経験も少ない状態のカイルとロニは、フリオたちの話し合いの中に入れずにいた。
「とにかく、こちらにドリーム2号となりきり服があるかぎり、いずれ彼らを捕えるチャンスはあるわ」
話し合いの輪の中で、リフィルは確信したように言った。
「よし、じゃあ——すぐに行こうぜ！」
「待てフリオ。今日はもうゆっくり休みなさい」
ブラウン博士とホワイト博士は、同時に言った。二人の声が重なり、まるでエコーで響いているかのように聞こえる。
「ええーっ！　でもよ、こうしてる間にあいつらは——また別の世界の歴史をメチャクチャに変えてしまうかもしれないんだぜ」

「そうそう、フリオの言うとおりだわ」
キャロも勢いづく。
しかし今度は、リフィルがそれを止めた。
「あせりは禁物よ、フリオ、キャロ――」
「リフィル先生……」
「二人が、時空の狭間に消えた英雄たちのことが心配なのはわかるけど、むやみに動いて、私たちが別の世界の歴史を変えてしまうことになってはいけないわ」
「そのとおりじゃ！」
ブラウン博士とホワイト博士は、同時にハモった。
「ドリーム号を盗んだ犯人のほうが動きださないかぎり、我々のほうで事前に予測することは不可能じゃ」
「そうじゃ。どの世界の、どの時間軸で、歴史の改変を企んでいるのか――ポニーとクライトのやつらが動かんかぎり、まったくわからないのじゃよ」
「くそっ、それじゃオレたちは、ただ待ってるしかないのか――」
フリオは悔しそうに俯いた。
ラグナ遺跡での失敗を取り戻したいのだろうか、フリオはムキになっていた。キャロもそれに感化されているように見える。明らかに二人は焦っていた。

それをブラウン博士とホワイト博士は充分に見抜いた様子で、
「とにかく今日のところは、次の出発に備えて休むんじゃ」
「そうじゃ。連中が動きだせば、いずれそのサインが英雄伝説の中に現れる——それをきっちり見逃さないことじゃ」
「うんうん、そうじゃそうじゃ、そのとおりじゃ」
二人の博士は、交互に喋った。何だか、本当の双子になったかのように見えてしまう。
両博士に促されたフリオとキャロは、リフィル、カイル、ロニの三人を連れて、古代史研究所をあとにした。二人の博士はフリオたちを門の前で見送った。外は陽が傾き、もうすぐ暮れようとしている。
しばらくして、
「……若者たちは試練に向かい、これで誰も後戻りできなくなったというわけじゃな……ふぅ……」
ホワイト博士が、ため息をつきながら言った。
二人だけになった古代史研究所の前で、ブラウン博士はあらたまった顔で訊ねる。
「ところでホワイト博士、わしには本当のとこを話してくれんかな」
「え？　あー、な、なんのことじゃな？」
「髪の毛が一瞬で白くなるほどの恐ろしいことが——百日後の未来に起きた……違うか

な？」
　ブラウン博士は、ずばり聞いた。
　さすがにホワイト博士の表情が変わった。
　未来の自分が、過去の自分と出会ってしまうという危険を冒してまでも戻ってくるということは、それなりの覚悟と理由があってのことだろう。自分自身だからこそブラウン博士には、それを察することができた。ましてや髪の毛がすべて白髪になってしまうほどの急激な変貌ぶりを見せられれば、余程ショッキングな事件が起きたのだろうとの予想もつく。
「ふむ、自分自身に対しては隠し事ができんか……」
　観念したかのようにホワイト博士がつぶやいた。
「だが、あの子たちには内緒じゃぞ？」
　そう言ってホワイト博士は、二人だけしかいない古代史研究所内でヒソヒソ話を始めた。
「実はな、百日後の未来は……」

＊＊＊

ミナクルの町は、のどかで静かな町だった。

古代史研究所がある森を進むと、小さな家のような外観をした可愛い図書館があり、日の出橋を渡って町の中に入れば、マホの雑貨屋や保安官事務所、さくら食堂、来夢来人ホテル、ドリーム号が発見されたレミ遺跡への入り口などがある。町外れには、フリオたちの住む孤児院『あすなろ園』の小さな建物も見える。

「へぇー、思ってたよりのんびりした村なんだなぁ……」

カイルが歩きながら言った。

「あ、あの……村じゃなくて町なんですけど」

先頭を歩くフリオは、申し訳なさそうに言い返した。

「あ、そっか。ゴメンゴメン。つい——でもさ、オレたちの住んでるクレスタの街より大きいから大丈夫だよ」

「カイル、何か全然フォローになってない気がするんだが……」

横からロニにつっこまれて、カイルは焦った。

「えっ？　そっかな……ねえ、ロニ？　オレ、何か失礼なこと言っちゃったかな？」

「今さら、何言ってんだ……」

背の高いロニは歩きながら、やれやれとため息をついた。

「うふふっ、あなたたちって兄弟みたいに仲がいいのね」

リフィルは、カイルとロニのやりとりを眺めてクスクスと笑った。時空転移の冒険に出かけたときとは違って、リフィルはいくぶんリラックスしている様子であった。
「あれ、フリオ――こんな店、あったかしら？」
キャロがふいに立ち止まった。見ると、帽子のような屋根をかぶった小さな店がある。カンバンには『なりきりショップ』と書かれていた。
「なりきりショップ……？」
「とにかく入ってみようぜ！」
フリオの提案で、一同はその店に立ち寄ることにした。
「ようこそ！　なりきりショップへ！」
出迎えてくれたのは、二人の店長メルとディオだった。
「うわー、いろんな服が並んでるなぁ～」
カイルは、店内に飾られた《なりきり服》をもの珍しそうに眺めた。
店には剣士、格闘家、アーチャー、クレリック、忍者、魔法使いのウィザードとウィッチ、商人、踊り子、ワンダーシェフ、遊び人、ドクターとナース、音楽家、学者、手品師、モデル、盗賊……いろんな専門服のサンプルが並べられている。
「おい、カイル……お前、これなんか着てみたら似合うんじゃないか？」
ロニが、冗談まじりに《ナースの服》を指さして笑いだす。

それを見たカイルは、ふくれっ面になる。
「だったらロニは、これがお似合いだよ！」
と、カイルは《遊び人の服》を指さした。
「ふーむ……意外とイケるかもしれないな……」
遊び人の服を眺め、ロニはまんざらでもなさそうに顎をさすった。
「ここの店長さんたちは偉いわね。この世界になりきり師は、フリオとキャロだけしかいないのに、こうやって店を開いてサポートしてくれてるんだから――」
リフィルは店内を見回し、感心したように言う。
なりきり服は、全部で八十九種類あると言われており、《ルーツ》と呼ばれる特殊な材料を店で買ったり、また逆に見つけてきて店に提供することにより、より特殊な能力を持ったなりきり服をオーダーメイドすることができるシステムになっていた。
「材料となるアイテムを見つけ出す手間と苦労、それから服を作ってもらう手数料のことを考えれば、八十九種類ものなりきり服を集めるのはちょっと大変そうだけど……でも、ハマるとコンプリートしたくなっちゃうかも♪」
キャロは、まるでコレクターのように楽しそうに言った。
「そうだよ！　例えばテイルズ世界の英雄からルーツをもらうことができれば、その人自身の服を作ることも可能なんだ」

「えっ？　じゃあ、オレの服も作れるのか！」
カイルはカウンターに身を乗り出して、二人の店長に聞いた。
「ええ、できますよ。ルーツさえあれば、たとえ世界が別々でも心がシンクロしているようなものだから、その人の特技や術なんかを時空を超えて共有することができるんです」
「スゲェ！　やっぱスゲェ～っ――オレは、なりきり師になれて嬉しいぜ！」
フリオが横から感激する。
それを見て、カイルはちょっと羨（うらや）ましそうな顔をした。
結局、キャロはなりきりショップでルーツを購入し、格闘家やクレリック、忍者、ウィッチなどのなりきり服を新たに作ってもらうことにした。
「……よくそんなお金あったな？」
店を出たあと、フリオはキャロに訊ねた。
「エヘヘッ……実はね、ラグナ遺跡でエルレインを倒したあと、彼女が落としていった宝石を少しだけ持って帰ってきてたのよ」
「なるほど。それをお金の代わりに支払ったってこと？」
「うん、そうよ」
「しっかりしてるなぁ、キャロは……」

「エヘヘッ、フリオに任(まか)せっきりだと、いつまでたってもラチがあかないもんねえ～」
「悪かったな……」
フリオは、ラグナ遺跡で役立たずだったことがいまだ尾を引いているのか、あすなろ園に向かう足取りがちょっと重くなる。
「それにしてもエルレインって、伝説のイメージほど強くなかったわよね」
歩きながらキャロが、呑気(のんき)に言った。
「そうかぁ？　あれは倒したというより、逃げられたってほうが正解なんじゃないか？」
「もう、フリオったら、自分が活躍できなかったから拗(す)ねてるのね」
「べ、別に、拗ねてなんかいないぞ！　英雄伝説を何度も読み返したオレには、わかるんだよ！」
「何が？」
「新デスティニー伝説のカイルとロニは、今日ラグナ遺跡で闘ったエルレインよりも、はるかに強いエルレインといずれ闘うことになるんだって！　それだけはハッキリしてる！」
フリオの言ったことに、キャロもなるほどと頷く。
「……そっかぁ……カイルとロニが経験を積む時間の長さのぶんだけ、エルレインも能

力を高めて強くなるってことよね？」
「そうだ！　いいところに気がついたじゃないか、キャロ」
「フフッ……ありがとう、フリオ……誉めてくれて」
「……い、いや別に……オレは何も……」
キャロの笑顔を見て、フリオはなぜか真っ赤になった。
二人の後ろでは、話の当事者であるカイルとロニがポカ～ンとしていた。
「ねえ、ロニ。前の二人……なんだかオレたちのこと言ってるような気がするんだけど？」
「うん、エルレインがどうしたこうしたと言ってるみたいだけど、まさかアタモニ神団のエルレインのことを言ってるのか……」
「なんか変な二人だよね、オレたちのことなんでもかんでも知ってるみたいでさ」
「まったくだ、ハハハ……」
まだ自分たちの未来がどうなるかを知らないカイルは、ロニと一緒になって笑い合っていた。
リフィルは、そんなやりとりを微笑ましく聞いていた。
「今日出会ったエルレインより、さらに強いエルレインね……やっぱり明日は、今日より大変なのね……」

キャロが、いつもの口癖をポツリとつぶやいた。
そしてその言葉どおり——。
数日後、フリオの持っていた英雄伝説に新たな書き換えが現れた。
それはほぼ元どおりの記述になった新デスティニー伝説ではなく、シンフォニア伝説の物語に変化が現れたのだった。

＊＊＊

「悪魔が教会を乗っ取るなんて——笑えないジョークみたいだな」
マーテル教会の中を進むフリオが言った。
ドリーム2号から降り立つと、そこは厳粛たるムードが漂った広い教会の中だった。
カイル、ロニ、リフィルの三人とともに、石段をゆっくりと降りていく。
異変を知ったのは、今朝だった。
フリオは、すでに暗記しそうなほど何度も読み返した英雄伝説の本を開いた。
するとそこに、シンフォニア世界の神託の聖堂が悪魔の群れに乗っ取られたという記述があったのだ。
もちろん、今までになかった記述である。

『ロイドとコレットが旅立った数日後のことです。幼くとも強大な力を持った《謎の悪魔》に操られた魔物たちが、神託の聖堂を占拠したのです。しかし、ロイドとコレットは何日たっても戻ってきませんでした……』

「……戻りたくても、戻れないわよね」
横から覗き込んだキャロが言った。
「だってあの二人、ドリーム号のドライブに巻き込まれて、別の時空に飛ばされたままだもの……まっ、こうなったら、私たちでやるしかないわね、フリオ！」
「そうだな！　昨日より今日は、いいところ見せてやらないとな！」
フリオが頷き返す。
二人は、あすなろ園に泊まったカイルたちを伴って古代史研究所に向かった。
ブラウン博士とホワイト博士が、すでに出発の準備を整えてくれていた。
「よいか、ロイドとコレットの代わりに――聖堂から悪魔を追い払うのじゃ！」
「英雄伝説の記述にある悪魔の正体とは、わしらにも不明なんじゃが――よく読んでみると、何やら奇怪な術を用いるようじゃな」
「フリオにキャロ、この敵の術中に嵌まってはならぬぞ！」

「神託の聖堂に行っても、自らの判断を誤らぬようにな！」
両博士の忠告に、フリオとキャロは力強く返事した。
「わかった、気をつけて行ってくる！」
「ロイドとコレットの代役だものね、頑張らなきゃ！」
すると、後ろに立っているカイルが訊ねた。
「ねえ、フリオ——その聖堂とやらに行けば、またあの英雄を探してる女の子に会えるのかな？」
ロニが、カイルの肩を叩いた。
「なあ、カイル。これは人助けなんだぜ？　英雄ってのはな、困ってる人を助けるもんだ。お前が真の英雄になるんならな——」
「あ、そうか、ロニ！　よし、わかった！　オレたちも行くよ、フリオ！」
「もちろん、私もお供させてもらうわ——」
カイルとロニに続いて、リフィルも前に出てきた。
「ありがとう、みんな！」
フリオは昨日より少しだけ、たくましく返事した。
こうして一行はドリーム2号に乗り込み、
「世界と歴史のレスキュー隊、出動せよ！」

「ドリーム号、いざ発進！」
両博士の掛け声とともに、シンフォニア伝説の世界へやってきたのである。
だが――、
「な、なんか……幽霊でも出てきそうなくらい、おっかない教会だよな……」
聖堂の階段を一番下まで降りて、フリオはブルブルっと肩を震わせた。
張り切ってシンフォニア世界に駆けつけたのに、進めば進むほど額に汗が出てくる。
それでも恐怖心に負けないよう、一歩ずつ進んでいく。
煉瓦で造られた地下通路はずっと奥まで続いており、燭台の灯りがほのかにあたりを照らしていた。
「き、気をつけろよ……な、何か出てきそうだぜ」
フリオは、後ろのみんなに注意を促した。
そんな薄暗い教会の中で、
「あっ、そうだわ！　博士の話だと、この世界に二人の英雄が来てるかもって！」
「ひゃああ！」
いきなり叫んだキャロに、フリオは飛び上がりそうなほど驚いた。
「び、びっくりするじゃないかよ、キャロ！」
「えっ？　どうしたのフリオ、泣きそうになって」

「バ、バカ！　泣いてなんかいないぞ！」
「でも、涙がこぼれ落ちそうに溜まって……あ、わかった！　フリオったら、幽霊が怖いのね？」
「な、何言ってんだ！　ここは教会だぞ！　幽霊が現れるわけがないじゃないか——」
「あっ、オバケ！」
「ひやあぁ！」
後ろを指さしたキャロに、フリオは抱きついてしまった。
「もう、嘘に決まってるでしょ～。こんな古典的ないたずらに引っかかるなんて、フリオも単純ね～」
キャロがバカにすると、フリオは慌てて離れた。
「——う、うるさいぞ！　その単純な男を惑わすお前は、なんなんだよ⁉」
「魔性の女とでも呼んでくれる？」
「へっ、どこが！　もうちょっと女として色っぽくならないと、全然無理だね！」
「何よ～、フリオのケチ！」
「ケチって——こういうとき使うか？」
二人の脱線した会話が、果てしなく続くかに思えたときだった。
「ちょっと二人とも、およしなさい！」

さすがにリフィルが止めに入った。
「私たちは、これから敵地に乗り込もうとしているのよ？　夫婦ゲンカをするなら家に帰ってからしなさい！」
「――ふ、夫婦ぅぅぅ？」
一瞬、フリオとキャロの表情が固まった。
「ふ、夫婦なんかじゃありませんっ！」
「そうです、リフィル先生！　冗談は顔だけにしてくださいっ！」
二人そろって、やかましく反撃してくる。
リフィルは両手で耳を塞いで、たまらず言った。
「ああ～、もう悪かったわ。夫婦ゲンカは犬も食わないってホントなのね――」
それを聞いて、カイルとロニが笑いだした。
「アハハハハ！　うまい、リフィルさん！」
「ハハハハ、こいつは一本とられたな！」
大ウケするカイルとロニに対して、キャロはまたまたふくれっ面になった。
「もう、なんでこうなるのよ！」
「そんなこと、オレが知るか！」
フリオとキャロはお互いに「フン」と、顔をそむけあった。そのときだった。

リフィルが、地下通路の奥を見て声を上げた。
「あっ！　ロイド、コレット！」
「――えっ？」
その声に全員が振り返った。
「ど、どこ！　どこにいるの？」
「あそこよ！　今、この奥に向かって走っていくのが……」
一同は、リフィルと同じ方向を見つめた。しかし通路の奥のほうには、誰の姿もない。
「リ、リフィル先生……本当に、ロイドさんたちがいたんですか？」
「ええ、見えたわ。確かに――あれは、ロイドとコレットよ！」
「だとしたら、この真っ直ぐの長い通路をまだ走ってるはずじゃない？　そんなすぐに消えるなんて――あ、やっぱり幽霊がいたの？」
「よ、よせよ！　伝説の英雄が幽霊なんて！」
フリオが肩をブルブルと震わせて言う。
「そうよ、当然でしょ。もしロイドとコレットがここにいたら、教会を乗っ取った悪魔を放っておかないわよ」
「それもそうだよなぁ……」
フリオは、キャロの考えに同意した。そして考え込んでいるリフィルに振り返った。

リフィルは腕を組み、まだ見間違いだとは思っていない様子だった。
「確かに見たのよ……あれはロイドとコレットだわ……」
「と、とにかくさ、みんなで奥を探してみようよ。もしかしたらそのロイドとコレットは、悪魔のところに向かっているのかもしれないしさ！」
カイルが助け船を出して、話をまとめようとした。
「ほぅー、カイル……なかなかいいこと言うじゃないか！」
ロニに誉められて、カイルがへヘッと鼻をこすった。
そして一行は、再び聖堂の奥をめざして地下通路を歩み出した。
だが、そんな簡単に進めるものではない。行く手を阻むように魔物の群れが寄ってきた。フリオたちは、たちまち囲まれてしまった。
「現れやがったな！　悪魔め！」
フリオが声を震わせながら、《クレリックの服》に着替える。
ケタケタと、不気味に笑う魔物たち。
連中は、あきらかにフリオのことをバカにしているのだ。
「く、くそぉーっ」
フリオが飛び出そうとすると、
「待て、ここはオレたちに任せろ！」

カイルが止めに入る。
フリオの前で剣を抜き、迫りくる魔物を打ち払った。
「ス、スゲェ、一撃で――」
フリオは圧倒された。まだ経験の少ない時代のカイルを連れてきたとはいえ、素質は計り知れないものがあった。やはり英雄になるべき人間は、けた違いの才能を持っているということなのか――。
「おっと、カイルばかりにいいカッコさせないぜ！」
ロニも自慢のポールアクスを振りかざし、カイルの加勢に駆けつける。後方ではリフィルが杖を構えて、背後の敵に備える。
「あ……オレたち……今度も……」
「みんなに守られてる……」
フリオとキャロはうなだれた。地下通路の前後で闘いがくり広げられ、自分たちは英雄に挟まれた安全な場所で立ち尽くすだけだった。
またもや見物人扱いとなってしまったのだ。

＊＊＊

「モンスターどもの心を一瞬で操るとは、聞きしに勝るお手並み！」
「例の切り札と合わせて鉄壁の防御！　這い出たアリも水漏れで溺れます！」
マーテル教会の最深部に、ポニーとクライトの声が響いた。
エルレインに続き、また新たな助っ人を別の世界から呼び寄せている。
本当にどうしようもない夫婦だ。
そんな泥棒夫婦の前には、ひとりの少年らしき影があった。
ぴったりと体にフィットする赤と黒のスーツをまとい、能面のような真っ白い顔だちをした男の子だ。
「ボクはね、ヒーローと名の付くものを苦しめてやりたい……ただ、それだけさ」
その男の子が言った。
彼の名前はサナトス。
竜神の生まれ変わりとして生を受けた守護精霊だ。女神シエルを母親と信じ、そのシエルが心を失う原因を作った人間たちを憎んでいた。
サナトスは、かつてフリオとキャロの前に強大な敵として立ちはだかったことがある。
しかし、それはミナクルの町がある世界のフリオとキャロとは、また別の時空のフリオとキャロのことである。
時空というものは常に様々な世界が並列しており、それはおそらく常人には複雑すぎ

て理解の及ばないものなのだろう。
でも、サナトスは楽しみにしていた。
「早く会いたいよ、またあの二人にね……」
サナトスのつぶやきに嘘はなかった。
彼は、別世界のフリオとキャロに出会えることを懐かしんでいたのだ。もちろんサナトスのことを、今から出会うフリオとキャロは知らない――だから面白いのだ。
彼らが知らなくて、ボクだけが知っている。そこに人の心を操るうえで、優位に立てる気がするのだ。
別世界とはいえ、サナトスが知っているフリオとキャロと本質的には同じなのだろう。だから、あいつらの闘い方も、弱点も、何もかも知っている。
今度こそ、いたぶってやろう。苦しめてやろう。泣かせてやろう……。
サナトスはそう考えるだけで胸が躍り、ウキウキしてくるのだった。
やがて人の気配が、この最深部に近づいてきた。
部屋の入り口まで様子を見に行ったポニーが慌てて戻ってくる。
「さあさあ、サナトスさま～♪　お待ちかねの、お友達が到着いたしましたわ♥」
「おお～、それはそれはめでたい！」
クライトが畏まり、泥棒夫婦がそろって立ち去ろうとする。

「では、あとはサナトスさまにお任せして……」
「待ちなよ」
サナトスが二人を呼び止めた。背中でギクッとした泥棒夫婦は、振り返って愛想笑いを浮かべる。
「な、なんでございましょう？　サナトスさま？」
クライトが、引きつった笑みを浮かべて訊ねる。
サナトスはキッと、二人を睨んだ。
「どこへ行くんだい？　ボクだけを残して」
「いや、あの、あたしたちがここにいても邪魔かなと思いまして……」
「どうして？　別に邪魔じゃないよ。これから始まる楽しいショーを見ていけばいいじゃないか」
「あ、いや、それがですね……」
クライトが口ごもる。隣のポニーが助け船を出した。
「じ、実はですね……この教会の中に、落とし物をしまして……それを二人で早く、見つけてこようかなと思っておりまして……」
「ふーん、だったら何も二人そろって行くことないじゃないか。ひとりは残って楽しいショーを見物しなよ」

「……」

何も答えられなかった。

やがて、

「は、はい、そうさせていただきます……」

泥棒夫婦は素直に従った。サナトスを怒らせてはマズイと思ったのだろう。ポニーは目配せで夫のクライトに行けと合図した。クライトはすまないという顔をして、その部屋から出ていった。それと同時に——別の入り口からフリオたちが駆け込んできた。

すかさずキャロが、脇に立っているポニーを指さして叫んだ。

「あ、おたずね者のポニーだわ！　やっぱり、あなたたちの仕業だったのね！」

「それよりもキャロ！　なんか変な奴が奥に立ってるぜ！」

ロニが、サナトスを睨みつけて言う。カイルとリフィルも気を抜かずに身構える。

部屋の中央に立っている少年の姿をしたサナトスは、笑いだした。

「やあ、久しぶりだね　二人とも！　と言っても——ボクの知っているフリオとキャロじゃないんだっけ？」

「えっ？　どうしてオレたちの名前を？」

フリオは怪訝そうに訊ね返した。

サナトスは、また笑った。

「知らなくて当然さ。ボクは別の世界のフリオとキャロと顔見知りだったからね」
「顔見知り？」
「そう、友達みたいなものだったかな」
「と、友達……オレは、お前のことなんか知らないぞ？」
フリオは確信して言い返す。
「だから知らなくて当然だって言ってるだろ。頭の悪い奴だな」
「な、なんだと！」
フリオは怒って杖を構えた。
「ハハハ、そのすぐにカッとなるところなんか、そっくりだよ！　バカフリオ君！」
「お前！　人のことバカっていう奴が、バカなんだぞ！　わかってンのか？」
「いいよ、ボクがバカでも……でも、本当にバカを見るのはどっちかな？」
サナトスが誰かに合図するかのように片手を挙げる。
すると、部屋の隅に隠れていたロイドとコレットがゆっくりと姿を現した。
「あ、ロイドさん！　コレットさん！」
フリオは構えた杖を下ろし、二人に近づこうとする。
「待て、フリオ！　様子が変だぞ！」
ロニが慌ててフリオを止めた。

「そうよ、フリオ――二人の目を見て！」

「えっ？」

リフィルに言われて、フリオは二人の顔に注目する。

ロイドとコレットは意識がないかのようだった。ただ虚空を見つめ、無表情のままゆっくりとサナトスの前に出てくる。

「まさか、ロイドとコレットさんって……」

キャロが声を震わせる。

「あれは、操られてる目だよ！」

「カイルの言うとおりね！」

リフィルが、歩み寄ってくるロイドとコレットに警戒する。

「操られてるって、どういうこと？」

フリオがみんなに聞いたとたん、

「アハハハハハ！　驚いたかい？　ボクはねえ、人の心だって支配することができるのさ！」

サナトスは、ロイドとコレットの後ろで高笑いした。

「特に英雄って呼ばれてる奴は、簡単に操れるよ！　宿命だとか、生まれたときの不幸だとかで、心に闇を持つ奴が意外と多いからね！」

フリオたちは呆然として、サナトスの話を聞いていた。
「あれ？　信じられないって言うのかい？　フフッ、しょうがないな……じゃあ、とりあえずみんなで殺し合ってみようか～♪」
「殺し合うって――」
フリオが言った瞬間だった。いきなりロイドが、二刀の剣で襲いかかってきたのだ。
「うわっ！　ロイドさん、何するんですか！」
床を転がって攻撃をかわしたフリオが叫ぶ。
ロイドは表情ひとつ変えず、床に倒れたフリオめがけて――再び剣を振り下ろそうとする。
ガキン！
その一撃を、ロニがポールアクスで受け止めた。
「ぐぐっ、早く逃げろ……フリオ！」
ロニが食い止めている隙に、フリオはその場からするりと抜け出した。
「――《リミュエレイヤー》！」
いきなりコレットが、複数の武器を放った。
「ぐあっ！」
避け切れず、ロニは悲鳴を上げてのけぞった。

「ロ、ロニッ！」
今度はカイルが剣をくり出して、ロイドに飛びかかっていく。
逃げ出したフリオは、壁に体を寄せる。
「そ、そんな……なんでだよ、なんで英雄同士が闘うんだよ！」
フリオは信じられなかった。
見たくもない光景だった。
憧れの英雄たちが仲間割れをして闘っているなんて——。
でも、現実に目の前でそれが起きている。
「くそっ、どういうことなんだよ！」
フリオは持っていた剣で、悔(くや)しさのあまり床を叩いた。
「何をしているの、フリオ！」
リフィルが駆け寄ってきた。
「……リ、リフィル先生……オレ……オレ……」
「落ち着きなさい、フリオ！」
しかしフリオはかぶりを振った。
「オレ、ダメだよ……見たくないよ、憧れの英雄が殺し合うところなんか！」
「気持ちはわかるわ。でも、現実から目をそらさないで！　いい？　これも試練(しれん)なの

よ」
「試練？」
フリオは顔を上げた。
「ロイドたちも、カイルたちも、それから時空の狭間に消えたスタンやリッドたちも、みんな、いろんな試練を乗り越えてきたの！　だから、その世界での英雄になれたのよ――」
リフィルはフリオに訴えた。
「人と同じことなんかしてたら、英雄にはなれないの！　人ができないことを最後まであきらめず頑張った者だけが、英雄になれるのよ――」
「で、でも……だからって……」
フリオは泣きそうな声をもらす。
「だから考えるのよ――見なさい！」
リフィルはフリオの肩を摑んで、カイルとロニ、そしてロイドとコレットの闘う姿を見せた。
「確かに、ロイドとコレットは操られているわ！　でも、それは相手を魔物だと思って闘っているのよ」
「魔物だと思って……」

「ええ、そうよ。二人は意識がここにないから区別が付かないだけなの。意識を取り戻せば、元のロイドとコレットに戻るはずよ」
「じゃあ、どうすればいいですか！」
フリオが、リフィルに向き直る。
「操ってる奴を倒すのよ」
「えっ？」
リフィルの表情が一層厳（きび）しくなった。
「ロイドとコレットは、カイルとロニに任せて――私たちは、サナトスを倒すのよ」
「まさか、オレに――」
「そうよ。キャロ！　こっち来て！」
リフィルは、部屋の隅で緊張していたキャロを呼んだ。
「――リフィル先生！」
青ざめた表情でキャロが寄ってくる。
リフィルは緊張した面持（おもも）ちで、二人に告げた。
「いい？　三人で、サナトスに突撃するわよ」
その言葉に一瞬の間があったが、
「はい、わかりました――リフィル先生！」

キャロは恐れることなく、きっぱりと返事した。
「オ、オレだってやります！」
フリオも負けじと続いた。
「フフッ、いい子たちね……」
リフィルは微笑んだ。こんなにも早く、なりきり師の二人を闘いの最前列に出すとは思わなかった。しかし多くの英雄たちが時空の狭間に消えてしまった今、カイルとロニだけにすべてを任せることはできない。何しろ彼らが戦っているロイドとコレットは、リフィルが育てた強敵なのだ。
それに戦況を楽しそうに見ているサナトスが、カイルとロニの攻撃に加わったら——たちまち二人は苦戦を強いられるだろう。そうなる前にこちらから仕掛けるしかない。そう——サナトスが相手にしていないフリオたちを、ここでイチかバチか出すしかない。油断している隙を突くしかないのだ——。
「二人とも、今こそなりきり服よ——自分たちの力を信じて。いいわね？」
「はい！」
フリオとキャロが真顔で、リフィルに頷く。
「あなたたちには、まだ接近戦は危険よ。だから遠距離から攻撃できる服を選びなさい！」
「わかりました！」

二人はリフィルに力強く返事すると、そろって《アーチャーの服》に着替えた。
弓を使った遠距離攻撃が可能で、敵から離れて闘いたい場合に有効な服だ。
二人はさっそく弓を構えて、サナトスに狙いを定める。
リフィルも彼らを援護するべく、サナトスに向けて術を放つ準備に入る。
——行くわよ！
リフィルは目で、二人に合図した。
三人の攻撃は、一斉に開始された。
「たあっ！」
「やあっ！」
二人同時に矢を放った。
さらにリフィルは、天から光の束を無数に降らせて攻撃する《レイ》で援護射撃する。
「うぎゃあああああああああっ！」
サナトスが、三人の攻撃を一気に浴びて悲鳴を上げる。
「く、くそっ！」
サナトスが怯んで、フリオとキャロを睨み返す。
「お前たちの相手はボクじゃないだろ！」
そう言ってサナトスは、ちらりとロイドやコレットたちのほうへ視線を向ける。彼ら

はカイルとロニの二人と闘うことで精一杯の様子だった。両者とも力は互角に近いのだろう。

「……そうか。お前たちは、遊んでくれる奴がいなくて寂しいんだな？　それでボクに相手してもらいたいわけか？」

微笑んで、サナトスが歩み出す。フリオとキャロが恐怖を感じて後ずさる。その前には間髪を入れずにリフィルが飛び出してくる。

「この子たちだけじゃないわ――私もよ！」

リフィルは、フリオたちを庇うように杖を構える。

「アハハハ、どうしてそんなに死に急ぐんだい！　もっとずるく生き延びようとは思わないのかい？　例えば、あいつらのようにさ！　アハハハハハ！」

サナトスは吹き出すように大笑いした。

そして、ちらりと視線を脇に向けると――そのずるく生き延びたい〝あいつら〟とやらの片割れがいた。

部屋の隅で、目立たないよう戦況を見守っていたポニーだ。

その表情は苛つきを露わにしている。

遅いね、父ちゃんは……。

いつ自分に、とばっちりが来るかわからない。生きた心地がしないのは辛いものがあ

る。
そんな顔つきだったが、
「お、お待たせ、母ちゃん！」
その声に、パッと笑顔に変わった。
やっと夫のクライトが戻ってきてくれた——近くの入り口から顔を出し、申し訳なさそうな目をこちらに向けているではないか。
「父ちゃん～♥」
ポニーが喜びの声を上げると、
「母ちゃん！　グズで、なかなか見つけられなくて……ごめんちゃい！」
今にも泣きそうな声で詫(わ)びている。
でも、しっかりと手のひらには目的の品を載せている。
「お手柄だよ、父ちゃん♥　いつも苦労かけるねえ——」
ポニーは壁を伝うようにクライトの許(もと)へ移動した。
「この《ソーサラーリング》さえいただければ、長居は無用よ！」
夫の許に歩み寄り、その手のひらに載せられた指輪を見ると、ポニーはいつもの欲深い笑みをギラリと輝かせた。こういうところを見ると、彼女は夫ではなく『宝物』のほうを愛しているようにも見えるのだが……。

いや、夫婦とは摩訶不思議なものなのだろう。
「生き馬を落とす飛ぶ鳥は後は逃げ出す、抜け目なく――」
クライトは得意の〝オレ様流の格言〟を決める。
妻のポニーも今回ばかりはツッコまず、笑って許すことにした。
そして、余裕たっぷりにサナトスのほうに振り返ると、
「じゃ、そういうことでサナトスさまぁ～っ！　あとはよろしく～♥」
と、泥棒稼業のサガなのか、逃げる前の捨て台詞で――色っぽく投げキッスなんかしてみせた。
そして二人はそそくさと逃げ出した。慌てふためくその逃げっぷりは、なんともカッコ悪いものだったが、フリオたちは悔しそうに見送った。
「アハハハハ！　見たかい、あいつら？　自分の欲望に忠実で――他人の都合はおかまいなし。いかにも人間らしいよなあ！」
サナトスは遠慮なしに笑った。
こんなところが人間の汚らわしくてヘドが出そうなところなんだ、とでも言いたげに聞こえる。
「さあ、今度はキミたちの番だ！」
余興は終わったと言わんばかりに、サナトスはフリオたちに向き直った。

「お前たちの、自分勝手な正義を押しつけてくれ！」
「自分勝手な正義だと？」
フリオの眉が、ピクリとつり上がった。
サナトスは見下したように言い返す。
「だってそうだろ？　自分たちが生き延びるためのサバイバル——それをお前たちは、正義という名で綺麗にオブラートに包んでる。結局うわべだけの戯言じゃないか！」
「何だと！」
フリオは、カッとなって言い返した。
「難しいことはよくわかんないけど、オレたちはただ一生懸命に生きてるだけだ！」
「それを正義と言い換えてるだけだろ？　フッ、くだらない——」
「くだらなくなんかない！　オレたちは信じてるんだ！　自分を！　仲間を——そして明日を！」
「聞き飽きたね。そんな台詞は！」
「やかましい——」
フリオが目の前のリフィルを押し退けて、サナトスに攻撃する。
「でやあああああぁぁっ！」
新たな矢を放ったが、あっけなくサナトスにかわされてしまった。それどころか、サ

ナトスが跳躍して、フリオのすぐ背後に着地する。
「食らえ、バカフリオ」
背中を突き飛ばされた。
「うわあっ！」
つんのめって、床に胸を打った。
顔を上げると、すぐそばにサナトスが立っている。
「フフッ……わざわざ時空を越えてやって来たんだぜ？　たっぷり楽しませてくれよな！」
サナトスの顔つきが変わった。
カッと双眸を見開き、フリオに襲いかかる。
「——危ない、フリオ！」
リフィルが叫んだと同時に《フォトン》を放つ。光を収束させた攻撃だ。
宙空を走り、サナトスの背中に命中した。
「うぬっ！　じゃ、邪魔するな！」
サナトスはお返しに、素早く《ウィンドカッター》を放つ。
突如にして、一陣の突風が渦を巻く。
「きゃあああああっ！」
リフィルが、風の刃で斬りつけられる。

「――リフィル先生！」
キャロが飛び出してくる。床に叩きつけられたリフィルは「早くフリオを！」と、援護に向かうよう指示する。
「はい、なりきりチェンジ！」
頷いたと同時に、キャロは《格闘家の服》に着替える。
「だからどうした！」
「見てなさいよ！」
キャロは拳をくり出す。
サナトスは余裕でかわした。そしてキャロの腕をつかまえて投げ飛ばす。
「きゃあああああっ」
壁に激突し、キャロが床に倒れて気を失う。
「フフッ、みんなまとめて地獄に送ってあげるよ！」
サナトスは詠唱時間の長い《フリーズランサー》を唱え出した。
――いけない、大技が来る！
しかし、
床に倒れたリフィルが身を起こそうとする。
「うぐぐっ……くそっ！」

フリオは床にうずくまったままだった。足がすくんでしまっていたのだ。
どうしてこんなときに！
悔しくて唇を噛みしめる。闘いにまだ慣れていない。でも、すぐ近くで術を唱えるサナトスを攻撃しなければ、キャロとリフィル先生が危ない。
何とかしなきゃ、何とか……二人を守らなきゃ！
その思いひとつで、弓矢を握りしめた。落ち着け、落ち着け……。
オレはやれる、オレはやれる……。
フリオも呪文のように心の中で唱える。
自分を励ますつもりだった。渾身の力を振り絞るつもりだった。
そしてフリオは立ち上がった。
「うおおおおおおおおおおおおおっ！」
雄たけびとともに、フリオはサナトスに襲いかかった。だがその刹那――。
「フリーズランサーッ！」
サナトスがフリオのほうを向いて、術を放った。
突然、床から氷の柱が飛び出してきた。
「――うぐっ！　あぐっ！」
フリオは床から飛び出してきた氷の柱に突き上げられ、天井へと持ち上げられていく。

「うがあああああああああああっ！」
悲鳴を上げた。その冷たさが全身を駆けめぐる。肌がチクチクして、次第に身動きが取れなくなっていく。
「美しいね……燃えつきる寸前の、人の命の輝きはさ！　アハハハ！」
サナトスの嘲笑う声が聞こえる。
冷気が全身を覆い、自分の体がどんどん凍っていくのを感じる。
──し、しまった！
そう思ったときは、もう遅かった。
自分の体は凍りつき、そして意識が闇に堕ちてしまった──。

＊＊＊

それから、どれだけの時間が過ぎたのだろう。
気がつくとフリオは、キャロに揺さぶり起こされていた。
「……あ、あれ？　ここは……オレは、氷づけになったんじゃ？」
目を開けると、自分の体が元に戻っているのに気づいた。
「なりきり服に感謝しなさいよ」

キャロがお姉さんのように言った。
「サ、サナトスはどこへ消えたんだ?」
「安心なさい、もう闘いは終わったから——」
見下ろすリフィルが、にっこりと微笑んだ。
フリオはむっくりと身を起こすと、あたりの静けさに驚いた。遠くのほうではコレットとロイドが仰向けに倒れていて、カイルとロニがそれぞれ介抱している。いったい、どれだけの時間が過ぎたのだろう。
「闘いは終わったって……倒したんですか、サナトスを?」
「ええ、もちろんよ」
リフィルは自慢げに答えた。
「そんな……」
「あら、自分で倒したかったの?」
「いえ、そんなわけじゃないけど……でもオレ、また……役に立てなくて……」
フリオは気落ちしたようにつぶやく。
今度こそ頑張ろうと思ったのに、また何も出来なかった。
リフィルの話によると、フリオが氷づけにされた間の激闘は凄まじいものだったらしい。

残されたリフィルとキャロは詠唱時間の短い晶術を放ち続け、とにかくサナトスに大技をくり出させないようにした。

その間、カイルとロニは操られているコレットに集中攻撃をかけ、彼女を気絶させることに成功すると、カイルがロイドとの一騎打ちに躍り出た。そしてロイドも気絶させると、二人はリフィルたちの許に駆け寄り——代わってサナトスとの闘いを引き受けたのである。

長期戦は苦しく辛いものだったが、二人は力を合わせて頑張った。

やがてサナトスは力の消耗が激しくなり、動きも鈍くなっていった。

「クッ……何でだよ、せっかく楽しく遊んでたのに！」

サナトスは、別世界に自分の存在を維持させる力さえ尽きてしまったのか、寂しそうな声をもらしながら消滅していった。

カイルとロニの勝利だった。

フリオが凍っている間に、そんな激闘があったのだ。

「う、うーん……」

ロイドの呻く声が響いた。

「あ、ロイドとコレットの意識が戻ったわ！」

キャロが振り返り、嬉しそうにロイドたちへと駆け出していく。

「さあ、行きましょう――フリオも」
リフィルに促(うなが)され、フリオも立ち上がった。
みんなが、目覚めたばかりのロイドとコレットのところに集まる。
「う……うう～ん……あれ？　なんでオレ、こんなとこに？」
「私たち、ドリーム号を追いかけて～……え～と……それから、なんだっけ？」
まだ夢の中をさまよっているような顔で、二人はポカ～ンとしていた。
「生身(なまみ)で時空を超えたのだから、記憶も多少は混乱するわね」
リフィルはもっともらしく解説する。
「とにかく無事でよかったわ。お帰りなさいロイド、コレット」
キャロは満面の笑みで言った。
一同の中に、安堵(あんど)の空気が広がる。仲間の無事に、ほっとした瞬間だった。
「はあ～、それにしても恐ろしい敵だったよ。心を操るなんてさ……」
カイルは思い返すようにつぶやいた。
「まったくだ。英雄同士が闘うなんて、もうごめんだな」
ロニも同意した。
そんな中で、ロイドがぽつりと言った。
「オレ、夢を見てたよ……」

「夢？」
リフィルが興味深げに聞いた。
「うん、子供に会ったんだ。夢の中で……そいつ、男のくせにメソメソ泣いてたっけ」
「あ、そうそう！　その子、お母さんを探してたんだよ！」
「えっ？」
ロイドは、隣のコレットを見た。
「まさか、コレットも――オレと同じ夢を見てたのか？」
「えっ、ロイドも？　あれ？　私、ロイドと同じ夢を見てたんだ〜、へぇ〜、不思議だね〜」
コレットは驚くどころか、逆に喜んでしまった。
「なっ、あ……コ、コレット……」
ロイドは、なぜか顔を真っ赤にして照れてしまう。
「エヘヘッ……ルンルン、ルルン……♪」
隣でコレットは、嬉しそうにハミングを奏でだす。
もはや、二人だけの世界が出来上がってしまっていた。
「ふぅ、ここもアツアツカップルね……」
リフィルは呆れたように、ロイドたちから離れる。そして考え込んだ。

「二人で見た、同じ子供の夢……もしかして……」
「あの、それって……サナトスのことなんでしょうか？」
リフィルのつぶやきに、キャロが反応した。
「あなたも、そう思う？」
「はい、何だかサナトスが——最後に寂しそうな顔を見せたから」
キャロは思い返しながら答えた。
「そう、私も同じことを考えていたわ……サナトスは、闘いの中で誰かに助けを求めようとしていたのかもしれないわね」
「リフィル先生……」
キャロが神妙な顔をする。
「これでわかったでしょ？　敵にも、いろいろな苦しみがあるのよ」
「はい……」
「でも、それに心を動かされてはいけないのよ。私たちが……生き抜くためにはね」
リフィルは、厳しいまなざしで言った。
たぶん、それは真実なのだろう。
敵も味方も、いろんな何かを背負っている。
そしてそれが、ぶつかるとき様々な悲劇を招く。

例えばさっきの、大切に思う人と闘わなければならないという試練があったのと同じように……。

キャロは、いずれ自分にもそんな試練が訪れるのだろうかと思った。

そのときに、自分はどうするのだろう。

もしも、その相手がフリオだったりしたら――。

私は、闘えるのだろうか。

答えは出なかった。

しかし、

「わかりました、リフィル先生!!」

キャロは明るさを取り戻そうと力強く返事した。

第三章　友に捧げる冒険

＊＊＊

「ふぅー、いつになったら会えるんだろ……あの子と……」
カイルは寂(さび)しそうにつぶやいた。
そこはミナクルの町にある夕焼け橋の上だった。カイルは欄干(らんかん)に両手を載せ、川の流れをじっと見下ろしていた。もうどれくらい、そうしていただろうか。のどかな町の景色は茜色(あかねいろ)に染まり、そろそろ夜の帳(とばり)が下りる頃だ。
「………」
ロニは、どう声をかけてやったらいいか悩んだ。
カイルと背中合わせに反対側の欄干に手を載せ、自分も同じように川の流れを見下ろしている。
――もう、限界かもな。
ロニは心の中でつぶやいた。

今日まで、いろんな時空を旅してきた。そのたびに『テイルズ オブ』世界の英雄たちを救出してきたが、カイルの求める女の子はなかなか見つけられずにいた。
カイルの想いは頂点に達しかけていた。
ラグナ遺跡の最上段で巨大レンズの中から飛び出してきた、あの謎めいた女の子……。彼女をすぐに追いかけたかったのに、カイルはその気持ちを我慢して別の時空をさまよう英雄たちを助けるために頑張ってきた。
しかしそのぶん、寂しさも募っていた。
誰かを助けるための行為が嫌だというわけではない。ただ、寂しいのだ。
その気持ちが痛いほどわかるだけにロニは明るく振る舞うのはやめ、黙ってそばにいてやることにした。
——いつの間にか、大人になろうとしているんだな……。
ロニが心の中で、カイルの成長を誉めてやりたくなったときだった。
「おーい、カイル！　ロニ！」
フリオが大声でこちらに駆けてくる。隣にはキャロもいた。
「新しい伝説が急に現れてさぁ！　なんか、かなりヤバイ中身なんだよ！」
「それに、聞いてカイル！　あの子の情報が！　リアラさんのことが書かれているらしいの！」

「何だって！」
キャロの声に、カイルが顔を上げた。走ってくる二人に、すぐさまカイルとロニも駆け寄る。
「あの子のことって？」
「はあ、はあ、はあ……間違いないわ。この英雄伝説に現れた新しい文章――これはリアラさんのことよ！」
「貸して！」
カイルは、キャロから英雄伝説を奪い取るようにして開いた。
横からロニも覗き込む。
二人して、その内容を読んだ。
『時空のつながりが変化するたびに、大いなる流れは矛盾をかき集め――〝時の吹きだまり〟を造ることで自らを正しい流れに戻しました。つまり、消えた時間を捨てる場所が作られたのです。この時の吹きだまりに迷い込んだ三人の英雄がいます。ひとりは遺跡に眠るレンズから現れた聖女、もうひとりはせっかちで口の悪いレンズハンター、そして三人めは妹思いの妖精弓の射手でした』

「遺跡に眠るレンズから……」
「おい、カイル。これは――」
「間違いないよ、ロニ！　あの子のことだ！」
「迷い込んだ英雄が戻らない……すると、今ある伝説はどうなるんだ？」
フリオが意味を理解できずに訊ねると、
「さながらドミノ倒しでしょうね……」
「ドミノ倒しって……つまり、どういうことだ？」
キャロに説明されても、まだフリオはわからなかった。
「あ〜、つまりだな……いろんな世界の歴史が、次々にぶっ倒れてしまうってことじゃないのか？」
ロニがなんとか、わかりやすく説明しようとした。
「ぶっ倒れるって……どうなるんだ？」
「だからだな、つまり、よくわからないけど……世界が滅びるってことじゃないのか」
説明しながらロニ自身も緊張が高まってきた。
「世界が滅びる……た、大変だ！　なんとかしなきゃ！」
夕焼けの空の下で、フリオの声が橋の上に響（ひび）いた。

＊＊＊

「時の吹きだまりに、英雄たちが次々に飲み込まれておるようじゃ」

翌朝、ブラウン博士が集合した一同に言った。

準備を整えてきた世界の英雄たちが、古代史研究所の中庭にずらりと並ぶ。

シンフォニア世界のロイド、コレット、リフィル。

新デスティニー世界のカイル、ロニ。

そして新たに加わったファンタジア世界のクラースとアーチェ。

さらにデスティニー伝説の女戦士マリーと、まん丸い銀縁（ぎんぶち）眼鏡が印象的な司祭のフィリア。二人は『神の眼の大神殿』で、バルバトスに苦しめられていたところを、フリオたちに助けられたのだった。

以上、九人の英雄たちがフリオとキャロの後ろに立っている。

「非常に危険な空間じゃが……放っておくわけにもいくまい」

「時の吹きだまりに迷い込んだ、英雄たちの救出が目的じゃ――」

ドリーム2号を挟んで古代史研究所の中庭に立つ、ブラウン博士とホワイト博士が一同に告げた。

「時の吹きだまりは視界が悪く、敵も間近に迫るまで見えん！」
「さらに世界自体が不安定で、タイムリミットもある！」
「それとな……」
ブラウン博士が、急に言葉を濁した。
言いづらそうなその表情を見かねて、隣のホワイト博士が引き継ぐように言った。
「よいか……助ける英雄も、正気とは限らんぞ」
「えっ？　正気とは限らない？」
フリオがそれを聞いて、目をしばたたく。
「つまり、敵になるかもってことよ」
「えっ、また！」
たちまちフリオは、戦意を削がれたような顔になる。
見たくもない光景が、また頭の中によみがえってきた。
サナトスと闘ったときの、ロイドとカイルが争った光景……。
仲間同士で闘う姿は、もう見たくないと思っていた。
それなのに、今度もそれが起こりうるのか……。
気落ちしたフリオの肩をアーチェが叩く。
「フリオ、そんなに暗い顔してちゃダメだよ～」

振り返ると、赤毛の優しい笑顔があった。
ローンヴァレイ出身のハーフエルフの魔術師――いや、ホウキに跨って空を飛べるのだから魔女とも言えなくはないが、しかしその人柄はとても気さくで、頼りがいのあるお姉さんといった雰囲気だ。
彼女も数日前に、泥棒夫婦の仕業によってダオス城の地下牢にクラースとともに閉じ込められていたところを、フリオたちによって救出された。
「そうよ、フリオ。一度あったことは二度ある――試練とは、そういうものよ」
新たにリフィルが歩み寄ってくる。
その表情は、覚悟を決めたような様子さえうかがえた。
「戦友であるはずの英雄と闘う――それは、仲間を信じる気持ちを揺るがす行為かもしれないわ。でもね、それ以上に気持ちを強く持てば、必ず道は切り開けるものよ」
「リフィル先生……」
「仲間を大切にしたいフリオの気持ちはよくわかるわ。だからね、その大切にしたいと思う気持ちを力に変えて、相手を救ってあげるのよ」
「相手を……救う？」
リフィルの話に、フリオは神妙になる。
「そうよ、相手を倒すんじゃなくて助けるのよ――」

「ウン♪　リフィルの言うとおりだよ♪」
　隣のアーチェも、にっこり笑った。
　それで、フリオの中にあった不安が消えた。
「わかったよ……オレ、もっと自分が強くなれるように頑張ってみるよ！　ありがとう、リフィル先生！　アーチェさん！」
「さん付けはいらないよ、アーチェでいいよ」
「えっ、あ……いや、ハハハ」
　年上の綺麗なアーチェからそう言われて、フリオはちょっと照れた。
「何よ～、フリオったらデレデレしちゃって！」
　そばで見ていたキャロの態度がいきなり悪くなった。続けて文句を言ってくる。
「ホ～ントにフリオったら――女の人から優しくされると、す～ぐデレデレしちゃうんだから！」
「な、何だと、キャロ！　オレはデレデレなんかしてないぜ！」
「してる！」
「してない！」
「してる、してる、してるよーだっ！」
「してない、してない、してないよーだっ！」

フリオとキャロは睨み合った。

「まあまあ、お二人さん。どっちでもいいから、早く出発しましょう――」

リフィルが割って入ると、フリオはハッと我に返った。

「そうだよ――オレたちは、仲間の英雄を助けるために早く行かなきゃ！」

やっとフリオが使命を思い出し、一同を見渡して叫んだ。

「みんな、行こう！」

「おうっ！」

「よし！　行くぜ！」

ずらりと並んだ英雄たちが次々に頷き、ドリーム2号へと乗り込んでいく。

「それじゃ、行ってきます――ブラウン博士、ホワイト博士！」

「うむ、気をつけてな！」

二人の博士が声をそろえた。

「はい！」

フリオは力強く返事すると、最後にドリーム2号に乗り込んだ。ハッチが閉じられ、やがて時空転移のドライブ音が唸りだす。

「世界と歴史のレスキュー隊！　出動せよっ！」

「ドリーム号――発進っ！」

両博士の掛け声とともに、ドリーム2号は別世界に旅立つ。
時空の歪(ゆが)みとともに、ドリーム2号は瞬時にして消え去った。古代史研究所の中庭に一陣の風が吹き、とたんに静寂(せいじゃく)が訪れる。
「ふぅ……今度こそ、大丈夫かのぅ……」
見送ったブラウン博士が心配そうにつぶやいた。
「歴史は繰(く)り返(かえ)すというが……わしも、今のフリオとキャロを信じたいものじゃよ」
隣のホワイト博士は、意味ありげな言葉を続ける。
いったい、白髪になるほどのショックを受けた未来とは——なんなのだろうか。

＊＊＊

「目標座標に到着！」
「ドリーム号、着陸完了！」
操縦するフリオとキャロが、ドリーム2号を停止させた。
ガクンと体が少し揺れて駆動音が次第に小さくなっていく。
「……な、なんだか不安定な場所だな？」
「仕方ないわよ。時の吹きだまりって、本来は存在していない時空なんだもの」

「だよな……制限時間内に帰らないと、オレたちもここから出られなくなってしまうんだからな」
　フリオは、隣の操縦席のキャロに言った。
「そうね、急ぎましょう――」
と言って後ろを振り返ると、機内の思い思いの場所で待機していたはずの英雄たちが一斉に床に倒れ込んでいた。
「あれ？　みんなどうしたの？」
　キャロが驚いた顔で訊ねる。
「だってよ～、いつも荒っぽいんだもんなぁ、二人は～」
「もうちょっと、ちゃんと飛んで欲しいもんだぜ～」
　折り重なるように倒れたカイルとロニが呻きながら答える。
「さあ、みんな早く！　ドリーム号の外に――時間がないわ！」
と、キャロはそれで誤魔化す気でいた。
「わかったよ……よいしょっと」
「アイテテテ！　だ、誰だ、オレの手を踏んだのは！」
「コレットじゃないよォ～」
「あら、ごめんなさい。私だったかも……」

その間にフリオは、ドリーム号のハッチを開けた。一番乗りで外に出てみると、そこは濃い霧に覆われた闇の世界だった。
「うへ～、ひどい霧……キャロ、どこだ～？」
「――ここにいるわよ」
「ひゃああ！」
すぐ隣で返事したキャロに、フリオはびっくりして飛び上がった。
「何を驚いてるのよ。このくらいの距離なら、ちゃんとお互いに見えるでしょ？」
「悪い……一瞬、オバケかと」
「なんですって？」
「いや！　違う！　単なる見間違いだって！　ほら、こんだけ霧が深いとね、誰がどこにいるかわからなくなっちゃうから！」
「どさくさにまぎれて、変なトコさわらないでよ！」
「変なトコって、どこ～？」
「知らないわよ、もォ！」
キャロは、ほっぺたをふくらませて先に歩き出した。
「リフィル先生……」
などと、ガヤガヤやっている。

「お、おい、キャロ！　危ないぞ！　勝手にひとりで進むな――」
「大丈夫、大丈夫♪　へっちゃらのガンガンよ～♪」
フリオが呼び止めるのも聞かず、キャロはムキになって進んでいく。
「おい、待てよ――その先は、崖になってるかもしれないぞ！」
「えっ？」
キャロが、ピタリと歩みを止めた。
濃い霧の中で、自分の足元を見つめる。かろうじて床は、はっきり見える。しかし壁らしきものは霧に閉ざされて見えず、見上げても天井はなく、闇の空が広がっているだけだった。
おかしい……フリオの言うとおり、なんだか変だ。
床だけが、闇の中に浮かんでいるような気がする。
キャロはおそるおそる歩みを進めて、床の先がどうなっているか確かめようとした。
やがて、床の縁（ふち）が見えた。
やっぱり――。
床の端は、絶壁のように奈落（ならく）の底へと続いている。そのとたん、キャロは背筋がゾッとした。もし床をあまり確認しないで、いい気になって前進していたら――ここから落ちていたかもしれないのだ。

「フ、フリオ〰〰」
キャロは怖くなって、フリオを呼んだ。
「どうした、キャロ！」
フリオとドリーム号から降り立ったばかりの英雄たちが、慌てて駆け寄ってくる。
「見て！　ここ、橋のように縁が切れて――その下は闇の世界になっているわ！」
キャロはぶるぶる震えながら、フリオに言った。
「だから言っただろ！　ここは不完全な場所なんだ。床が途中で切れてたり、壁がなかったり、天井もなかったりするんだ」
「――じゃあ、床も完全にあるとは限らない？」
「そうだよ。うっかり足を踏み外したら、一巻の終わりって世界のような気がしていたんだ」
フリオの説明にキャロは目を丸くさせる。
「……ということは、迷路みたいに橋がずっと続いてるんだ？　何でそんなことがわかったの？」
「そりゃわかるぜ。ドリーム号が着陸したとき、ガクンって揺れただろ？　あれは、この不完全な床の縁に当たったからだよ」
「えっ？　そうだったの？」

「ああ。何とかうまく移動させてバランスを取ったからよかったけど、もしあのまま無理やり着陸したら——ドリーム号は、この不完全な床の上にきちんと乗っからなくて、闇の底に転がり落ちていたかもしれないよ」
「す、すごい、フリオ……そんなところまで考えて操縦していたのね？」
「へへッ、少しはオレもましになったかな？」
フリオは照れくさそうに頭をかいた。
「なるほど、習うより慣れろだな？」
感心したようにロニが言った。
「偉いわ、フリオ——」
リフィルも誉めてくれた。
フリオは初めてみんなから認められたことを喜びたかったが、それを懸命に我慢した。
指揮官は、これからが本当の勝負なのだ。
「ふぅ……それにしても困ったな。目をこらしても、ほとんど先が見えないよ。こんな中で、人探しするのか……」
指揮官として先頭に立ったフリオは、さっそくため息をついた。
「これじゃ、よほど近づかないと怪物と区別もつかないぜ」
それどころか、下手に歩くと足を踏み外して奈落の底に落ちかねない。

「おまけに制限時間のオマケつき。やっかいね――」
キャロがお手上げと言いたげに、両手を広げてみせる。
「こんな不気味(ぶきみ)なとこに、本当に英雄たちが迷子になってるのかなぁ……」
ぽつりと、フリオが疑うように言ったときだった。
「その迷子って、がさつで口の悪いヘナチョコ狩人じゃないのォ？」
ホウキに跨がって宙に浮かぶアーチェが言った。
「な～んか、ここに居そうな気がするんだよね～」
霧に覆(おお)われた世界を見回し、ちょっぴり懐かしそうな顔をした。
それをキャロは見逃さなかった。
「あ、もしかしてその迷子さん、アーチェさんの運命の人なんですか？」
「へ？　あいつと　あたしが!?　笑わせないでよ、１０２年早いって！」
アーチェは人差し指を立てて、ノンノンと否定するように振った。
「１０２年？　ずいぶん半端(はんぱ)だな」
フリオが腕を組んで、年数が半端な意味を考えだしたときだ。
「……っ！　いるよ！」
「えっ？」
突然の声にフリオがどきりとした。振り返ると、カイルが輪の中から出てくる。

「あの子だ！　あの子が、オレの名前を呼んでる！」
遠くを眺め、確信したように言う。その顔は真剣そのものだった。
フリオは霧の中で耳をすましてみたが、
「な、何も聴こえないけど……」
と、首をひねる。
しかし、輪の中から確信した表情で出てきたのはカイルだけではなかった。女戦士のマリーも、遠くを望んでつぶやいたのである。
「この声……たぶん相棒だ」
「相棒？」
「そう、ルーティ……疲れきって混乱してる。私にしか助けられない……」
その名を聞いて、カイルはハッと振り返った。
何を隠そう、ルーティとはカイルの母親の名である。
……母さんが、ここに……。
カイルは複雑な表情になった。
そのとき、ロニが近寄ってきてささやく。
「わかってるよな、カイル。ここにいるルーティさんは――お前をまだ産んじゃいないないんだぞ」

「たぶん、お前とほとんど歳も変わらないだろうな。そんな若いルーティさんに、お前が息子だなんて名乗ったら、卒倒してしまうかもしれないぞ？」
「わかってるよ、ロニ……絶対に、母さんなんて呼んだりしないから……」
カイルは少し寂しそうに誓った。
しばらくして、
「フリオ、こうしてても仕方ないわ――」
リフィルが言った。
「制限時間もあることだし、手分けして探しましょう！」
その提案で、フリオたちは四つのチームに別れることになった。
まず、フリオとキャロの本隊にはロイド、コレット、リフィルの総勢五人。
デスティニー伝説のマリーとフィリアのチーム。
ファンタジア伝説のアーチェとクラース。
新デスティニー伝説のカイルとロニ――という分け方だった。
四つのチームは、迷路のようになった不完全な床をそれぞれの方向に散っていく。もし、前方に人の影を見かけたときは声をかけ合い、霧の中で怪物と間違えないよう約束し合って分かれた。

「う、うん……」

そして、しばらく進んだあと、
「あ！　あれは――」
キャロが前方を指さした。
ぼんやりと見える人影――それは徐々に、魔物に連れられるリアラの姿に変化した。
「リ、リアラさん！」
「キャロ！　気をつけろ！」
隣のフリオが警戒する。
リアラは、全身を黒い衣（ころも）で覆ったポルターガイストに両側を挟まれて歩んでくる。その表情はサナトスに操られていたロイドとコレットと同じく、虚（うつ）ろで意識がないかのように見えた。
「見ろよ、あのときと同じだ――」
「でも、せっかく見つけたのよ！　助けなきゃ――」
キャロはフリオの注意を振り切って、リアラに向かっていく。
「あ、おい！　待て！」
フリオが追いかけていく。
「ちょっと、二人とも！　早まらないで！」
リフィルが叫ぶ。ロイド、コレットとともにあとを追った。

＊＊＊

――リアラさんを助け出せば、伝説が元どおりになるわ！
キャロはその思いに突き動かされるように、リアラの前に駆け寄った。
「リアラさん！」
「……………」
彼女からの返事はない。
「一緒に帰りましょ。あなたには、ふさわしい人が待ってるから――」
「……ふさわしい人……」
リアラが、ふいにつぶやいて立ち止まる。両脇のポルターガイストたちも、宙に浮かんだまま静止する。ポルターガイストたちは余裕があるらしく、状況を見守っていた。
キャロはこのチャンスを逃すまいと、説得を試みる。
「そう……その人は、リアラさんにとってふさわしい人なのよ――その人が、この近くに来てあなたを探しているのよ！」
大きな声で訴えてみたが、リアラの表情に変化はない。
「探してる……どうして？」

「あなたを、待っていたからよ！」
「待っている……私が待ってるのは、真の英雄だけ……」
リアラはまばたきもせず、人形のように唇だけを動かす。
キャロはあきらめなかった。
「ええ、そうよ。その人こそ――真の英雄よ！　リアラさん、その人だけが――あなたにとっての真の英雄になれる人なのよ！」
「真の英雄……あなたが？」
「い、いえ、違うわ――私のことじゃないわ」
慌ててキャロが手を振って否定したときだった。
「あなたは……あなたは……英雄じゃない！」
いきなりリアラが、敵意を剥き出しにした。
「――リアラさん！」
飛びかかってきたリアラに、キャロが悲鳴を上げる。
「危ない、キャロ！」
後ろからフリオの叫び声が聞こえた。キャロを助けに来たのだ。
宙空でフリオとリアラが激突する。
「――ぐふっ！」

フリオが床に叩きつけられる。あっけなく弾き飛ばされたらしい。
ゆっくりとリアラが、目の前に着地する。
「フリオ！」
キャロが駆け寄ろうとする。
「下がってろ、キャロ！」
「フ、フリオ！」
「闘うのはお前じゃない、オレだ！」
歯を食いしばって、フリオが立ち上がる。
目の前のリアラが次の攻撃をくり出そうと身構える。
「キャロ！　お前は、カイルをここに連れてこい！　それまで、オレがリアラを食い止めるから！」
フリオは目の前のリアラに立ち向かいながら、後ろのキャロに叫んだ。
「で、でも、私だって……」
キャロは戸惑いをみせる。そのとき、後ろから肩を叩かれた。
振り返ると、リフィルだった。
「キャロ、指揮官の言うことは聞くべきよ――」
「し、指揮官？」

「そう、今のフリオは、ああ見えて冷静よ」
「そ、そんな……」
きっぱり言われて、キャロは言い返したくなったが、
「早くカイルを連れてきなさい――」
リフィルに睨まれてしまった。
「は、はい」
キャロは頷くしかなかった。
「いい子ね、素直で――大丈夫、フリオのことなら、私たちシンフォニア・チームに任せなさい！」
そう言うと、後ろのロイドが剣を抜いてフリオの隣に駆け寄る。
ジーニアスとコレットも、真剣な表情であとに続く。フリオを守る陣形だ。
私は、英雄を探さなきゃ……。
キャロは心の中でつぶやき、脱兎のごとくその場から離れた。
走りながら、次第に悔しさが込み上げてきた。
――何よ、フリオったら、偉そうに！
なぜか怒っていた。
なぜ、腹立たしくなるのかわからない。

なぜ、胸がドキドキして、こんなに悔しくなるんだろう……。
急にフリオがたくましく思えて、自分より大人に見えた気がした。今は、そんなことに腹を立てている場合じゃないのに。
……どうして。
キャロはその答えを見つける間もなく、目の前でくり広げられる新たな闘いに遭遇した。
それは女戦士マリーと司祭のフィリアが、射手の男の子と争っている場面だった。
「あ、あれはチェスター……っ！」
キャロは思わず立ち止まった。
青みがかった長い銀髪を後ろで結い、切れ長の目が印象的な彼は、ファンタジア世界の英雄のひとり、チェスターである。
「怪物め！　人間に化けても、オレの目は誤魔化せないぜ！」
チェスターは、マリーとフィリアに対して矢を放つ。
マリーは床を転がってかわし、フィリアは剣を振り回して矢を打ち払った。
「目を覚ましてください！　お願いです！」
フィリアは叫んだあと、懐から小さな爆弾を取り出す。
「——《フィリアボム》！」

「ふっく！」
チェスターが飛び跳ねて爆発をかわす。
「これ以上、私を困らせないでください！」
まん丸い眼鏡のフィリアは、力強く訴える。しかしチェスターの耳には届いていない。
「き、聞こえる……アミィの声が聞こえるんだ！」
幻覚でも見ているのか、マリーとフィリアめがけて再び矢を放ってくる。
「どこだ、どこにいるんだアミィ！　今、兄さんが助けてやるぞ！」
チェスターは、矢を放ち続ける。
戦況を見守るキャロは身震いした。
……アミィって、チェスターの亡くなった妹さんのこと……？
その瞬間――ハッとした。
頭の中に、サナトスの言った言葉がよみがえってくる。
《英雄たちは不幸な生い立ちや宿命や、過去の哀しみに縛られているからね。操るのは簡単なのさ――》
そういうことだったのか……と、キャロは理解した。

英雄たちは元から強かったんじゃない。心の闇を克服しようとして、哀しみにくれる自分と闘ってきたのだ。そして強くなろうと必死だったのだ。
——だから、心が弱点になってしまう。
キャロは、ようやくわかった気がした。
英雄には、必ず支えてくれる人がいるんだ。だから今、その人を彼らの前に連れてくるしかない。フリオが言った意味はそのことだったのだ。キャロは、再び走った。
チェスターの前には、アーチェを連れてくるしかない。ファンタジア世界の英雄たちと、チェスターを会わせてあげるんだ。
心の中で叫びながら走っていたときだ。
「やっほー、キャロ！」
頭上で声がした。見上げると、ホウキに跨がったアーチェが飛んでいる。
「——アーチェさん！　あ、あっちにチェスターが！」
「うん、わかってるよ——」
「えっ？」
「今から行ってやらないとね！」
もうすでに、知っているかのような口ぶりだった。どうしてチェスターの居場所がわかったのだろう。

ホウキに乗って飛び去るアーチェは、最後に言った。
「女のカンよ！　特にハーフエルフのカンは当たるのよ！　なーんてね！」
キャロは気圧（けお）されて見送った。
でも、チェスターの心の闇には――あのくらいの、おおらかな明るさを持つ人がお似合いなんだろうと思った。
「あ、そうだ！」
キャロは思い出したようにアーチェを追って駆け戻る。
到着したアーチェは、チェスターの頭上を旋回（せんかい）しながら訊ねていた。
「――ちょっとォ、こんなとこで何やってんの？　また弓の特訓？」
まるで緊張感のない、普段の会話のような雰囲気にしか見えなかった。
だがそのとたん、異変が起こった。
「ああっ……」
マリーとフィリアは驚いた顔で動きを止める。二人して、信じられないような表情をした。
チェスターの攻撃がピタリと止まったのである。
「アーチェか……ああ、そうだ。弓の特訓だ……ここなら時間もたたないし、獲物の怪物もウジャウジャいるしな」

なんと、チェスターが返事したた。意識が戻ってきたのだ。
アーチェはホウキに乗って宙を舞いながら、チェスターとの会話を続ける。
「ねえ、もしかして……ここから迷って帰れなくなった、な～んて？　あんたに限って、そんなことないわよねェ？」
「う、うるせえ！　当たり前だろ！」
「んじゃ、そろそろ帰ろうよ」
アーチェが優しく言う。
一瞬の間があった。彼女は静かに着地して、真顔でチェスターを見つめる。
「………」
チェスターも、アーチェを見つめ返す。ゆっくりと、ゆっくりと……二人の顔が微笑みに変わっていく。
「あ、ああ……そうだな」
チェスターは、今までに見せたことのない笑顔で頷いた。

＊＊＊

カイルたちは驚いていた。

目の前にいるレンズハンターは、奇怪な行動を繰り返していたのである。
「お金～、お金～、あたしの大事なお金～っ……誰にも渡さないわよ！」
ルーティだった。
短めの黒髪に露出部分の多い軽装なその姿は、息子のカイルが恥ずかしくなるくらい色っぽくて若々しい。自分の母親が若くて美しいのは嬉しいものだが、しかしそのルーティは床に這いつくばって、ありもしないお金を手で一生懸命かき集めていた。
それは息子のカイルにとって、見ていてさらに恥ずかしくなる光景だった。
「お、お金……エヘヘッ……さぁてと……こっちにも！　あ、こっちにも！」
ルーティはひとりで喜んでいた。
ロニと一緒に言葉もなく眺めていたカイルだったが、とうとうたまらず声をかけた。
「しっかりしてよ、母さ……いや、ルーティさん！」
思わず言いかけた『母さん』という言葉を呑み込んだ。
しかし、ルーティはこちらに振り返らない。
「ロニ……」
カイルは、ロニに悲しげな顔を向けた。
「仕方ない、ルーティさんはまだお前を産んでないからな……お前の声は届かないんだろう」

ロニは言いづらそうに答える。
「じゃあ、どうすれば……」
「若いときのルーティさんが、最も信頼していた人の言葉なら、あるいはな……」
「それって、オレの父さん？」
「いや――」
ロニが、スタンさんと一緒になる前に信頼していた人だと言いかけたときだった。
「カイル！　ロニ！」
キャロがマリーを連れて駆け寄ってきた。
その瞬間、
「仲間に化けてもダマされない！　あたしのお金は渡せないわ！」
慌ててルーティは、床の上でお金をかき集めるような動作をする。
明らかに何かに脅えて、焦りだしたかのように見えた。
「このお金は渡せない！　あの子たちに必要なお金なんだッ！　殺されたって渡すもんかッ！」
必死で叫んでいる。
「……あ、あの子たち？　まだオレ生まれてないけど……ああ、孤児院のことか……」
カイルは納得したようにつぶやく。母のルーティは自分が育った孤児院を守るため、

若いときにレンズハンターになった、と——ルーティ自身が以前に教えてくれていたのだ。息子に下手な隠し事をしない、ルーティらしい。
「ルーティ……」
キャロとともに駆けつけたマリーは、みんなの前から歩み出していく。
向かう先に、ルーティがいる。彼女の動きが止まった。
一瞬の静寂（せいじゃく）が訪れる。
「ルーティ……私がわかるか？　マリーだ……遅くなって、すまなかったな」
歩み寄って、マリーが優しく声をかけた。
ルーティの顔が、その声に反応してほころぶ。
「……マリー？　マリーなのね！　今まで何やってたのよ！」
甘える口調（くちょう）に変わった。
「ルーティ、すまない……」
マリーは真剣に詫びる。
「大丈夫か？　ケガはなかったか？」
「ええ……なんとか無事よ。はあ、まったく何なのよ……ここは？」
意識の戻ったルーティは、とたんにグチっぽくなった。
「歩いても歩いても出口はないし……倒しても倒しても怪物が……」

「心配ない、みんな一緒だ。ひとりで歩けるか？」
「ええ、なんとかね」
ルーティが頷くと、マリーは手を貸した。そして友を優しく抱き起こす。
「あ、ありがとう、マリー……」
素直な声だった。もうルーティは元に戻った。
そのことを確認したキャロは、隣で見守っていたカイルに言った。
「カイル！　すぐに来て！」
「えっ？」
「リアラさんがいたの！」
「何だって！　あの子が？」
「ええ、そうよ——」
「カイル、ここは任せとけ——」
すぐさまロニが言った。
「いいから、早く行け！」
「わかった、ロニ！　ありがとう！」
カイルは感謝すると、キャロとともに走った。
深い霧に覆われた中を、二人して駆ける。

「どっちだ！」
「こっちよ！」
キャロが案内していく。
そのときだ。
――ドサッ！
頭上からレッドローバーが現われた。
「くそっ！」
カイルが剣を抜こうとする。
「ダメよ、カイル！　ここは私に任せて！」
「えっ？」
カイルが驚いた顔で、キャロを見る。
「つまりね――カイルを早くリアラに会わせろって、クソ生意気な指揮官からの命令なの！」
キャロはめんどくさそうに言った。でも顔は微笑んでいて、ちっとも嫌そうじゃなかった。
そして《格闘家の服》に変身すると、敵に向かって身構える。
「さあ、早く！　リアラさんを救ってあげて！　ここを真っ直ぐ行ったところよ！」

「わ、わかった——すまない！」
カイルは自分が今やるべきことを悟り、死神の相手をキャロに任せた。
言われたとおり、一直線に走った。
——ついに再会できる、あの子に！
そう思っただけで、全身に力がみなぎってくる。
だが——
「あっ！」
カイルは足を止めた。
今度は、あの泥棒夫婦が目の前にいた。
「へへッ、ここから先には行かせませんぜ～」
「一組ぐらい離れ離れにならないと、悪玉のメンツが丸つぶれだものねえ～」
ポニーとクライトが、ニヤニヤしながら立ち塞がる。
「お、お前ら、どかないと！」
カイルが剣を抜こうとする。
「おっと！　お前さんの相手は、こっちだよ～ん♥」
と、ポニーとクライトの二人が左右に分かれた。二人の背後に隠れていた少年と少女が姿を現す。

「久しぶりだね、カイル――」
「――ええっ！　その声は？」
カイルは目を見開く。どこかで見覚えのある二人だったのだ。
「あのときはラグナ遺跡を案内してくれて、ご苦労さま♪」
その十五歳くらいの少年と少女は、仮面で顔を隠している。さらになりきり服もまとっていた。
カイルは信じられないという顔になる。
「ね、ねえ、なんで？　なんであのときのキミたちが――西の町へ行ったんじゃなかったのか？」
「そんなところに行くわけがないでしょ」
「そうだよ、元々あれは――お前とロニがラグナ遺跡の最上段に着くのを、遅らせるための作戦だったんだからね」
「作戦？」
カイルが、ますます目を丸くさせる。
「そうよ。歴史上の到着時間を遅らせるための作戦。だからカイルとロニを二人で遠回りさせたのよ」
「な、なんで、そんなことを？」

「ポニーさまとクライトさまの命令だったからさ！」
「命令！　じ、じゃあ——キミたちは、その泥棒たちの手下だったのかっ！」
カイルは冗談じゃないと言いたげに叫ぶ。
仮面のなりきり師コンビと、ポニーとクライトの泥棒夫婦が一斉に笑いだす。
「バ、バカにするな！」
蹴散らしてでも、リアラの許に行く——そう決意してカイルは突進した。
「おっと、そうはさせるか！」
男の仮面なりきり師が、カイルに一撃を見舞う。瞬時にして格闘家のなりきり服に着替えていた。
「うわぁっ！」
カイルは床に背中を打ちつける。
「フフッ、私たちの力を見くびらないことね！」
「そうだぜ！　オレたちは経験豊富ななりきり師だからな～。まだまだ未熟なカイルなんかにゃ、負けないいんだぜ～っと！」
歌うように男のなりきり師が言う。
「ふ、ふざけるなぁ！」
カイルは、再び立ち上がって突進する。だが、彼らのほうが力も技も上だった。瞬時

にして変身する仮面なりきり師コンビは、スピードも体力も上回っていた。ゆえに隙を狙って、彼らの間を通り抜けられそうにない。
「はあ、はあ、はあ……くそっ……」
徐々にカイルの力は消耗（しょうもう）していった。
「フハハハハ、もう限界なのかな？」
「そろそろ、とどめを刺してあげましょうよ――」
仮面のなりきり師コンビは、動きの鈍くなったカイルにゆっくりと近づいてくる。
――もうダメだ、ここまでか……。
と、カイルが覚悟したときだった。
何者かが、かまいたちのように仮面なりきり師を襲った。
「ぐあっ！」
「きゃあーっ！」
「……えっ？」
カイルは、目の前に降り立った人物を不思議そうに眺めた。その男は、仮面なりきり師を簡単に吹っ飛ばしてしまったのだ。
「ひ、ひやあぁ～っ！　何よ、こいつ！　なりきり師コンビが気絶しちゃったじゃないかい！」

「母ちゃん、逃げたほうがいいよ！　こいつ、強そうだぁ～」
「あ、待ってくれよ、父ちゃん！」
泥棒夫婦のポニーとクライトは、やられた部下を置いて逃げ出した。
カイルの目の前には、舞い降りた少年が立っているだけになった。
「キ、キミは……？」
カイルは、その謎の人物に声をかける。彼も仮面で顔を隠していた。竜の貌をした骨のように白い仮面で、全身は黒ずくめの格好をしている。
やがて彼は言った。
「ボクの名は、ジューダス！」
「ジ、ジューダス……」
カイルはその名の響きに――いや、彼の聡明そうな声そのものに、なぜか身が震えた。
この震えはなんなのか――。
「カイル……」
ジューダスと名乗った少年が呼びかけてくる。
「ど、どうして僕の名前を！」
「心配するな。ラグナ遺跡のあと、お前とは出会う運命にある――」
「ラグナ遺跡のあとに？」

「お前が元の世界に戻れば、僕とこうして出会ってしまった記憶も消える。だから安心しろ」
「……」
彼の話は信じがたい内容だったが、でもカイルは信じたいと思い始めていた。
喋(しゃべ)り方(かた)は厳しい口調だけど、仮面の下に見える彼の瞳――カイルを見つめるまなざしは、とても優しい……。それがカイルに伝わっていた。
「それよりも、早くしろ」
その男――ジューダスは言った。
「僕がこの世界に干渉(かんしょう)できるのは、ほんのわずかな時間だけだ――」
「えっ？」
「カイル。僕は別の時空にいる……さあ早く、リアラに会いに行け！」
その言葉に、カイルは体がビクンと反応した。なぜか急に力が戻ってきたような――いや、力を授(さず)けられたような気がしたのだ。
カイルは勇気をもらったかのように立ち上がった。
すると、
「くそっ！　やりやがったな！」
「倍にして返してあげるからねっ！」

目覚めた仮面なりきり師コンビが起き上がった。再び、行く手を塞ぐように二人して身構える。

カイルも剣を構えた。

「よぉし！　今度は負けないぞ！」

授けられた力を証明するかのように力強く叫んだ。その脇で、ジューダスの姿が消え始めた。

「あっ……」

カイルはそれを見て、どきりとする。

「だから言っただろ。僕は別の次元にいると――カイル、油断（ゆだん）するな」

「う、うん、ありがとう！」

カイルは礼を言った。それを聞いて彼は、自分の表情を隠すかのように俯（うつむ）いた。もしかしたら、微笑んだのかもしれない。そしてそのまま、ジューダスは消え去った。

カイルは見送ったあと、

「――行くぞぉ！」

仮面なりきり師コンビに向かっていった。

カイルの勢いに押された仮面なりきり師の二人は、旗色が悪くなったと言わんばかりに時の吹きだまりから撤退した。
おそらく、あの泥棒夫婦の許に逃げ帰ったのだろう。
傷つき、フラフラになりながら、カイルは歩いていた。
さすがに仮面なりきり師との闘いで消耗は激しかった。あのジューダスとやらから授かった力も、すべて使い切ってしまった。でも、カイルはリアラを求めて霧の中を歩み続ける。

＊＊＊

やがて前方に、ひとりの少女の影が現れた。
霧に覆われぼんやりとした姿が、はっきりしてくる。
「……えっ？」
カイルは立ち止まった。
一瞬、息を呑んだ。
それこそはリアラだった。ラグナ遺跡で初めて会った、あのときの衝撃がカイルの中によみがえる。

「……あ、あなたは？」
カイルを見つめるリアラは、今度は興味深そうにゆっくりと歩み寄ってくる。この世界で初めて魔物と見なさず、人の姿を認めることができたらしい。
「あなたは……誰？　私は、英雄を探しているの……」
不思議そうにリアラは訊ねた。その口調に、以前の刺々しさはなかった。
「……オレ……」
カイルは、気を失わないぞと踏ん張りながら言った。
「……よ、よし決めた！　オレ、キミとずっと、ず～っと、一緒にいる！」
「えっ？」
「そうすれば、オレが英雄だってこと、きっとキミにもわかってもらえるしね！」
カイルに笑顔がよみがえる。
なぜだかわからないが、そう言ったとき力がまた戻ってきた気がした。
「あなたが？　英雄……？　私と一緒に……？　ずっと……？」
リアラの声が震えている。
恐れ、不安、そして……。
様々な気持ちが、彼女の心の中を駆けめぐっているかのようだ。だけど、そこから逃げ出さず、目の前の彼からの次の言葉を待っている。

「そうだ！　なんて呼べばいい？　いつまでも〝キミ〟のままじゃ変だろ？　オレの名前は、前にも言ったけど——カイルっていうんだ！」
満面の笑みで明るく言った。力はみるみる回復してくる。
彼女の名前は、もうフリオたちから聞いて知っていた。だけど、彼女の口からあらためて聞きたい——いや、ちゃんと聞いておきたかった。
「リ、リア……ラ……」
彼女が小さな声で答えようとする。
「え？　なんて言ったか、聞こえないよ？」
カイルはわざと耳に手を当てて、彼女の明るい声を促そうとする。
「リ、リアラ……リアラよ！　私は、リアラ！　よろしくね、カイル！」
彼女は——いや、リアラは心の迷いを振り切って、小鳥が羽ばたいたかのように笑顔を輝かせた。
カイルの中に、嬉しさが込み上げる。
ここに、ラグナ遺跡から途切れたままであった『カイルとリアラの出会い』が、場所を異空間に移して歴史どおりにつながったのだ。
「スゲ〜！　スゲ〜！　スゲ〜！　史上最強最速のナンパ術だ〜っ！」
リアラのあとからやってきたフリオが、感動を台無し(だいな)にするようなことを平気で言う。

その直後、魔物との闘いから無事に戻っていたキャロが肘鉄を食らわせた。
「うげっ！」
「よかったわ、みんな無事で……」
リフィルが言う。
ほかのみんなも、カイルとリアラの許に集まってくる。
マリーも、ルーティも。チェスターとアーチェも……。
英雄同士が傷つけ合う事態を免れたことに、フリオたちはホッと息をついた。
やはり、どんなに惑わされたり操られていても、大切な人への想いは消えない。
それが今回のピンチを救った。
フリオとキャロがそれを学んだ直後、カイルが気になることを二人に言った。
「――えっ？　オレたちのほかに、なりきり師がいる!?」
カイルの話を聞いたあと、フリオが目を見開いた。
「うん、すぐにいろんな服に着替えて、しかも速さがまるで違うんだ」
「服に着替えて、速さも違う……」
フリオは、カイルの話に腕を組んで唸った。まるで心当たりがない。
「いったい、どこのどいつなのかしら……」
不安そうに言うキャロに対して、カイルはかぶりを振った。

「ご、ごめん……あいつら、仮面をつけてたから……わからなくて……それに、名前も言わなかったし……」
「そう……」
「あ、そうだ！」
いきなり思い出して叫んだカイルに、キャロはびっくりした。
「まだ、何かあるの？」
その問いに、カイルは頷く。
「助けに行かなきゃいけない仲間が、まだいるんだ！」
「仲間？」
フリオが眉を寄せて聞いた。
「うん、その彼は口に出して言わなかったけど、でも……あの目は、オレたちに助けを求めてる目だった！　オレにはわかるんだ！」
思い出しながらカイルが確信した。
「だ、誰なの？　それって……」
キャロが訊ねると、カイルは――その彼に対して、親しみを込めた笑みを浮かべて答える。
「そいつは――ジューダスっていう名前なんだ！」

第四章　もっとも危険な冒険

＊＊＊

「まだ寝てないの？」
キャロは、いつものようにドアを開けっぱなしにしたフリオの部屋を覗き込んで言った。
「早く寝ないと、明日また寝坊しちゃうよ？」
「うん……」
またいつものように、フリオは生返事（なまへんじ）。
寝床に大好きな英雄伝説の本を持ち込んで、寝っころがりながら熱心に読んでいる。
同じ本をよく飽きもせず、何度も何度も読み返せるもんだと思うけど——そういうキャロも、実はしょっちゅう読み返している。
　毎日毎日繰（く）り返されてる、いつものこと。またかって思うこともあるけれど、そんな毎日が今はいとしくもある。

この意味もないように繰り返される毎日がなくなるのは嫌だし、誰かの手によって脅(おびや)かされるというのなら守りたい気もする。
いや、守らなければならない。
「……ねえ、ところでフリオ……」
「ん？」
「敵にも、なりきり師がいたなんてね……」
キャロは何気(なにげ)なく聞いてみることにした。このまま自分の部屋に帰るより、フリオと少し話してみたくなったのだ。
すると彼は相変わらず寝そべって本を読みながら、
「ああ……」
などと、答えになってない返事をする。
「気にならないの？」
「……別に。まだ確かめたわけじゃないし」
「でも、カイルが見たって言うのよ。私たちと同じ服を着てたって」
「……」
「この世界で、なりきり師は私たちだけだと思ってたのにね——それに、私たちよりハイレベルだなんて」

「……ショックだよな」
ふいにフリオがつぶやいた。
「……あいつらも、なりきり服をレミ遺跡で見つけたのかな？」
「まさか――」
キャロは打ち消した。
「この町の誰だって言うの？　心当たりある？」
「……ない」
フリオは英雄伝説を読みながら答える。
「だったら――」
キャロは思い当たる予感を話すことにした。
「未来の、私たちから……剝ぎ取ったのかもよ？」
「………」
フリオは否定も肯定もしなかった。
「どう思う？　ドリーム号が未来にも過去にも飛べるとしたら、あり得ることだと思わない？」
フリオは立ち上がって、窓のほうに向かった。
外の空気を吸うかのように窓を開けて、深呼吸する。

「………」

キャロはその背中を見つめて、実はフリオ自身も悩んでいたのだと悟った。
この世界にしか存在しないと言われる、なりきり師。
それを認めるということは、近い将来に自分たちは敗北することを意味するからだ。
「だとしたら……未来のオレたちは……」
ふと、フリオが背中で言った。
キャロは緊張した。自分が怖くて言い出せなかったことを、もしかしてフリオは口にするのか——。
胸の鼓動(こどう)が高まるのを感じながら聞いた。
「わ、私たちの未来は——？」
するとフリオが振り返って、
「——スッポンポンだぜ!!」
「へ？」
一瞬、目が点になった。何を言われたのかわからなかった。
そしてしばらくの間があったあと、フリオはため息をついた。
「はあ～っ……せっかくオレたちで、新しい伝説を作れたと思ったのになあ～。ガッカリだぜ～」

と、ベッドに倒れ込む。
「新しい伝説？」
キャロは、今さっきの『未来の私たち』の話題を何気なく無視した。
ベッドにうつ伏せたフリオが、急に不満そうな顔を上げる。
「なんてったって、『テイルズ オブ』世界の英雄(ヒーロー)たちを救ったんだぜ？　今度こそ、オレたちの名前が——英雄伝説に出てくるだろうなって期待してたのにィ～」
キャロはムッとした。
「……そ、それで毎晩、英雄伝説を熱心に確認していたわけね？」
「ほかにすることもないしな」
「呆(あき)れた。少しはあすなろ園の仕事も手伝いなさいよね～。まだ小さい子たちだって、たくさんいるんだから」
「いやいや、未来の英雄には休息が必要だからさ——」
「誰が未来の英雄なのよ？」
「へへ～ッ、カイルだって、リアラの前で『キミのために未来の英雄になる！』って、誓ったんだぜ～」
ふいに言われてキャロは、うっとりする。
「ああ、あれはステキだったわねぇ～」

天井を見上げ、異世界でのロマンチックな場面を思い出す。
するとフリオがニヒヒと笑った。
「だろ？　だからオレにだってできなくはないわけよ」
「へ？」
「英雄たちも最初は小さな存在だった——ということは、オレだって未来は立派な英雄になってるかもしれないってわけだろ？」
「…………」
聞いているキャロは目をしばたいた。呆気に取られていた。
それをいいことに、フリオはますます勢いづく。
「な？　だから未来の英雄は、次の冒険に備えて無駄な仕事はせず、体をゆっくり休めることが大事！　そして数々の英雄たちから、その極意を学びとるため——英雄伝説を読みふけるのであった！」
と、フリオはまた英雄伝説を開いた。
話を聞き終えたキャロは、生意気なことを言うようになったなと思った。
この間まで、冒険のたびに震えていたのは——どこの誰だっけ？
と、心の中で言い返してみたりする。
「でも、何もないのが何よりかもよ？　いろんな世界が交わって、危機が訪れるより

――」
キャロは今の思いをちょっと口にしてみた。
本当は、冒険の日々が早く終わって欲しいと思ってる。
「ねえ、フリオ……時の吹きだまりって、何なのかしらね」
キャロは神妙な顔になって聞いた。
次に行く場所は、その時の吹きだまりよりも――もっと危険な空間だと言われている。
――時の吹きだまりより最悪の場所。
――敵のなりきり師。
不安が募（つの）る。
どう思っているのか、フリオに聞いておきたかった。
すると、
「時空のつながりが正されたときに出る、矛盾（むじゅん）のゴミ捨て場だってさ――」
フリオは英雄伝説を読みながら、あっさり答えた。
たぶんブラウン博士かホワイト博士の受け売りだろう。
キャロはムキになって、さらに訊ねる。
「じゃあ、正しいとかゴミとかって、誰が決めてるっていうのよ。神様？　それとも、お偉い創造主とか？」

「さあな……オレもそこまではわかんないよ」
「私も、別世界とか時空とかって、難しいことはよくわからないわ……でも、誰かの勝手な都合で、捨てられるほうはたまったものじゃないわよ。神様だかなんだか知らないけど、そういう気持ち……わかってるのかしら」
キャロは不満そうに言った。
思えば、自分たちも親に捨てられた身なのだ。
どんな事情があるにせよ、それだけはずっと変わらない……。
なぜか、そこと結びついてしまった。
関係ないはずなのに……。
つい、熱くなりかけた自分を冷まそうとした。
そのとき、フリオは英雄伝説から顔を上げて笑いだした。
「ハハハ……オレ、赤ん坊だったから——捨てられた記憶もないんだ……」
「……」
キャロは何も言えなくなった。
急に二人の間に、沈黙が訪れる。
キャロは、その沈黙を嫌った。
「……私、もう寝るわ。おやすみ～」

まるでそこから逃げることを誤魔化すように明るく言って、部屋を出た。
部屋のドアを閉じたとたん、フリオに嫌なことを思い出させてしまった自分に、キャロは無性に腹が立った。
そう、ちょっとした自己嫌悪に襲われた。
一方のフリオは、出ていったキャロを見送って――ひとり部屋の中でつぶやいた。
「俺が不安そうにしてたら、キャロだって……」
そこから先の言葉をぐっと呑み込み、フリオはまた英雄伝説を読みふけった――。

＊＊＊

「よいか、英雄伝説にも示されていたとおり今回のミッションはきわめて危険じゃ！」
翌朝、古代史研究所の中庭でブラウン博士が言った。
ドリーム2号の前には、フリオたちと『テイルズ オブ』世界の英雄たちが並んで立つ。
ファンタジア世界のクラース、アーチェ、チェスター。
デスティニー世界のフィリア、マリー、ルーティ。
新デスティニー世界のカイル、ロニ、リアラ。

シンフォニア世界のロイド、コレット、リフィル。
そしてフリオとキャロ。
以上、十四名の英雄たちが出発するところだった。
これから向かう場所は、『転生の門』だ。そこは、生と死の境目がつながった不安定な場所である。
ひとつは死者が現世に戻る門。もうひとつは生者が来世に旅立つ門――。
この二つの門は、非常に危険な状態であり、片方の門を変化させると、もう一方の門が消えてしまい、その影響はのちの歴史に大きな影響を与える可能性があると博士たちは予想していた。
「伝説ではひとつとされていた転生の門が、突如二つ現れた。まったく同じ転生の門が同時に二つ現れたからには――その場所で、とんでもない異変が起きているのは確かじゃ」
「充分に、注意するのじゃぞ！」
ブラウン博士とホワイト博士の言葉に、英雄たちが神妙な顔で頷く。
「いざ、生と死を司る転生の門に向け、出発！」
「ドリーム号発進せよ！」
両博士の号令とともに、フリオたちはドリーム号へと乗り込んでいく。

ドカドカと、大勢の乗り込む音が中庭に響く。
「――行くぞ！」
最後に乗り込んだフリオがハッチを閉じて、操縦席に座る。すでに全員、ドリーム号内にしつらえられた座席に着いていた。
「キャロ、準備いいか？」
フリオはすぐさま、隣の操縦席のキャロに聞いた。
「うん！　いいわよ！」
キャロが返事する。そして、
「フリオ――」
「なんだ？」
「ゆうべは、ゴメンね――」
「……………」
ふいに謝られたフリオは、一瞬、何のことだろうと思った。こんなときに謝ってくるなんてキャロらしいやと思ったが、今はそのことに返事をしている余裕はなかった――いや、何も言葉を返して欲しくないから、キャロはこの瞬間に言ってきたのかもしれない。そう考えることにした。

ドリーム号の超古代文明の機器が一斉に働き、駆動音が響き渡る。
やがて前方の窓から見える景色が、うっすらとぼやけていった。
古代史研究所の中庭から、闇へと変わっていく……。
時空を移動するこの瞬間が、もっとも緊張する。もし何か起こったら一巻の終わりだからだ。
機体が大きく揺れる。
また何かに当たったのだろうか。フリオは操縦席から前方の窓を確認する。だが闇しか見えない。気にせず、このまま突っ走るしかない。フリオは無事に到着することを祈った。
そして闇の世界に、一瞬の閃光！
操縦席の窓から飛び込んできた光が、ドリーム号内を一瞬だけ明るくした。時間と空間を跳び越えた瞬間だった。
やがて機内の振動が収まり、ドリーム号の駆動音も静まっていく。
瞬時にして到着したらしい。
時の吹きだまりよりも――もっと不安定な空間だと聞かされていたから、何か起こるのではないかと警戒していたが、杞憂に終わった。
フリオは操縦席にもたれかかって、ホッと息をもらした。

「さあ、行きましょう――」
　息つく暇もなく隣のキャロが立ち上がった。フリオも大きく息を吸って、気合いを溜めるようにして操縦席から立ち上がる。英雄たちも安全ベルトを外しながら席から立ち上がって、ハッチに向かってくる。
「よし、外に出るぞ――」
　フリオは、ドリーム号のハッチを開けた。とたんに冷気のような冷たさが肌に感じられた。
　凍りつくような異界の空気が漂っている。
「ここは、死の門と生の門……どっちなの？」
「オレに訊くなよ」
　フリオはドリーム号から降り立って、キャロに答えた。
　どちらの門にたどり着くか、それは運みたいなものだった。二人は、またもや濃い霧に覆われた世界を見渡す。
　遠くのほうには、霧の中に浮かぶ巨大なタワーが立っていた。
「あ、あれは……」
「何かの装置みたいだな？」
「見て！　下のほうに、誰かが閉じ込められてる！」

キャロが指さして、フリオに伝える。
何かの装置らしいその巨大なタワーの根元には、牢屋のようなものがあったのだ。少しだけ霧が晴れてタワーの全体が見えるようになった。すると、根の部分に格子状になった光の檻があり、その奥に三人の人影が見えた。
「行ってみよう！」
フリオたちは駆け出した。英雄たちも一緒に走り出す。床は鉄でできているのだろうか。やけにみんなの足音がカンカンカンと不気味に響き渡る。

＊＊＊

「――あ、リオン！」
巨大なタワーの根元にあるその檻に駆け寄ったとき、ルーティが真っ先に声を上げた。
「リ、リオンじゃないの！　あんた、こんなところで何してるのよ？」
ルーティは、光でつくられた柵の向こう側にいるひとりの少年に声をかけた。
線が細く、黒い前髪の下から相手を威圧するような鋭い目が輝いている。
セインガルド王国軍に仕える天才剣士、リオンである。
「フン……僕たちは、再会を喜び合うような仲ではないだろう――」

リオンはいきなり顔をそむけた。
「なっ！　ちょっと冷たいわね。せっかく久しぶりに会ったというのに、そんな態度することないでしょ！」
「別に……こんな形で再会したいとは思わなかった……」
リオンは、顔をそむけたままつぶやく。
「……まあ、それもそうよね。こんな檻に閉じ込められてるところじゃ、カッコ悪くて誰にも会いたくないわよね？」
「うるさい——助けて欲しいと、泣き言を言った覚えはないぞ」
「ええ、こっちも聞いてないわよ。それより——」
ルーティは、リオンから視線を奥にいる男女へ向けた。
精悍な顔つきの男女で、その身なりからして地位のある人物のように思えた。真っ白い衣服には紋章らしき装飾が施されており、二人とも無言のまま何かをじっと待ち続けているようだった。
「ディムロスとアトワイトだ……」
「えっ？」
リオンから教えられて、ルーティが目を丸くさせる。
「それって……」

「天地戦争時代の英雄だわ――」
キャロが言った。
「天地戦争って……キャロ、詳しく教えてくれないか？」
ファンタジア伝説のクラースが、興味深そうに訊ねてきた。
「え、ええ、……」
キャロは初めて見るリオンの姿にドキドキしながらも、いにしえの歴史について語る。
それはデスティニー伝説の、およそ千年も前の出来事であった。
膨大な年月を費やして完成した空中都市で反乱が起き、天上王を名乗ったミクトランから地上への無差別攻撃が始まった時代――。
これにより、天と地は対立した。
力ずくによるミクトランの支配に対抗して地上軍が結成され、ソーディアンと呼ばれる六人の戦士が選ばれた。
クレメンテ、アトワイト、シャルティエ、ディムロス、カーレル、イクティノス……。
彼らの活躍によって、天上王を名乗ったミクトランは敗北したという。
その六人の中の、ディムロスとアトワイトが、なぜか目の前にいるのだ。
「不思議ですわ、歴史上の伝説の方と間近にお目にかかれるなんて……」
フィリアは自分のソーディアンのクレメンテを眺めて言った。

おそらく、このような時空を超える冒険がなければ、出会うこともなかっただろう。
それだけにリフィルは、感慨深い表情を浮かべていた。
「でも、どうしてここに――」
フリオが言ったときである。カツン、カツンと、近づいてくる足音が響いた。
「あ、誰か来るぞ！」
警戒して、フリオがみんなに叫ぶ。
その檻の外に、自分たち以外の者がいたのだ。
「何者だ！」
「気をつけろよ、魔物かもしれないぞ！」
英雄たちも、次々に身構えた。
歩み寄ってきたのは、ひとりの男だった。竜の貌をした骨の仮面で顔を隠し、黒ずくめの格好をしている。
「ああっ！」
とたんに、カイルの顔色が変わった。
「えーっと、あの人は確か……」
フリオが懸命に思い出そうとする。
「新デスティニー伝説の、謎のヒーローよっ！」

隣でキャロが、感激に震える声で言った。
その謎のヒーローが、フリオたちの前で立ち止まる。
「僕の名はジューダス。断じてヒーローなどではない――」
すると突然、
「ぶ、無事だったんだね、ジューダス！　心配したよ！」
カイルが、笑顔で駆け寄った。
再会を喜び合うような場面に見えたのは、ほんの一瞬だけだった。
全員の予想に反して、
「なぜ、ここに来た――」
ジューダスの仮面の下にある瞳（ひとみ）は、けっしてカイルを歓迎していなかった。
「い、いや……た、助けに来たんだよ！」
「助けに？　フン、誰がそんなことを頼んだ？」
ジューダスに睨まれて、カイルは気まずい表情になる。
「うっ……だ、誰にも頼まれてないよ……ただ、なんとなく……」
「なんとなく？　お前は、ただ何となくで、仲間や自分の身を危険にさらすのか？」
「あ……いや、ごめんよ、ジューダス……」
カイルは素直（すなお）に詫（わ）びた。

「ホント、ごめん……」
どんどんカイルの声が小さくなっていく。
それを見て、ジューダスは怒りを鎮めた。というより、そのことについてはもう話が終わったと言わんばかりに話題を変えた。
「……そんなに手伝いたいのか？」
「えっ？」
カイルの沈んだ顔が、驚きに変わる。
「だったら、この僕に手を貸すんだ――」
ジューダスはさりげなく言った。しかし、そのひと言は――時空を超えて会いに来たカイルに勇気をもたらした。
「う、うん！　わかったよ！　ジューダス！」
嬉しそうにカイルは返事する。
すると、横からロニが話しかけてきた。
「それで――ここの状況は？」
「………」
ジューダスはロニに一瞥をくれると――こいつとも、いずれ出会うことになるのかと少し嫌そうな顔をした。しかし、そのことについて触れるのを避けた。ごく事務的に、

ジューダスはロニたちに答える。

「どこかのバカ者どもが、転生の門を暴走させてくれたおかげで——止めに入った三人が門のフィールドに捕らわれてしまっている」

「ど、どこかのバカ者ども!?」

フリオが、ピーンときた。

もしかして——とキャロのほうを見る。

「ああ、わかったわ。あいつらね……」

キャロは確信したように頷き返す。

たぶん敵のなりきり師と、泥棒夫婦のポニーとクライトのことだろう。

この転生の門が不安定になったのも、連中の仕業に違いない。

「事情はわかりました。協力します、指示してください——」

キャロは、ジューダスに言った。

本心では黄色い声を上げて喜びたいのを我慢していた。

きっと、彼はミーハーな子が嫌いに違いない——。

こっそりキャロは、そんなことを考えていた。

一方のジューダスは、みんなに向かって説明を始めた。

「この時空の四方にスイッチがある。そこに一チームずつ配置してスイッチを起動して

くれ。そうすれば、転生の門のフィールドが一時的に消えるだろう。檻に閉じ込められた三人も、その隙に救出できるはずだ」
「四方にスイッチ、一チームずつ配置。了解だぜ！」
フリオが熱く答える。
そして。
さっそくチーム編成の話し合いが行われた。当然のことながらフリオとキャロは、リフィル先生のいるシンフォニア世界のチームに配属されるはずだったのだが――。
「ねえねえフリオ――」
「なんだよ、キャロ？　そんな甘ったるい声して、気味が悪いぞ？」
「いいからいいから♪　それよりもチーム編成なんだけど――私たち、リフィル先生の許(もと)から独立して、たまには違うチームに入ってみない？」
キャロは少し頬を赤くしながら、フリオに提案した。
「違うチームって、どこだよ？」
「だから～、カイルのいる新デスティニー伝説のチームよ～」
「どうして、そこに？」
フリオは真面目(まじめ)に聞いた。
「んもォ～、フリオも知ってるはずでしょ～？　ジューダスは、カイルとつながりがあ

るから新デスティニー伝説のチームに入るに決まってるからよ♪」
「ああ、だと思うけど……それがつまり、どうかしたのか？」
「鈍いわね～、私がリオンさまのファンだということ知ってて、そういうこと言うわけ？」
「あ……」
フリオは、ようやくキャロの言いたいことがわかった。
「よーするにアレだ？　キャロは、カイルとジューダスがどんな会話を交わすか聞きたいっていうんだな？」
「そうそう！　そうなのよ～」
「ハハハ――あいにくだけど、それはダメだねっ」
フリオがしたり顔になって答える。
「えぇーっ、どうしてよォ？」
「オレたち、まだリフィル先生の許から卒業してないんだぜ？　勝手にそんなことしていいわけないじゃないか」
胸を張ってフリオが、キャロを説教しようとしたときだった。
「あら、いいわよ――」
「げっ！　リ、リフィル先生――」

いきなりそばに寄ってきたリフィルに許可を出され、フリオは面食(めんく)らってしまう。その横ではキャロが「わぁ～い！」と、はしゃぎだす。
「リフィル先生、どういうことなんですか？　キャロを甘やかすなんてズルいですよ！」
「フフッ、そうじゃなくて――」
リフィルは微笑んだ。
「そろそろ、あなたたちも自分の考えで、行動したほうがいい頃かなと思っていたところなのよ――」
「自分たちの考えで……」
フリオは意外そうな顔で聞いた。
リフィルは微笑ましそうに、二人を眺(なが)めて説明した。
「今までの冒険で、フリオもキャロも少しずつだけど成長してきているわ。おそらくそれは自分ではわからないでしょうけど、私から見て二人は最初に会った頃よりも、ずいぶんたくましくなったと思うわ」
「でも、だからって――」
「だから、これは課題なのよ」
「課題？」
「そう、誰かに指図(さしず)されるんじゃなくて、自分の考えで行動してみる。それがきちんと

こなせられるようになれば、二人が私の許から卒業する日も近いというわけよ」
「………」
フリオは、リフィルの言葉を噛みしめるように聞いていた。
そして顔を上げると、
「わかりました、リフィル先生――オレたち、やってみます！」
決意したフリオの返事に、リフィルは微笑んで頷く。
「偉いわ、どうにか自主性も身についてきたわね――」
そう言ってリフィルは、ロイドたちの待つシンフォニア伝説のチームに戻っていった。
見送ったフリオは振り返り、
「じゃあ行くか、キャロ――」
「うん、行こう！　新デスティニー伝説チームにＧＯ！」
大喜びで答える。
そんなキャロを連れて、フリオが新デスティニー伝説のチームに向かうと、
「――ええっ！　ジューダスがここに残るの⁉」
カイルが意外そうな顔で、目の前のジューダスに訊ねていた。
「別に、お前たちと行動を共にすると言った覚えはない――」
なんだか、こっちはこっちでモメていた。

カイルは懸命に説得を続ける。

「ねえ、ジューダス――そんなこと言わないで、オレたちと一緒に行こうよ！　ここにひとりでいたら危ないよ！」

「危ない？　だったら余計に、僕はここに残る」

「どうして!?」

「考えてもみろ。僕たちがみんなここからいなくなったら、誰がこの檻に閉じ込められた三人を守るんだ？」

「えっ？」

「四つのスイッチを起動させれば、ここのゲートが開く――その瞬間、魔物どもがフィールドから解放された三人を襲ってきたら、僕は彼らの護衛を優先したいと思ってる――」

それが己の使命のごとくジューダスは言った。

カイルは納得したような顔になる。

「そっか……それは大変だよね、じゃあオレもここに残るよ。ジューダスを手伝う！」

「くだらないことを言うな」

「くだらないって！」

「カイル、お前は英雄をめざしてるんじゃないのか？」

「あっ――」

ジューダスの言葉に、カイルはどきりとした。
どうして自分のことを、ジューダスはいろいろと知っているのだろう。何だか自分の師に出会ったような、不思議な感覚に襲われる。
「英雄をめざしてるんなら、相手の力を信じるぐらいの気持ちを持ったらどうだ？　僕は、お前の力など借りなくても、ひとりでやれると言ってるんだぞ？」
その強い意志に、カイルも圧倒された。
「……そ、そうだね……わかったよ、ジューダス……」
と、反省するかのように頷いた。
それを脇で見ていたフリオとキャロは、
「残念だったな、キャロ……カイルとジューダスは、別行動だってさ」
「ふぅ～、世の中うまくいかないものね……」
と、キャロはがっかりしたようにつぶやいた。

＊＊＊

「フリオ！　こっちは、いつでも準備いいわよ！」
シンフォニア伝説のリフィルが叫んだ。

「やっほー、フリオ！　こっちも準備ＯＫだよ〜♪」
ファンタジア伝説のアーチェが、明るく手を振っている。
「ねえ！　ちょっとまだァ？　こっちは、ずいぶん前から準備いいんだけれど？」
デスティニー伝説のルーティが、痺れを切らしたような声を出した。
四つのチームが、離れた場所から声をかけ合っている。
そしてみんな、フリオのほうを見ていた。
新デスティニー伝説のチームに入ったフリオは、カイルとロニのほうを見る。
二人が、こっちもいいぞ――と言うように頷く。
「よし、わかった！　みんな、四方のスイッチめざして前進だ！」
フリオが、四つのチームに出発の号令を飛ばした。
それと同時に、英雄たちが中央のタワーからそれぞれの方角をめざして歩み出す。
いつの間にか霧は晴れていた。転生の門は光の檻のあるタワーを中心に、放射状に四方向の道が伸び、途中から長い階段となって続いていたのだ。
その中央のタワーの下にある光の檻の前には、ジューダスだけが残った。カイルは、ひとり立っているジューダスを心配そうに見つめながら歩き出す。キャロも同じように後ろを眺めながら歩いていた。
「こらこら、そこの二人！　よそ見しないで、ちゃんと前を見て歩けよ！」

ロニが呆れたように言った。
すると、
「ジューダスって、どこか不思議な人ね……」
同じチーム内で歩みを進めていくリアラが、つぶやくように言った。
「……不思議な人？」
カイルが前を向いて聞いた。
「何となくだけど、そう感じるの……」
リアラはそれ以上は言わなかった。
やがて新デスティニー伝説チームは、一本道になった通路の先にある階段を登ると、
そこで魔物たちの待ち伏せを受けた。
気配を察したロニが、
「ほほう～、さっそく来やがったぜ、カイル！」
「うん、ロニ！　返り討ちにしてやろうぜ！」
カイルとロニは、それぞれに剣とポールアクスを構えて突進していく。
「あ、待って！」
そのあとをリアラが追う。
カイルたちは、こっちから先制攻撃を仕掛けるつもりらしい。

「――キャロ、オレたちも行くぜ！」
「そうよね、負けてられないわっ！」
フリオとキャロも、それぞれ格闘家と《ウィッチの服》に着替えて飛び出していく。
ほかの三つの方角に向かった各チームも、ほぼ同時に魔物の群れと接触していた。
誰が言いだしたわけでもないが、四つのチームは互いに競い合うように――目前の魔物の群れを蹴散らし、ジューダスの言ったスイッチのある場所へと急いだ。

＊＊＊

「――あった！」
幾度もの闘いを乗り越え、通路を一番乗りで突っ走っていたカイルが叫んだ。
「きっとアレだ！」
後ろから追いかけてきたロニも、
「やったな、カイル！　オレたちが一番乗りに違いないぜ！」
と、自慢げにカイルの肩を叩いた。
目の前には通路の行き止まりがある。その手前に円形の台があり、白衣を着た男がひとり、心細そうに立っていた。

「――あなたは？」
ロニが駆け寄って声をかける。
「ああ～、助かった！　私は、転生の門の整備を任されている科学者です！」
「科学者？」
「ええ、いきなり装置が暴走したものですから、むやみにゲートを開いてしまったら大量の魔物を呼び込んでしまうと思って、それでこのスイッチを守りに来たのです――でも、無駄だったようですね。もうこの空間にはたくさんの魔物がうじゃうじゃと――」
「大丈夫だ、しっかりしろ。オレたちが来たからには魔物どもの好きにはさせない！」
ロニはその科学者を安心させるように言った。
「な、なんという心強いお言葉！　私たちはそういう方を待っていたのですよ！」
科学者が、カイルやロニたちを眺めて頼もしそうに頷く。
「では、ここを私に代わって――守っていただけるわけですね？」
「ああ、そうだ――オレたちの仲間も、別の場所で魔物どもを撃退(げきたい)している！　だから静かになるまで、どこかに隠れていてくれ！」
「は、はい、わかりました！　じゃあ、お願いします！」
科学者はロニの言葉に何度も頷き、スイッチの前から離れて歩き出す。
カイルやフリオたちの脇を通り過ぎ、どこか別の場所に移動しようとした。

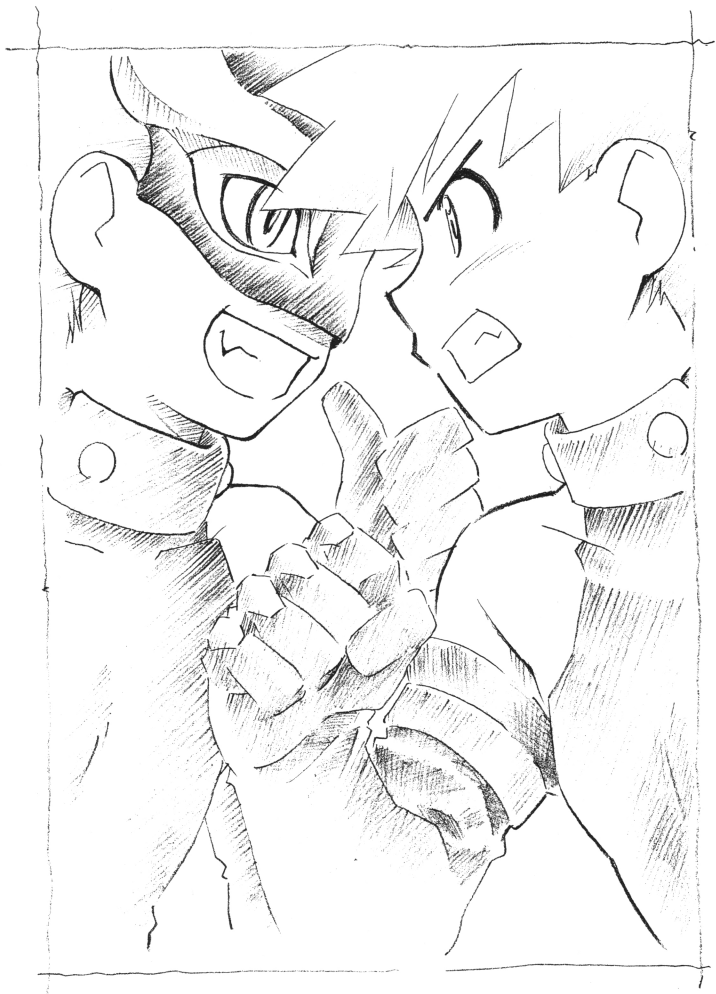
「じゃあ、早くスイッチを起動させてしまおうぜ——」
ロニが行き止まりの手前にある、円形の台に向かったときだった。
「クックックッ……フハハハハッ！」
いきなり科学者の笑い声が聞こえた。
「！」
ぎょっとして、フリオたちが振り返る。
みんなが、その科学者の後ろ姿を見つめる。肩が大きく揺れて笑い続けるその男は、白衣を脱ぐ動作をしながら振り返った。
「ああっ！」
フリオが目を見開く。
脱いだ白衣を放り投げた男は、仮面をつけた〝なりきり師〟の姿に変身していた——いや、本性を現したのだ。
「お、お前は!?」
震える声でフリオが問う。年齢も、背格好も、自分と同じくらいの男だった。
猫のような大きな耳を持つ流線形（りゅうせんけい）の青黒い仮面。それを頭からすっぽり被（かぶ）り、金色に輝く瞳がその下から覗いている。
不気味な奴だった。

体を覆い尽くすような大きなマントを羽織り、どこかヒーロー気取りでいる。
「フフッ、ご愁傷さま♪　みんなそろって仲良く罠に引っかかってくれちゃうなんて、悪玉としては大助かりだね～っ♪」
「罠だと!?」
カイルが叫んだ。
「あれれ？　今頃気がついたの？　しょうがない連中だねえ。救いようがないったらありゃしない♪」
「おい、教えろ！　どういう罠なんだ！」
ロニが怒鳴りつける。
「自分からネタを喋っちまうなんて、このオレが、そこまでお気楽な悪玉だと思うのかい？」
「もちろんよ！」
「すでに調子こいてるじゃないの！」
リアラとキャロが、続けざまに責める。
「あら、叱られちゃったよ～。まあいいか、実はこっちも喋りたくてウズウズしてたからな、丁度いいや！　悪玉らしく、冥土の土産に教えてやっちゃったりするよ！」
仮面のなりきり師は、ふざけながら言った。

フリオたち五人は、カッカし始める。だが、罠とやらを聞くまでは怒れないと思ったのか——じっと我慢の英雄たちになって、耳を傾けた。
調子にのりまくる仮面なりきり師は、そんな五人に自慢げに言った。
「お前らを四つのポイントに散らせて、個別に攻撃しようって魂胆なのさ！」
「なんだと！」
「それって、つまり——どういうことだ!?」
フリオの問い詰めに、仮面のなりきり師はコケそうになった。
「お前って、ホントに……バカだよな？　自分でも呆れちゃうよ」
「なにっ！」
「だからさ～、テイルズ世界の英雄たちが一度に大勢で殴り込みをかけられたら、さすがのオレたちも苦戦しちゃうだろ？　だからバラバラにさせたのさ！」
「へっ、バカはお前のほうだぜ！　いくらバラバラにさせたからって、こっちは何人いると思ってるんだ？　そっちは、お前ひとりじゃないか！」
フリオが勝ち誇ったように言う。
それを聞いて、仮面のなりきり師はまたもや笑いだした。
「オレがひとりで——お前たちを相手にすると思うのかよ？」
「えっ？　どういうことだ——」

「さっき、オレが化(ば)けていた科学者はなんて言ってた？」
「えーっと……ゲートを開いたら、大量の魔物が――あっ！　もしかして！」
「そう、そのもしかしてなのさ！」
仮面のなりきり師の口許が、ニヤリと笑った瞬間だった。
突然、転生の門の施設全体に緊急警報が鳴り響いた。
「な、なんだ？」
「何が起こったんだ！」
カイルやロニが、慌(あわ)てだした。仮面のなりきり師は、またまた大笑いする。
「ワハハハ！　ゲートはそこのスイッチを押さなくても、こっちでも勝手に開けられるんだぜ！」
「――なんだって！」
「親分のポニーとクライトが、生の境目と死の境目の均等を保つ、制御装置を暴走させたんだ。これでゲートは開いちまう！　しかも死の門がな！」
「死の門！」
「そうさ。生き返るための門じゃなくて、地獄に通じる死の門だけ開いちゃったんだよ！　フハハハハ！　さらに死の門の出入り口には、魔物どもの餌(えさ)を大量にバラまいておいたからな。よって、亡者どもが逆流してくる！　さぁ～て、お前ら生きて帰れるかな～？」

警報が鳴り響く中、中央のタワーがあったところが光り輝き、そこから魔物の群れらしい大群が、まるで黒い霧が広がっていくかのように噴き出してきた。
「何だ、あの数は――」
「こりゃ千とか、二千とかの数になってんじゃねえだろうな！」
カイルの隣でロニが戦慄（せんりつ）する。
「ヘヘッ、じゃあな。アバヨ！」
「あ、どこへ行きやがる！」
「言っただろ。お前らの相手は、魔物に任（まか）せるのさ――まあ、せいぜい長生きしろよ！　バイバイ～っと！」
男の仮面なりきり師が背を向けて、そこから立ち去ろうとしたときだった。
「待ちやがれっ！」
フリオが飛び上がり、そいつに背中から体当たりした。
「ぐわぁ！」
あっけなく、仮面なりきり師が床に倒れ込んだ。
「なんだ、弱っちいじゃねえか！」
着地したフリオは、そいつを捕まえようとした。
だが――

「とりゃあああっ！」
「ぐふっ！」
そいつは目にも止まらない速さで《格闘家の服》に変身し、フリオの横っ面に回し蹴りを見舞ったのだ。
「――フリオ！」
キャロが悲鳴のように叫ぶ。
よろめいて床に仰向けに倒れたのは、フリオのほうだった。その前には、仮面なりきり師が立っている。同じ格闘家の服を着ているのに、そのスピードとパワーは段違いだった。
「へっ、ちょっとお前をみくびりすぎただけだ――オレは弱っちくはないぜ！」
そう言って、身を翻すように立ち去った。
「あ、待て！」
カイルがあとを追った。ロニとリアラ、そしてウィッチ姿のキャロがあとに続こうとする。
だが、ホウキに跨がって宙を飛ぶキャロは、倒れたフリオのところで静止した。
「さあ、フリオ――起きて！」
ホウキに跨がったまま手を伸ばし、フリオを起こそうとする。

フリオはかぶりを振って起き上がろうとした。
そして、みんなを呼び止める。
「行くな！　カイル、ロニ、リアラ！」
その叫びに、階段を下り始めた三人が立ち止まった。
「どうしたんだ！」
カイルの問いに、フリオが答える。
「行くな、行っちゃダメだ――」
「どうして？　早く行かないと、あそこでジューダスが！」
痺(しび)れを切らしたようにカイルが言う。
「違う、そういうことじゃない！」
フリオが叫ぶ。
「じゃあ、なんなんだよ！」
焦ったカイルも、苛立って声を荒らげた。
フリオは四人に訴えた。
「聞いてくれ、みんな――さっきのあいつの言葉に惑わされるな！」
「どういうことだ？」
みんなが一瞬、何を言われたのかわからないという顔をした。

「――だって、見てみろよ！」

フリオはそう言って、遠くを指さした。

それは中央のタワーがある場所だった。階段を下りていった先にある中央のタワーの根元の光の檻は、まだシールドが解かれていない。その前で、ジューダスの黒い影が迫りくる魔物の群れ――死神にサイズキャリアー、そしてオーガーなどと、ひとり闘っている光景が見えた。

ほかの大量の魔物たちの群れは、ほとんどが仮面なりきり師たちがバラまいたと思われる餌にありつけなかった様子で、どこかに餌はないかと、タワーの周りをグルグル旋回(せんかい)している。

いずれあの群れが、フリオたちを発見するのは時間の問題だと思えた。

そのおぞましい光景を見ながら、フリオは説明した。

「ジューダスは四つのポイントのスイッチを押せば、あの光の檻のシールドが解かれるって言ってた。それなのに、まだ閉じ込められたままじゃないか！」

「ということは――」

ロニが気づいたようにつぶやいた。

「あいつらは転生の門のゲートを開いただけで――あの光の檻のシールドは、解除してないってことか？」

フリオは、ロニに頷いた。
「そうだよ――オレたちがジューダスを助けに戻ったら、宙を漂ってるたくさんの魔物と混戦になってしまう。それを、あいつらは狙ってるんだ！」
シールドを解かないままジューダスの許に戻ると、無限に沸いてくる敵を倒すだけで手一杯となり、リオンたちを助ける前に体力切れで全滅してしまうだろう。
「フリオ――じゃあ、私たちは？」
ホウキに乗って宙に浮かぶキャロが、横から訊ねた。
フリオは確信したように言う。
「そう、オレたちは――シールドを解除するんだ！　ジューダスに言われたとおり、四方向のスイッチを先に押そう！」
「なるほど……これは陽動作戦だったってわけか」
「やったよ！　よく気がついたよ、フリオ――見直したぜ！　さあ、早くスイッチを！」
ロニとカイルが戻ってくる。
「待って！」
リアラが叫んだ。
「ほかの三方向のみんなが、戻っていくわ！」
それを見て、たちまち五人に緊張が走る。

放射状に広がる、残り三方向の階段から駆け下りていく英雄たちの姿が小さく見えるではないか。

「いけない！　スイッチを押してから戻らないと、意味がないぞ！」

カイルが叫ぶが、あまりに遠くて声が届かない。

フィールドが解放されなければ、英雄たちは——いつまでも魔物の群れと闘う羽目になる！

とにかくリオンたちを救出するのが先だ！

フリオはとっさに判断した。

「キャロ！　そのホウキに乗って、ほかのみんなに伝えてくるんだ！」

「わかった、フリオ！　行ってくる！」

キャロは頷くと、ホウキの柄を持ってスイッっと上昇した。

そのとたん、魔物の群れの一部がフリオたちのほうにやってきた。

「ほらよ、モタモタしてるから——さっそく第一陣が来やがったぜっ！」

ロニがポールアクスを構える。

「フリオ！　リアラと一緒にスイッチを頼む！　ここはオレたちに任せろ！」

カイルが剣を構えて、フリオに叫んだ。

「わかった！　行こう、リアラ！」

「ええ――わかったわ！」
リアラが返事して、フリオとともに階段を駆け上がっていく。
魔物たちの前に、二人の英雄が立ち塞がる。
「へっ、ここから先には行かせねえぜ！」
「ロニ！　まだまだ元気じゃないか！」
横に並んだカイルが聞いた。
「当たり前よ！　カイルより先に、倒れてたまるかってんだ――でりゃあああああっ！」
階段を蹴って跳び上がったロニは、迫りくる死神をポールアクスで斬りつける。
「オレだって、負けねえよ――うりゃあああっ！」
続いてカイルも階段から跳躍し、サイズキャリアーに向かって剣をくり出す。
さながら、空中戦のような激突が始まった。

＊＊＊

ジューダスはひとり、孤独に闘っていた。
ゲートが開いたらしい反応を感じたが、入り込んできた魔物の数は予想以上に多かった。

予定では、ほんの数体が紛れ込んでくるだけのはずであった。

――くっ！　僕としたことが計算を違えたか。

まだ仮面なりきり師や泥棒夫婦の仕業だと知らないジューダスは、正確に事態を把握（はあく）することができずにいた。

「たあっ！　ほっ！　はっ！」

迫りくる死神を打ち払っていく。

「千裂虚光閃っ！」

跳躍して、新たな敵に斬りつける。

まだか、あいつらは何をしている！

闘いながら心の中で叫んだ。

仮面で素顔を隠した黒衣の剣士も、さすがに次々と襲いかかってくる魔物の数にうんざりしかけていた。

あいつらは、何かミスを犯したのか――いや、それはないはずだ。

ジューダスは今一度、彼らのことを信じようとする。

今まで多くのものを失ってきた。

かつての仲間、友情、絆（きずな）……もはやそれを取り戻すことはできない。だからこそ、彼らが命を賭（か）けて守ろうとしているものを、自分も守りたい。そのために、この異世界に

やってきたのだ。

だからこそ——

カイル、死ぬなよ……。

その言葉を最後に、ジューダスは床を蹴って——魔物の群れに自分から飛び込んでいった。

もう力の限界だった。

どうせなら、少しでも多くの敵を道連れにしてやるつもりだった。相討ち覚悟の捨て身の攻撃である。

目の前のサイズキャリアーが大鎌をくり出してきた。

「！」

自分の首が刎ねられるような恐怖を覚えた。

そのときだった。

——ガキン！

刃のかち合う音が、目の前で響いた。

見ると、サイズキャリアーが振り下ろした大鎌を——ひとりの少年が剣によって見事に打ち払っていた。

リオンである。

「誉めてやるぞ――今まで頑張ったぶん、僕が倍にして返してやろう！」
ジューダスが着地すると、目の前に降り立ったリオンがそう言った。
その刹那、
「なに？」
リオンが己の力を、ジューダスに分け与えたのだ。
転生の門という異質な世界だからこそ、可能なことなのか――ジューダスが時の吹きだまりで、カイルにしたことと同じことを、今度は自分が受け取る立場となった。
「ううっ……」
みるみるジューダスの消耗した力が回復していく。
……そうか。カイルたちは成功したんだな。
光の檻のシールドを解くことに……。
目を閉じたジューダスが、体の回復を感じながら心の中でつぶやく。
それは信頼したことへの嬉しさであり、充実感でもあった。
「とりあえず、このくらいにしておこうか――キミの腕なら、そのくらいあれば充分だろう」
そう言ってリオンは、ほんのわずかながらの笑みを浮かべた。
ジューダスにとっては信じられない光景だった。

それは心を許した親しい相手だけに見せる、微笑みのように見えたからだ。
自分だからこそわかる。
そして過去の自分に対する驚きも知った。
――まさか、知っているのか？
目の前にいる僕が、未来の僕だということを――。
ジューダスは、己に対する震えのようなものを感じた。
だがリオンは、そのことについて一言も語ろうとはしなかった。
たとえわかったとしても、ここは語らないほうがいいと悟ったらしい。
「ジューダス、二人でやれるだけのことはやろう――」
剣を構えてリオンが言った。
予想どおり、覚悟を決めた口調だった。
彼らしい潔さが、そこにある。
最後まで命を賭して闘うつもりだったのだ。
「ああ、そうだな――リオン」
ジューダスも同意して、剣を構え直す。
そして頭上からは、死神の群れが舞い降りてきた。
リオンとジューダスによる、奇跡のコンビネーションが始まった。

＊＊＊

転生の門でくり広げられた壮絶なる死闘が終わったのは、それからしばらくしてのことだった。
四方のスイッチを起動させ、リオンたちが閉じ込められた牢屋のシールドを解くことに成功した『テイルズ オブ』世界の英雄たちは、一気に中央のタワーへと駆け戻り、死神どもと闘うジューダスとリオンの二人に加勢した。
いったい、どれだけの数を倒したのだろう。
全員が力を使い果たし、もうこれ以上は限界かと思われたそのとき——魔物の群れは死の門をくぐって、我先にと逃げ出していった。
中央のタワー前には、英雄たちの荒い息だけが響いた。
「さすがだな——キミたちの連携には、まったくの乱れがなかった」
救出されたディムロスは英雄たちを称賛し、そして礼を告げた。
「ありがとう。おかげで助かったよ」
「誉められるほどのことじゃない——僕たちにとっては当然のことだ」
ジューダスは素っ気なく答えた。隣のリオンは無言だった。

「とにかく、みんな無事でよかったわ」
アトワイトも感謝した。
「それよりも、早く天地戦争の時代に戻ってください！　お二人には大事な使命が待ってますから！」
伝説の内容を知るキャロは、ディムロスたちに言った。
「そうだな。キミたちとは、またどこかで会えたらと願ってる——」
ディムロスの言葉に、英雄たちは黙って頷き返した。
そんなことは、もう二度とあり得ないことだと知りながらも……。
「行きましょう、ディムロス——みんなが待っているわ」
「ああ、わかった。アトワイト」
二人はそろってフリオたちに一礼したあと、生の門のゲートを開き、自分たちの帰るべき世界へと戻っていった。
これで、ひとつの歴史がつながった。
ほっとした雰囲気の中で、フリオが改まった顔で言う。
「キャロも——よくやったな」
「あら、どうしたの？　フリオが真面目な顔して誉めてくれるの、初めてじゃない♪」
キャロが照れくさそうに笑ったときだった。

遠くから、

「へっへっへっ！　自分たちの大事なものを忘れて、いい気なもんだぜ～っ！」

と、仮面なりきり師の声が響いた。

ハッとして振り返ると、フリオたちの乗ってきたドリーム2号の前に――男女ペアの仮面なりきり師が立っていた。

「あ、あいつら――まさか！」

フリオの声が震える。嫌な予感がした。

そして、その嫌な予感が的中した。

「ジャジャーン！　発表しま～す、今回の狙いは最初からドリーム2号でした～！」

赤い仮面を被った、なりきり師の女が両手を広げる。

「邪魔な英雄を置き去りにして、2台のドリーム号で作業効率アップするぜ～っ！」

隣の青い仮面のなりきり師も決めポーズ。

ふざけたコンビは、なおも言った。

「うふふふ！　ここなら歳も取らないし、おなかも減らないし、最高でしょ？　ずっと、ずっと、永久にいるといいわ！」

「んじゃ、皆さんお達者(たっしゃ)で！」

片手を振った男の仮面なりきり師が、ドリーム2号のハッチを開ける。

素早く女の仮面なりきり師が乗り込んだ。続いて男も乗り込む。パタンと、ドリーム2号のハッチが閉じた。
「待て！　待ちやがれ！」
フリオは、ドリーム2号めがけて突っ走った。
しかし、たどり着く前に――ドリーム2号は転生の門から消え去った。
「ああ！　ドリーム2号がっ……」
キャロが絶望的な声を上げる。
立ち止まったフリオも、がっくりと膝を床に落とす。完全に逃げられてしまった。
「そ、そんな……ドリーム号を、また盗まれるなんて……」
信じられないような顔で、消え去ったドリーム2号のあった場所を見つめる。
まさか、これで元の世界に戻れなくなったのか――。
ドリーム号が消えたということは、そうなるのだろう。
愕然(がくぜん)とした。ほかに帰る手段が見つからない――。
フリオの頭の中が、真っ白になりかけたときだった。
「さぁ～て、さて！　続いてこちらも、ズラかるとしますかなぁ～っ！　じゃあまたな、首を洗って待ってるぜ！」
遠くからクライトの声が聞こえてきた。

フリオが振り返ると、反対側にドリーム1号の前に立っているクライトの姿を発見した。
　――あんなところに、隠していたのか。
　ちょうど柱の陰になった死角に、うまくドリーム号が隠されていたのだ。
「ちきしょう！　ドリーム1号を返しやがれ！」
　フリオは立ち上がって、ドリーム号のほうに向かった。
「おっと、近づくな！」
　クライトは片手を差し出し、フリオを静止させようとする。
「それ以上近づくと、このドリーム号に乗って逃げてやるぞ！」
「何言ってんだ！　近づかなくても、それで逃げるくせに！」
　構わずフリオは、ずんずん進んでいった。
「だ、だから待て！　近づくなって！　おい、聞いてるのか！」
　なぜかクライトが、あたふたしている。
　いつも逃げ足の早い奴が、どうしたのだろう？
　さらに近づいても、クライトはドリーム号の中に乗り込もうとする気配すら見せない。
　そしてついに、
「あひぃ～っ、もうダメだ、母ちゃん！　母ちゃ～ん！　どこ行ったの？　早く戻って

きて～っ！」
とうとう音を上げたように叫んだ。
クライトは、妻のポニーがそばにいないことを自分でバラしてしまったのだ。
「あれぇ？　どうしたんだよ？　相棒の奥さんは、どこかで迷子になってるのか？」
ずんずん突き進むフリオが、問いかけたときだった。
「――その女なら、ここにいるよ！」
遠くからルーティの声がした。
フリオが立ち止まって、声が響いたほうを見ると――なんとポニーが、ルーティとマリーの二人に捕まっているのが見えた。
「ああっ！　か、母ちゃん！　どうして！」
クライトは泣きわめくように、遠くにいる妻に訴えた。
「ごめんねえ、父ちゃん――ちょっと油断しちゃったんだよ～。いいから、父ちゃんだけでもお逃げ！」
「イ、イヤだい、イヤだい！　母ちゃんを置いていくなんて、そんなことできないよぉ～。死ぬまで一緒と誓ったじゃないか～」
クライトはドリーム１号の前で、駄々をこねるように身を左右に振る。
すると、

「おし、捕まえた！」
「えっ？」
気がつくと、フリオがクライトのすぐ隣まで来ていた。すでに襟首をしっかり摑んでいる。
「もう逃がさないからな～」
「あ、あひぃ～っ！」
こうして泥棒夫婦は、あっけなく捕まった。

＊＊＊

「――さあ、いろいろ話してもらおうか？」
数分後、ポニーとクライトは縄で縛られ、二人そろって床に腰を下ろしていた。周りを取り囲むのは『テイルズ　オブ』世界の英雄たちとフリオとキャロである。
泥棒夫婦を捕まえたのと同時に、ドリーム1号の奪回に成功した。
これで元の世界にも戻れるし、あとは手下の仮面なりきり師の二人を捕えるだけになったのだ。
しかし、

「う～ん、どうも腑に落ちないよなぁ……」
腕を組んだフリオが、納得のいかない顔をする。
キャロが訊ねた。
「どうしたのよ、フリオ？」
「いや……どうもさ、なんかあまりにあっさりすぎちゃって——」
「何言ってるの。それだけ、私たちが成長したってことでしょ？　それにこの二人、ただの泥棒だもの——問題は、あの仮面なりきり師コンビのほうよ！」
キャロの言うとおりだった。
泥棒夫婦は、とりたてて手強いというわけではなかった。
しかも捕えられたとたん、すっかり意気消沈して、小心者の盗っ人となってしまった。そんなポニーとクライトを見ていると、この二人が異世界の歴史を変えるなんていう大それた事を、本気でやっていたのかと疑いを持ちたくなる。
「なぁ、お前たち——もしかして、誰かに頼まれてやってたんじゃないのか？」
フリオが腰を屈めて泥棒夫婦に質問すると、彼らはビクッとして引きつった笑みを浮かべた。
「あわわわ……さ、最初はあいつら、本当に弟子になりたいと言ってきたんですよ～」
「そうそう、自分たちから盗賊の勉強したいって言うから——あたしたちも、手下にし

てやっただけなのさ～」
二人は泣きながら喋りだした。罪が軽くなるなら、何でも白状するつもりらしい。
自分たちから、あの手下の二人について語りだした。
「ぐすん……それがさ、いつの間にか……だんだん生意気になって、あたしらに向かって次はどこそこの世界に行けだの、こっちの世界に行けだの、ああしろ、こうしろって――うるさく、細かく、いちいち――」
「うっ、ううっ……そ、そうなんですよ～、それでうちの母ちゃん、もうストレスが溜まって溜まって、今日まで大変だったんですから～」
「父ちゃん！　何もそんなこと、ここで言うことないじゃないかっ！」
「うわぁ～、ごめんして、母ちゃん！」
「あ、父ちゃん、そんな泣かないで。あたしも少し言いすぎたから――ねっ？」
「う、うん……母ちゃん、ありがと……♥」
「いいのよん、父ちゃん♥」
どちらかが怒っても、すぐに仲直りする泥棒夫婦であった。
フリオは、思いきって訊ねることにした。
「――ということは、お前たちの黒幕は――あの仮面なりきり師だったのか？」
「！」

泥棒夫婦が、そろってギクリとする。どうやら図星(ずぼし)のようだった。
いや、もうとっくにバレているのだが。
「う、うわぁ〜っ！　ご、ごカンベンくださいなぁ！　おいらたちは、ただあいつらに指図されてただけで！」
「そうよ、父ちゃんの言うとおりよ！　あたしら、いつの間にか——あいつらの手下みたいにされちゃってたのよ〜」
「やっぱりな、そんなことだと思ってたよ……」
名探偵になったかのように、フリオは自分の顎に手を当てて考え込む。
「じゃあ、あいつらは何が目的で——世界の歴史を変えようとしていたの？　あんたたちのように泥棒が目的だったわけ？」
「いえ、それは違うようでした！　ただ——」
キャロの質問に、クライトは口ごもる。
「ただ、何よ？」
キャロは突っ込んで聞く。
とうとうポニーが、ヤケになったように白状した。
「あ、あいつら、今度こそ勝つとか、魔王を復活させるとか——いつも陰でコソコソ、ブツブツ、二人で言ってやがったのよ〜っ！」

「ま、魔王の復活ぅ⁉」
キャロが驚いて、きょとんとする。
「ど、どういうことなの……？」
ワケのわからない話に、キャロは助けを求めるようにリフィルのほうに振り返った。
しかし当のリフィルは、今回から助けは出さないと言わんばかりに無言で首を振った。
あ、そうだった……今は自分たちで考えて、問題を解決する課題を与えられているところだった。
キャロはそのことを思い出した。
見るとそのせいか、ほかの『テイルズ オブ』世界の英雄たちも、フリオとキャロに任せるかのように——みんな押し黙(おだま)っていた。
仕方なくキャロは、フリオに相談する。
「ねえ、フリオ……魔王の復活って？」
「オレたちの世界じゃ、聞いたこともない話だよな……」
フリオはまた考え込む。
どこか別の世界での話なのだろうか——。
「おい、その魔王の復活って——どこの世界の話なんだ？」
「ひぃぃぃぃ～っ、ミナクルの地下、レミ遺跡の地下最下層でございますよ～」

「なんだって！」
フリオは、クライトの胸ぐらを掴んでしまう。
「レ、レミ遺跡って――オレたちの町の下にある、あの古代遺跡のことか？」
「そうですよ～、ドリーム号が発見された――あの地下より、さらに下の下の地下！　そこに、ものすご～く強い魔王が眠ってるって、あいつらが二人で話してるの、こっそり聞いちゃったですよ～」
「レミ遺跡の地下に……魔王？　眠ってる？」
フリオは力が抜けたように、クライトの胸ぐらから手を離した。
そしてゆっくり立ち上がり、キャロのほうを見つめる。
「オ、オレたちの世界だったのか……」
「じゃあ、あの仮面なりきり師も――私たちの世界の住人なの？」
キャロが強張（こわば）った顔でつぶやく。
――いったい、誰なんだろう？
フリオはあらためて、泥棒夫婦に質問した。
「あの二人の名前は？　知ってるなら、教えてくれ！」
すると、クライトもポニーも言いづらそうに押し黙った。
「どうしたんだよ、なんで黙るんだよ？」

「い、いや……たぶん、言っても信じてもらえないでしょうから……」
「どうして？」
「だって、あまりに嘘っぽい話だから――」
クライトが涙目で、フリオに答える。
――これは演技なのだろうか。嘘泣きしているのだろうか。でも、フリオは考えた。もう逮捕されてしまった泥棒夫婦が、今さら嘘をついて――何のメリットがあると言うのだろう？
「いいから、言ってみてくれよ」
フリオは答えを促（うなが）した。
クライトはしゃくり上げていた息を整え、そして落ち着いた声で言った。
「は、はい……あいつらは、自分たちを互いに……フリオとキャロと……呼び合っておりましたです……ハイ……」
「！」
フリオは衝撃を受けた。
「まさか！　オレたち!?」
「どういうこと！」
「あたしらも途中から変だなと思って、あいつらがヒソヒソ話してるのを盗み聞きする

ようになったのさ――」
そしてポニーが、険しい表情になって言った。
「そのとき、二人で言っていたよ――百日後の〝失態〟を繰り返さないためにって！」
「――」
フリオもキャロも、息を呑んだ。
百日後の未来からやってきたホワイト博士――髪の毛が真っ白になるくらいのショッキングな出来事については、いっさい教えてくれなかった。
だが、その謎の断片が――ついに明らかになろうとしていた。

（下巻に続く）

工藤　治の著作リスト

ザールブルグの連金術師3
リリーのアトリエ
～祝福のワインを聖騎士に！～

マリー☆エリー☆リリー
～3人のアトリエ～

ユーディーのアトリエ
～グラムナートの錬金術士～

マリー☆エリー☆リリー2
～マリーの弟子～

モエかん
～緊急指令！　妹島を攻略せよ！～

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン3
フリオとキャロの大冒険 上

ISBN4-7577-2208-7

C0193 ¥640E

定価 本体640円 ＋税

発行○エンターブレイン

『テイルズ オブ』ワールドが危ない!? 何者かが英雄伝説を書き換えようとしているのを知ったフリオとキャロは、『テイルズ オブ』ワールドの英雄たちと一緒に時空を超えて冒険することになるのだけど……？ 人気の『なりきりダンジョン』シリーズ最新作が、ノベライズになって登場です!!